歯科医史ライブラリー

大日本歯科医学会 編：歯科沿革史調査資料

昭和元年(1926)12月25日発行

『歯科沿革史調査資料』とその編纂経過

昭和15年(1940)に日本歯科医師会が刊行した『歯科医事衛生史前巻』は70年余を経た現在もなお，日本における歯科歴史の基本文献となっている。同書は明治39年(1906)の旧歯科医師法公布30年記念事業として編纂発行が企画され，凡例では，「本書は大体明治元年から同39年までの史実を編纂したものである」と記し，

> 大日本歯科医学会に於て編纂した歯科沿革史調査資料（昭和６年12月出版）に負うところ甚だ大なるものがあったことを認め，深く謝意を表する

と述べているが，「昭和６年12月出版」は「昭和元年(1926)」の誤記である。発刊後に作成された正誤表にも訂正はないが，昭和２年３月発行『大日本歯科医学会会誌』第45巻の「記録（自大正15年９月至昭和２年２月）」欄には，大正15年11月26日の理事会報告事項として「歯科沿革史調査資料発行経過報告」があり，また「12月25日歯科沿革史調査資料（106頁）を発行し役員及評議員に発送せり」と記載している。

大正天皇の崩御は大正15年(1926)12月25日で同日に昭和と改元し，昭和元年は７日間しかない。『歯科沿革史調査資料』（以下「調査資料」）の奥付には「大正15年12月23日印刷，昭和元年12月25日発行」とあるが，昭和に改元した当日に印刷と発行したとは考え難い。当初は奥付に「大正15年12月25日発行」と印刷したのを発行時に急遽差し替えたと推測されるが，いずれにしても翌昭和２年(1927)の２月頃までには公刊されたのだろう。現在は国立国会図書館の近代デジタルライブラリーで公開され，pdf画像がインターネット上で閲覧できるが，公的機関では愛知教育大学と龍谷大学図書館が，そして順天堂大学医学部医史学教室山崎文庫が同『調査資料』を所蔵している。

大正４年に開催された日本歯科医学会（大日本歯科医学会の前身）総会において調査会を設け，日本における歯科沿革史を調査することになった。委員長には榎本積一が就任したが，幹事に選任された門石長秋は，大正13年に「歯科沿革史調査会記録竝に調査資料罹災焼失に就て」と題してそれまでの経過について，

越えて大正６年も引続き，松本文学士を督して調査を進め，大体史料材料（主に履歴書，伝記業績，之れに伴う写真及参考品）等が蒐められたのでありましたが，委員長には此頃より（多分６年初秋の候と覚ゆ）宿痾が再発されて，此調査のことに没頭せらるることが出来ないことに成られました。…大正７年の12月頃と覚えます，当時の学会会長でありました花澤鼎氏が，榎本病委員長に深く同情せられて，同委員会の一切の仕事を引受けられ，其未調査にある分，其他外国人に関する方面の分も夫れ夫れ海外に照会し発して詳細に調査を進むることとなり，調査は着々進行致しました。

大正８年の春には小幡英之助及びエリオット氏其他内外人の日本の歯科沿革史上に掲載さるべき主なるもの49人の伝記等が大体蒐集せられて，愈々茲に印刷に附することになり（別冊）紙数232頁のものが同年５月に出来たのであります。此印刷物は大正８年中に本会の調査委員其他50有余の前記関係者の方々に配附をなし，夫れ夫れ正誤をなして貰うことになり，大体御返事を得たのであります。

と報告したのち，大正７年12月に死去した榎本積一の遺志に基づき，遺族の榎本美彦より翌８年２月に524円が事業費として寄附されたこと，その基金は利子ともに600円80銭となったこと，そして大正９年には新会長に就任した高橋直太郎に「一切の調査資料，其他参考品等を挙げて引継ぎ」を行ったと述べた。

また榎本委員長逝去後は空席だった調査会委員長に血脇守之助が大正10年就任，同12年４月高橋直太郎の後任として門石長秋が学会長に就任し，調査資料等も学会事務の引続ぎとともに事務所である神田駿河台の会長宅に保管することになったと経緯を語り，門石は続けて，

昨年９月１日の事変に際しては，其事務所に於て常時備附の非常行嚢中に納めて，２回迄安全地帯なりと信ずる地点に迄搬出し置きたるも，遂に学会書類中の協議員名簿と共に本調査会の史料材料の原稿は之れを焼き尽くされて，唯残りたるものは史料の参考品である小幡英之助氏の免許状の写真と，其他５枚の写真丈けに成りまして何とも遺憾の次第であります。併しあの大変の直面しては，如何とも夫れ以上致し方がなかったので，勿論自己の重要材物も一品残さず烏有に帰した次第であります。

と述べている。そして昭和２年４月９日に神田区駿河台の主婦之友社講堂で開催された大日本歯科医学会評議員総会での議事録では，

○議長（渡邊慶三郎）それでは何も御異議はありませぬか（「異議」なしと呼ぶ者あり）御異議がないようですから次の事項歯科沿革史調査報告をいたせます。

○田村（一吉）副会長　これは印刷にしてありませぬが歯科沿革史調査報告と申しましても特に改まって出来た調査資料ではありませぬが，会誌にも報告してある通り歯科沿革史調査資料は花澤さんの会長時代に集めて居ったのであります，それで其資料の煙滅しないように何か本にでもした方が宜しかろうと言うことになりまして，丁度先頃これを106頁の本にいたして評議員の方々に送ったのであります。その費用は故榎本積一先生からの寄附になった金500円の中，金253円60銭で，200部だけ印刷したのであります。それを役員並に全国評議員と東京所在の図書館に配付し事務所にはまだ５部ばかり残って居ります。そこで金253円60銭は後で報告する決算の会計報告にある特別の項目で決算に支出になって居ります，唯だそれだけの報告でありまして，別に調査したと云う新しい意味ではなく本を拵えるのに特別の金を使ったというだけの報告であります。

と記載しており，「大正15年度歳入歳出決算」歳出の項には「歯科沿革史調査費253.600円，歯科沿革史調査資料印刷費，故榎本積一氏寄附金」とある。

以上の経過が示すように『調査資料』は200部しか印刷されなかった稀覯書だが，大正15年11月１日付けの同書巻頭言では，

> 大正５年より本学会に於て歯科沿革史調査を行うことに定まり，其第一期として明治18年迄を調査することになし，調査委員を挙げて調査中に属するものなり。未だ調査済に至らすと雖も，該資料の保存を図らんが為めに未校訂の儘茲に上梓することにせり。

と述べ，イーストレーキら外国人５名，小幡英之助ら日本人44名の略伝と，小幡英之助，高山紀斎，渡邊良斎の開業時の治療術式を収載している。調査対象が明治18年までならば，明治17年に歯科医術開業免状を下付され，歯科医籍第１号に登録された青山千代次から第16号の打田良三（明治18年12月26日登録）までも含まれるはずだ。しかし同書に掲載されている日本の歯科医人は，医籍に登録された内務省免状所持者（旧試験及第者）25名（歯科22，口中科１，内外科２），従来開業医（各府県からの仮免状医）６名，同18年に各府県の「入歯歯抜口中療治接骨営業者等取締規則」に基づき営業鑑札を付与された入歯歯抜口中療治者12名，そして本邦の歯科器材輸入商の嚆矢である清水卯三郎の計44名である。以下同書の目次にしたがえば，

井野　春毅	旧試験及第（内外科）
林　　譲治	旧試験及第（歯科）
鈴木直之丞	旧試験及第（歯科）
山田　利充	従来開業（内外科）
原田　朴哉	旧試験及第（歯科・内外科）
長谷川保兵衛	鑑札営業
渡邊　良齋	従来開業（口中科）
黒田虎太郎	従来開業（内外科）
雨夜孝太郎	従来開業（科目不明）
免養　九一	従来開業（口中科）
佐治　　職	旧試験及第（口中科）
奥田　又郎	旧試験及第（歯科）
増島　省三	旧試験及第（歯科）
堀内清顯(太田吉三郎)	旧試験及第（歯科）
關川　重吾	旧試験及第（歯科）
俣野　景範	旧試験及第（歯科）
高田　直友	旧試験及第（歯科）
桑原　敬忠	旧試験及第（歯科），医術開業試験及第
伊澤　道盛	旧試験及第（歯科）
池野谷貞司	鑑札営業
富永　省吾	旧試験及第（歯科）
鈴木　玉齋	鑑札営業
瓜生源太郎	旧試験及第（歯科）
渡邊　晋三	旧試験及第（歯科）
伊藤　順二	旧試験及第（歯科）
高木五三郎	旧試験及第（歯科）

長谷川友二	旧試験及第（歯科），従来開業（内外科）
庄司才之進	旧試験及第（歯科）
鈴藤(佐川)文一郎	旧試験及第（歯科）
神翁　金齋	鑑札営業
エリオット	アメリカ人歯科医
西村　輔三	旧試験及第（歯科）
桐村　克己	旧試験及第（歯科）
小幡英之助	旧試験及第（歯科）
高橋富士松	鑑札営業
竹澤國三郎	鑑札営業
清水卯三郎	瑞穂屋（歯科器材輸入商）
吉田　仙正伝	鑑札営業（のちに従来開業口中科）
高山紀齋	旧試験及第（内外科）
イーストレーキ	アメリカ人歯科医
ポルキンス	アメリカ人歯科医
松添　寳一	従来開業（口中医）
佐藤　　重	鑑札営業
松下　良貞	鑑札営業
杉原　玉齋	鑑札営業
ギューリック	アメリカ人歯科医
松井　源水	鑑札営業
長井　兵助	鑑札営業
アレキサンドル	フランス人歯科医

で，小幡や高山らの小伝と当時の治療術式は，山田平太の『日本歯科医学史』（昭和９年）にも転載され，同15年の『歯科医事衛生史前巻』には松井源水，長井兵助を除く42名が『調査史料』の記述通りに収録されている。同書の伝記欄は今田見信の稿によるというが，その骨子は『調査資料』を基にしており，イーストレーキ門下の安藤二蔵や伊澤信平，一井正典，石原久ら「留学系」略伝が追加された。繰り返しとなるが，典拠とした『歯科沿革史調査史料』は，収集した基本資料が関東大震災により焼失したため，他の諸資料との校合をなされずに1926年に「未校訂」のまま刊行された。本ライブラリーでは旧漢字を常用漢字に改めた以外は原文のまま掲載したが，各人の小伝と挿話は「史話」として興味深くても，「史実」としての検証は行われていない。特に巻末の「開業試験沿革」や「年表」は誤謬が多く現在までの歯科沿革史伝承の祖形といえるので，近年における歯科歴史研究の成果を併せ参照していただきたい。

大日本歯科医学会 編

歯科沿革史調査資料

昭和元年12月25日発行

巻頭言

大正五年ヨリ本学会ニ於テ歯科沿革史調査ヲ行フコトニ定マリ、其第一期トシテ明治十八年迄ヲ調査スルコトニナシ、調査委員ヲ挙ゲテ調査中ニ属スルモノナリ。

未ダ調査済ニ至ラズト雖モ、該資料ノ保存ヲ図ランガ為メニ未校訂ノ儘茲ニ上梓スルコトニセリ。

大正十五年十一月一日

社団法人　大日本歯科医学会

目　次

井野春毅伝	06	鈴藤文一郎伝	19
林　譲治伝	06	神翁金齋伝	20
鈴木直之丞伝	07	エリオット伝	21
山田利充伝	07	西村輔三伝	22
原田朴哉伝	07	桐村克己伝	23
長谷川保兵衞伝	08	小幡英之助伝	24
渡邊良齋伝	09	高山紀齋治療術式	27
黒田虎太郎伝	10	高橋富士松伝	29
雨夜孝太郎伝	10	竹澤國三郎伝	30
免養九一伝	10	清水卯三郎伝	31
佐治　職伝	11	吉田仙正伝	31
奥田又郎伝	11	高山紀齋伝	32
増島省三伝	12	小幡英之助開業当時ニ於ケル歯科医術	36
堀内清顯伝	12	イーストレーキ伝	43
關川重吾伝	12	ポルキンス伝	43
俣野景範伝	13	松添寳一伝	44
高田直友伝	13	佐藤　重伝	44
桑原敬忠伝	13	松下良貞伝	45
伊澤道盛伝	13	杉原玉齋伝	45
池野谷貞司伝	15	ギューリック伝	45
富永省吾伝	16	松井源水伝	45
鈴木玉齋伝	16	長井兵助伝	45
瓜生源太郎伝	17	アレキサンドル伝	46
渡邊晋三伝	17	渡邊良齋初期ノ術式	47
伊藤順二伝	17	開業試験沿革	48
高木五三郎伝	18	年表	49
長谷川友二伝	18	附表	(略)
庄司才之進伝	19		

井野春毅伝

井野春毅ハ嘉永五年九月二十四日ヲ以テ肥後国菊池郡合志村大字竹迫町ニ生ル本姓ハ衞藤幼名ハ徳太郎ト呼ブ父ハ直左衞門農ヲ業トス母ハたに春毅ハ其ノ長男タリ明治九年頃同国阿蘇郡古城村大字三野ノ医師井野齋（イツキ）ニ養ハレ其ノ氏ヲ冒ス井野氏ハ豊後ノ旧族ナリ天正ノ頃敗レテ農民トナリ後細川氏ニ属ス林太郎ト云フモノニ至リ初メテ医業ニ従事シ齋ニ至ルマデ十二世ナリト云フ

明治七年熊本医学校ニ入学シ蘭人マンスチルトニ従ヒ内科外科ヲ修メ九年業ヲ卒フ乃チ同校附属病院当直医トナル

十年西南ノ役起ル従軍シテ医務ニ鞅掌シ功アリ賞状及賞与金ヲ受ク

此年悪疫流行セシカバ警察医トナリ検疫ノ事務ニ従事シ東京地方衞生会ヨリ賞状及賞与金ヲ受ク

十一年内務省医術開業試験ニ及第シ内外科医術開業免状ヲ得タリ

十二年警察医ヲ辞シテ小幡英之助ノ門下ニ入リ歯科医学ヲ修ム後米人ポルキンスニモ従ヒ其ノ業ヲ研ケリ其ノ歯科ニ転ゼシハ当時完全ナル歯科医ナク其歯科ヲ標榜スルモノハ不完全ニシテ且幼稚ナル「歯抜キ」ノ類ノミナリシヲ見テ憤慨セル結果ナリト云フ

カクテ十四年ニ至リ初メテ歯科医業ヲ神田区今川小路ニ開ケリ

十七年小幡英之助ノ推薦ニヨリテ東京歯科医術開業試験委員トナル幾モナクシテ制度改正セラレシカバ一年許リ其ノ職ニアリテ辞シキ

十八年宮内省皇后宮職臨時御用掛トナリ奏任待遇ヲ受ク

十九年韓国京城ニ赴キシガ二十年浦塩斯徳ニ到リ二十一年ハバロフスクニ入リ露領ノ地ニ在リテ業ヲ行フコト二年余二十三年ヲ以テ帰朝セリ

帰朝ノ後犬養毅、尾崎行雄、田中賢道、江崎信太郎、宗像政、村田則友、赤羽信太郎ノ諸氏ト謀リ北海道ノ開墾牧畜ヲ企テ二十四年三月十二日後志国瀬棚郡利別原野ノ貸下ノ許可ヲ得布哇ヨリ帰朝セル経験家ヲ移住セシメントセリ

其ノ後神田淡路町ニ於テ業ヲ行ヒシガ三十七年ニ到リ思フトコロアリ歯科ノ業ヲ罷メ天草ニ赴キ天草無煙炭鉱株式会社（資本金百万円）ヲ経営セリ

四十一年九月再ビ歯科医業ヲ清国上海南京路二十号ニ開キ其ノ名遠近ニ聞エシガ大正元年十一月二十六日遂ニ其地ニ没セリ年六十一

業ヲ行フコト三十年許其ノ人ヲ誨フルヤ懇切丁寧ヲ極ム故ニ其ノ門ニ入リ成業セルモノ甚ダ多シタヾ其生存セルモノヲ挙グルモ

加藤現之助　平岡頼一　清水杢平　佐藤丈次郎　野田徳次　伊藤吉太郎

等アリ

室ハ古閑（コガ）太直ノ次女宇和子二男アリ長ヲ春隆ト云ヒ次ヲ春韶（ハルアキ）ト云フ共ニ父業ヲ継ガズ

林譲治伝

林譲治ハ嘉永三年十一月一日江戸ニ生ル父ハ六右衞門ト云フ家世々幕府ノ御家人タリ維新ノ際徳川氏ニ従ヒテ沼津ニ移ル後分家シテ一家ヲ起ス

明治七年志ヲ立テヽ横浜ニ至リ米人某ニ従ヒシガ八年ニ至リ米国歯科医ポルキンスノ門ニ入リ歯科医術ヲ学ビ十四年九月更ニ佐治職ニ師事シテ其ノ技ヲ磨キ十五年五月二十日歯科医術開業試験ヲ横浜ニ受ケテ合格セリ

コノ時ノ試験委員ノ氏名明カナラズ問題ハ歯牙ニ分布スル動脈ノ外他ヲ逸セリ

十六年初メテ横浜市野毛町近藤病院ニ開業シ後境町ニ移ル術ハ技工ヲ主トシ護謨床義歯ニ長ズ
其ノ門ニ入リテ一家ヲナセルモノ甚ダ多シ
　高木憲太郎　　齋藤英三郎　　坂田石之助　　中村戀之助　　塩澤勝寛
嗣子篤父業ヲ嗣ギ米国ニ留学シテドクトルノ学位ヲ有ス

鈴木直之丞伝

鈴木直之丞ハ安政四年七月六日名古屋ニ生ル
明治十四年東京ニ出デ富永省吾ノ門ニ入リテ歯科医学ヲ修メ更ニ横浜ニ赴キテ渡邊省庵ニ外科医学ヲ学ビ十五年五月原田朴哉ト倶ニ歯科医術開業試験ヲ横浜ニ受ケテ及第セリ
後名古屋ニ業ヲ開キ今日ニ及ブ
其ノ門ヲ出デヽ一家ヲナセルモノ左ノ如シ
　伊東吉次郎　　水野鍬太郎　　鈴木英一　　日比野八太郎　　岩間儼太郎
　玉木秀作　　大江末光　　中村正平　　井上眞平

山田利充伝

山田利充ハ安政元年十二月二十六日豊前北海部郡二王座村ニ生ル家世々士籍ニ班ス父ハ利長ト云ヒ母ヲますト云フ利充ハ其ノ次子ナリ
明治八年十二月横浜ニ至リテ米国歯科医エッチ・エム・ポルキンスノ門ニ入リ歯科医学ヲ修メポルキンス帰国ノ後ハ同門ノ先輩西村輔三ノ教ヲ受ケタリ
十三年学就リテ業ヲ横浜市港町ニ開キシガ後〔年月不詳〕新潟県長岡市ニ移リ以テ今日ニ至レリ
長谷川友二ノ伝ニ明治二十年マデ新潟県下ニハ他ニ一人ノ開業者ナカリシ旨ヲ云ヘリ然ラバコノ人ノ長岡ニ開業セルハソノ後ノコトナル可シ
其ノ門ヲ出デヽ一家ヲナセルモノ左ノ如シ
　財津又三郎　　中村勇三郎　　有本和貴　　山田丑造　　安達一光
室ハ南都陳ノ女のぶ三男三女アリ

原田朴哉伝

原田朴哉ハ文久元年八月十八日ヲ以テ美濃国恵那郡遠山村字久保原ニ生ル家世々医術ヲ業トセリ父ヲ養見ト云ヒ母ヲ磯子ト云フ朴哉ハソノ長子タリ
明治ノ初医学ニ志シ県立医学校ニ学ビ得ルトコロアリ十四年四月ニ至リ横浜港ニ出デ在留ノ洋医ニ就キテ歯科学ヲ修メシガ翌十五年五月其ノ地ニテ開業試験ヲ受ケコレニ合格セリ
十七年十月二十四日海軍軍医補トナリ歴進シテ海軍大軍医ニ至リソノ間病院勤務ヲ命ゼラレ艦隊軍医長ノ職ヲ帯ブ
二十七年日清役起ルヤ則チ従軍ヲ命ゼラル
三十年公務ヲ以テ北米合衆国ニ出張ヲ仰付ケラレシガ特命ヲ以テ加州歯科大学ニ入学シソノ選科ヲ修業ス
三十二年十月帰朝ス海軍軍医学校歯科教官兼幹事トナリ軍医学生ニ歯科学及ビ口腔外科学実地臨床講義ヲナス
三十七年二月日露戦役起ルソノ六月従軍ヲ命ゼラレ第一艦隊兼第二第三艦隊附トナリソノ任務ニ服

セリ
三十八年八月五日累進シテ海軍軍医中監ニ任ジ従五位ニ叙スマタ戦役ノ功ヲ賞セラレ勲三等ニ叙セラレ一時賜金ヲ受ク
ソノ軍医学校教官タルヤ応急処置法ヲ軍医官ニ教授スル必要ヲ唱道セシガ其ノ議採用セラレタリマタ日清日露戦役ニ当リテハ歯科医師ヲ嘱託トシテ従軍セシメタリ他施設スルトコロ少カラズ
四十年十二月一日願ニ依リ予備役ニ編入セラル
其ノ年九月有志者共立歯科医学校ヲ設ケ名ヲ日本歯科医学専門学校ト改メ朴哉ヲソノ校長ニ推セリ則チ校長ニ任ジテ校務ニ従事セリ四十三年六月一日ニ至リ同校ハ指定学校トナリソノ基礎漸ク堅シヨリテ其ノ年九月十日校長ノ任ヲ辞セリ
四十一年六月十日東京市麻布区飯倉片町十六番地ニ開業シ治術ヲ施セシガ大正六年三月三十一日ニ至リ業ヲ廃セリ

長谷川保兵衛伝

長谷川保兵衛〔或ハ略シテ保トモ云フ〕ハ天保九年三月二十九日ヲ以テ江戸本所両国ニ生ル父ヲ五郎兵衛ト云ヒ家世代々絲商タリ
保兵衛初メ鼈甲商ニ身ヲ起シタルガ後横浜ノ次第ニ繁盛ニ向フヲ以テ雄図禁ジ難ク遂ニ明治二年ヲ以テ横浜石川台町ニ移レリ
会々米国歯科医師イーストレーキト云フモノ横浜ニアリテ業ヲ開キシガ即チコレニ雇ハレテ雑用ヲ便ジ兼ネテ熱心ニ其ノ技術ヲ見学セリ然ルニ其ノ年十二月イーストレーキ我国ヲ去ルコトヽナリシカバ保兵衛ハ官許ヲ得テコレニ随行シ明治二年十二月ヨリ明治六年五月マデ三年六ケ月ノ間上海ニアリ明治六年五月ヨリ明治八年十二月マデ二年四ケ月ノ間独逸国ニアリキ此頃品川彌次郎事ヲ以テ独逸国ニアリ歯痛ヲ以テイーストレーキニ治ヲ請ヒシガ保兵衛ノアルノヲ見テ数次コレト歓談シ遂ニ勧メテ帰朝セシメ即チ明治九年三月ニ同伴シテ横浜ニ着セリ
「デンタルビー」ニ保兵衛ノ洋行ヲ慶応二年其ノ帰朝ヲ明治八年トセルハ誤ナリ
サテ帰朝ノ後ハ居ヲ本所横網町二丁目九番地ニトシ患者ノ診療ニ従事シタリ素ヨリ品川子爵ノ後援アリシコトナレバ縉紳ノ間ニモ病家多カリキ交際非常ニ広ク多方面各階級ニ及ベリ同業者ニシテ時々訪問セシハ小幡、高橋、池野谷、桐村、渡邊、神翁ノ諸氏ナリキ
明治二十一年六月十日没ス年五十一法号ヲ大信院釋宏善居士ト云フ、浅草清住町門跡寺内緑泉寺ニ葬ル
其ノ門ニ入リ名ヲナセルモノ左ノ如シ

石橋甲子郎　河村甲子次　久山時夫　後藤武輔　安藤仁茂　山本廣吉
牧野定吉（二代目長谷川保）　佐藤　重　田村伊之助　角　茂雄

見学ニ来レルモノヽ如キハ勝テ数フベカラズ。室ヲ喜久子ト云フ一女ヲ挙グ幼ニシテ亡ス、明治十五年旧秋田藩士近藤禄二氏ノ二男鶴二ヲ養嗣子トナスコレマタ不幸明治二十三年ヲ以テ死ス、時僅カニ二十二
施術範囲ハ殆ンド治術方面ナリシガ、コトニ義歯ハ金床義歯継続歯以外ハ為サヾリキ其ノ最モ長ズルトコロハ金充填ニシテ現今ノ進歩セル技術者モ能ク其ノ右ニ出ヅルモノ少カラン、ソハ今日ニテハ金冠継続スル磨耗症ノ如キモ一乃至二ノ合釘ヲ用ヰ長時間ヲ費シテ形成充填セシト云フニテモ知ラルベキカ、「インジン」ハ歯根剔刮或ハ臼歯部金充填ノ研磨以外ニ殆ド使用セズ、窩洞ノ形成根管開大ニハ「チセル」「エキスカベーター」ノミヲ使用スルタメ自カラ好ム形状ニ製作セラレタリト云フ、ナホ金充填ヲナス時ノ保持溝ハ「チセル」ヲ用ヰ起始点モ手用ノ「ドリール」ヲ製作シテ

用ヒタリ充填ハ手圧又ハ槌圧ニシテ槌ハ木槌ヲ用ヒタリ充填器ハ其ノ数百数十種ヲ具ヘタリ、無髄歯治療ハ最モ細精密ニ行ヒ薬品消毒ヨリ寧ロ器械的ニ根管ヲ拡大シ理学的消毒ヲ行ヒタリ消毒薬トシテ石炭酸ヲ使用シ根管充填ニハ植物性「クレオソート」ヲ用フ抜歯ノ時ニハ「クロロホルム」ノ歯齦塗布ヲ行ヒ抜歯後止血薬ハ拈礬単寧酸等ヲ用ヒタリ

渡邊良齋伝

渡邊良齋ハ弘化二年八月十五日江戸下谷長者町ニ生ル、江戸ノ市医法印渡邊皐齋ノ長子ナリ、皐齋ハ出自ヲ詳カニセズ、或ハ曰ク浪士ナリ、少ニシテ市医法印渡邊皐伯ノ門ニ入リ口科ヲ修メ遂ニ養ハレテ其ノ氏ヲ冒シ後仁和寺宮ノ允許ヲ得テ法印ト称ス、頗ル義歯ニ長ズ、良齋ハ幼ヨリ父ニ就キテ技術ヲ学ビ造詣スルコト深シ、マタ父ノ格式ニヨリ仁和寺宮ニ請フテ法眼トナル、明治元年良齋年二十四、故アリテ父家ヲ去リ東京下谷御徒町ニ業ヲ開キシガ二年神田旅籠町ニ移レリ

良齋ハ彫刻義歯ノ製作ニハ非凡ノ技術ヲ有シタルガ明治八九年ノ頃東京京橋ニ於テ仏人アレクサンドルナルモノ西洋入歯ノ業ヲ開クニ及ビ大ニ其ノ法ヲ研究セント欲セシガ機会ヲ得ズ両国ニ開業セル歯科医長谷川保ノ頗ル金充填ニ長ゼルヲ聞キ行キテ其ノ口授ヲ受ケ己レノ長技タル義歯製作ノ術ヲ伝ヘタリ、マタ舶載歯科教科書ノ嚆矢トモ云フベキハリスノ歯科学ヲ購入セルモ此ノ頃ノ事ナリ

此頃小幡英之助ハ業ヲ京橋区采女町ニ開ケルガ当時新式ノ歯科医術ヲ行フモノトテハ小幡、長谷川、渡邊ノ三人ニ過ギズ、且ツ治療技工ノ材料モ極メテ得難カリシカバ協力シテ斯業ノ発達セシムルノ便ナルヲ察シ明治九年十年ノ交三氏胥謀リ日本橋倉田屋ニ於テ懇親会ヲ開ケリ

此時三氏ノ外小幡門下タル桐村克己倉成愼治渡邊ノ門下タル富安晋モコレニ列席セリ本邦最初ノ歯科医ノ会合ナルベシ其後長谷川ノ治療ニ要スル亜砒酸ヲ渡邊ガ心配シテ供給セシコトモアリ桐村ガ義歯ヲ渡邊ノ許ニ借リニ来ルコトモアリ富安ガ小幡ノ許ニ蝋ヲ借リニ行ク等三氏ノ提携ハ頗ル見ルニ足ルモノアリキ

十年第一回内国勧業博覧会開催セラルヽヤ良齋ハ黄楊木鯱蝋石等ノ材料ヲ以テ之レニ彫刻ヲ施シ製作シタル義歯数種ヲ出品シテ龍紋賞牌ヲ得タリ

十三四年ノ交良齋ハ小幡英之助ヲ訪ヒ雑談ノ余之ニ語リテ曰ク「方今歯科ノ術金充填ノ法ニ於テハ天下マタ先生ニ及ブモノアラザルベシ然レドモ義歯ノ一事ニアリテハ良齋敢テ先生ニ譲ルモノニアラズト」蓋シ自恃スルコト厚キナリ

十四年内国勧業博覧会ノ開設セラルヽニ及ビ口蓋破裂補綴装置護謨木（床ヵ）義歯等数種ヲ出品シ有功二等賞牌ヲ得タリ

十八年神田区駿河台南甲賀町ニ移転ス

二十一年「歯科学」ト題スル書ヲ著ハス蓋シ斯学ニ貢献セントスルナリ

此頃ヨリ思ヲ陶歯製造法ニ潜メ研究懈ルトコロナシ其ノ結果二十三年八月二十二日ニハ陶歯ノ専売特許ヲ受ケ次デ二十四年八月一日ニハ蟻孔ヲ有スル陶歯ニヨリ同年十二月十七日ニハ洋銀鋲陶歯ニヨリ二十六年一月二十六日ニハ陶歯焼用「マッフル」ニヨリ同年四月四日ニハ歯頸部ニ発暈ヲナシタル陶歯ニヨリ合計五種ノ専売特許ヲ受ケタリ

三十六年推サレテ大日本歯科医学会名誉会員トナル

四十年東京勧業博覧会ニ於テ他年ノ研究ニ係ル陶歯数歯ヲ出品シ一等賞牌ヲ得タリ

四十二年九月十日二豎ノ侵ス処トナリテ没ス年六十五

其ノ門ニ入リ業ヲ成セルモノ左ノ如シ

富安　晋　　田中順太郎　　辻　康太郎　　千田　茂　　森田駒次郎

為人精力絶倫剛直端毅志操一貫ノ気象アリ事ニ当リ熱心忠実ヲ旨トセリ性梅花ヲ好ミ盆栽ヲ作リテ

自娯シ秀逸ノモノハヨク人ニ与ヘタリ頗ル愛国心アリ外国ノ事物ヲ排斥シ護謨迄モ自カラ作ラントセリ嘗テ某宮家ニ伺候ヲ命ゼラレ「フロックコート」ヲ着用スベシトアリシカバ白木屋ニテ国産ノ緞子ヲ買ヒ之ヲ以テ「フロックコート」ヲ裁リ着用シテ参殿セリト云フ極端ニ似タレドモ守ルトコロアルヲ見ルベシ室ハ富安直中ノ女即チ富安晉ノ姉タリ三男三女アリ長男ハ夭ス次男ヲ悌三男ヲ威ト云フ長女孝子ハ吉井友志ノ室トナリ二女政子ハ農学士池上幸健ノ室トナリ三女富貴子ハ木下成美ノ室トナル

黒田虎太郎伝

黒田虎太郎ハ安政元年九月一日越後高田ニ生ル父ヲ秀山ト云ヒ母ヲ理楚子ト云フソノ長子タリ
年十一ニシテ家祝融氏ノ炎ニ遭ヒ信濃国更級郡ニ移ル
明治ノ初東京ニ出デ文学博士木村正辭ニ従ヒ開成学校九段学舎等ニ学ビシガ九年横浜ニ出デ英人ゴラオンノ斡旋ヲ以テ英国ニ航ス居ルコト四年其ノ間エリオットニ師事シグラスゴー、エヂンバラ、諸大学ニ見学セシコトアリ十四年帰朝シテ米国歯科医エッチ、エム、ポルケンスニ就キテ業ヲ得タリ
ポルケンスノ帰国ハ明治十一年ナリコノ人ノ十四年ニ帰朝シテ従学セリト云フハ疑ハシナホ研究ヲ要ス
十六年八月横浜弁天通三丁目ニ業ヲ開キ三十二年山下町八十七番地ニ移リ三十九年今ノ処〔同町七十七番地〕ニ転ズ
其ノ門ニ入リテ一家ヲナセルモノ左ノ如シ
　高村英昌　　下國　翼　　松尾彦太郎
室ハ小田原藩士小岩義俊ノ女はまニシテ数子アリ長ヲ秀博ト云フ農学士タリ

雨夜孝太郎伝

雨夜孝太郎ハ安政三年六月二十八日ヲ以テ播州明石ニ生ル明石藩ノ医官雨夜春石ノ長子タリ
明治九年以来医業ヲ神戸多聞通二丁目ニ行ヒシガ其後同所居留地ニ開業セシ米国歯科医ドクトルギューリックニ従ヒテ歯科学ヲ修メ十四年ニ至リ同所相生町ニ於テ始メテ歯科ノ医業ヲ開ケリ
ギューリックハ米国ノ医師ニシテ兼テ歯科ノ治術ニ通ゼリソノ来朝ノ年月ハ詳カナラズ佐治職ハコノ人ノ助手タリシコトアリ佐治ノ伝ニハノ人ノ来朝ヲ十三年トセリ然ル時ハ雨夜ノ従学ハ一年許ニ過ギザリシニヤナホ研究ノ余地アルベシ
カクテ神戸ニアリテ治ヲ施スコト久シキニ及ビシガ特ニ金充填及ビ有床義歯ノ術ニ長ジマタ器械ノ製作ニツキテモ創意ノ点改良ヲ加ヘシ点少カラズ
後〔年月不詳〕支那ニ赴キ上海乍浦路ニアリテ業ヲ行ヒシガ明治十八年二月二十四日ヲ以テソノ地ニ没セリ遺骨ヲ夢野墓地ニ埋ム
ソノ門ニ入リテ一家ヲナセルモノ左ノ如シ
　藤井和三郎　　小泉猶次郎　　金山清行　　打田良三

免養九一伝

免養九一ハ天保十二年九月一日ヲ以テ下関田中町ニ生ル父ヲ紀三郎母ヲじゅんト云ヒ其ノ長子タリ
其家歯科ヲ業トスルコト八世皆紀三郎ト称ス夙ニ家業ヲ修メテ業ヲ行ヒシガ後東京ニ出デ明治七年

一月ヨリ仏人アレクサンドルニ従フコト一年翌八年一月ヨリ神翁金齋ノ門ニ在ルコト二年洋式歯科医術ヲ学ビ更ニ十年三月ヨリ十三年三月マデ三年ノ間義歯ノ術ヲ修メタリ
其年郷里ニ帰リテ業ヲ開キシガ十五年十一月十日歯科医術開業免状ヲ得タリ
後大阪ニ移ル施術ノ範囲ハ主トシテ義歯製作及技工方面ニシテ業務外ニ於テモ技工的ノコトヲ好メリ
同業間ノ交際ハ極メテ熱心ニシテ大阪歯科医師会関西歯科医師会等ノ設立ニ功アリ
明治三十二年二月十八日死ス年五十九大阪東区小橋元町寿光寺ニ葬ル
室ハ伊藤彦兵衛ノ女みつ三男三女アリ男政一ハ箕裘ノ業ヲ嗣グ

佐治職伝

佐治職（ツカサ）ハ嘉永六年六月十日ヲ以テ摂津有馬郡三田屋敷町ニ生ル家世々士班タリ父ハ伍左衛門母ヲさくト云ヒ職ハソノ五男ナリ
明治七年志ストコロアリ横浜ニ出デ米国歯科医エリオットノ門ニ入ル
エリオットハ当時横浜元居留地ニ七十五番地ニ開業セリ職ノ入門セシ頃ニハ小幡英之助モコノ人ニ就キテ修学セリ
職ノ記憶ニヨレバエリオットノ家ニアリシ松岡萬蔵ト云フハ微者ニシテ門生ノ中ニアラズエリオットガ弟子タルヲ許セシモノ英人ポート小幡英之助佐治職ノ三人ノミナリト、松岡ノコトハ桐村克己ノ伝中ニ附ス
ソノ門ニ在ルコト二年エリオット帰国セシカバ職モ郷里ニ帰リ兵庫県ニ於テ開業試験ヲ受ケタリ
コノ時兵庫県ニハ歯科ノ試験ト云フモノナカリシカバ職ハ口中科トシテ受験セリト云フ
明治十年ノ頃大阪緒方病院ハ歯科部ヲ設ケテ職ヲソノ主任ニ聘シタリ、職コヽニ於テ精励事ニ当リ大ニ治術ヲ行ヘリコレ大阪ニ於ケル近世歯科術ノ権輿ナリ
後〔年月不詳〕京都同志社英学校ニ入リテ普通学ヲ修メタリ
カクテ明治十三年ニ至ルヤ米国歯科医ギューリックノ横浜ニ来リテ業ヲ開クアリ職ハ此ノ人ノ許ニ赴キテ助手トナリ傍ラ実地ノ研究ヲ積メリ
十八年ニ至リギューリック米国ニ帰リシカバ職ハコレニ随ヒテ米国ニ渡リ加州桑港ノ歯科医カーグスウェルニ就キテ二ケ年間研究ヲ重ネ二十年ヲ以テ帰朝セリ
其後大阪ニ業ヲ開キ治術ヲ行フコト十有八年ニ及ビシガ明治三十八年病ヲ獲テ郷里ニ帰リ優游自適今ニ及ブト云フ
室ハ古立岩吉ノ女貞子子女ナシ

奥田又郎伝

奥田又郎ハ安政五年九月二十二日ヲ以テ生ル父ハ医ヲ業トセリ
明治十四五年頃東京ニ至リ高山紀齋ノ門ニ入リテ歯科医学ヲ修メ開業試験ニ合格セリ
　医籍ニハ旧試験トアルヲ以テ十七年以前ナルコトハ明カナレド年月ヲ詳ニセズ
後京都市ニ開業セシガヤガテ獣医トナリ滋賀県衛生課ニ奉職シ従テ大津市ニ移レリ
明治四十年十一月二十七日大津ニ没ス其ノ地ノ伝光院ニ葬ル

増島省三伝

増島省三ハ嘉永六年十月〔日不詳〕武蔵入間郡奥宿ニ生ル家世々農ヲ業トセリ
明治ノ初熊谷ニ至リテ医学ヲ修ム角倉嘉道ト同門タリ〔年月不詳〕後横浜ニ出デ外人某〔姓名不詳〕ニ従ヒテ歯科医学ヲ攻メ歯科医術開業試験ニ合格セリ
　受験年月ハ明カナラザレドモ旧試験ナリシ旨医籍ニ見ユ受験地ハ東京ナルベシ
後業ヲ下谷入谷町ニ開シガ明治四十四年九月二十五日病没セリ即チ深川御船蔵前町西光寺ニ葬ル

堀内清顯伝

堀内清顯ハ安政四年九月十二日ヲ以テ豊前北海部郡久原ニ生ル本姓ハ太田幼名ヲ吉三郎ト云フ父ハ吉三郎母ハくに家世々造酒ヲ以テ業トセリ
幼ニシテ福澤諭吉ノ塾ニ入リ新学ヲ講ゼシガ後思フトコロアリテ上京シ歯科医学ノ研究ヲ志セリ
明治十一年ノ頃横浜ニ至リテポルキンスノ門ニ入リ志ストコロヲ修メタリ同門ノ中西村輔三ハ先輩渡邊晉三ハ後輩ナリト云フカクテ業成リケレバ歯科医術開業試験ヲ受ケテコレニ合格シタリ
　受験ノ年月詳カナラズ然レドモ次段記ストコロニヨリテ明治十三年ヨリ後ナラザルコトヲ知ル可シ
明治十三年四月京都ニ至リ柳馬場ニ於テ渡邊晉三ト共同シテ業ヲ開キシガコレ実ニ京都ニ於クル近世歯科医術ノ鼻祖ナリキ
後大阪市南区西清水町ニ移リテソノ業ヲ行ヘリ
二十年三月十八日ニハ歯科医術開業試験委員ヲ命ゼラルヽニ至レリ
二十三年十二年（月ヵ）大和柳本藩ノ堀内家ヲ嗣ギソノ氏ヲ冒スコトヽトナレリ
業ヲ行フコト三十余年大正二年十月十三日ヲ以テ歿セリ即チ市外阿倍野ノ地ニ葬ル
其ノ治術ニ於ケル常ニ研究ヲ怠ラズ技工ニ於テモ得ルトコロ頗ル多ク有齦陶材義歯ノ施術ヲモ行ヘリ歯科材料ノ改良ニ腐心セシモマタ特筆スベシ第四回内国博覧会ノ開カルヽヤソノ作ルトコロノ陶歯及ビ「アマルガム」ニ対シテ賞状ヲ授ケラレキ、マタ自カラ陶竈ヲ設ケテコレガ製造ニ従事セシガ其ノ成ラントスルニ当リ不幸ニモ易簀セリ
其ノ門ニ入リテ一家ヲナセルモノモ甚ダ少カラザレド今ハ坂芳彦ノ外名ヲ逸セルハ惜ム可シ
室ハ香川紀隆ノ女順子二男四女アリ

關川重吾伝

關川重吾ハ万延元年五月五日肥前大村ニ生ル父ハ幕府麾下ノ士ニシテ維新以後海軍士官トナル
明治八年六月医師隈川宗悦縁戚タルヲ以テ其ノ紹介ニヨリテ小幡英之助ノ門ニ入ル当時小幡ハナホ開業スルニ至ラザリシカバ師ヲ助ケテ創業ノ難局ニ処シ本邦歯科医術創始ノ業ニ尽ストコロ少カラズ然レドモ幾モナク故アリテ小幡ノ門ヲ去レリ
十年西南ノ役起ル即チ父ニ従ヒテ出征シ各所ニ転戦セリ
十一年横浜ニ至リ相生町ノ医師木下恂ノ塾ニ入リ別ニ米国歯科医エム、エッチ、ポルキンスノ許ニ通学シ其ノ技ヲ磨キ業大ニ進メリ
後ポルキンス出張所ヲ東京日本橋元大工町ニ開キ師ノ名義ヲ以テ業ヲ行ヘリ
歯科医術開業試験ヲ横浜ニ受ケテコレニ合格セリ〔年月不詳〕
十五年業ヲ横浜市尾上町ニ創メ業大ニ行ハル其ノ治ヲ施スモノ今ニ至リテ三十余年ニ及ブ

神奈川県歯科医師会ノ創立セラレテヨリ其ノ会長ニ挙ゲラルヽコトニ回一次ハ明治四十三年ヨリ同四十四年ニ至リ二次ハ大正二年ヨリ同三年ニ至ル
其ノ門下ヨリ出デヽ一家ヲ成セルモノ左ノ如シ
　毛利元陽　　佐藤丈二郎　　今里　茂　　田崎泉一郎

俣野景範伝

俣野景範ハ安政五年九月二十四日羽前鶴岡家中新町ニ生ル父ヲ景明ト云フ家世々庄内藩士タリ母ノ名ハ政子ソノ長男タリ
明治十三年ヨリ小幡英之助ノ門ニ入リテ歯科医学ヲ修ム十五年二月其ノ門ヲ退キ横浜ニ赴キ同門ノ先輩高木五三郎ノ助手トナル翌十六年九月歯科医術開業試験ヲ横浜ニ受ケテ合格ス
十八年一月二十二日業ヲ長野市大門町ニ開キ治ヲ行フコト三十余年今ナホ大イニ行ハル
頗ル囲碁将棋ヲ好ミ囲碁ニ於テハ五段ノ評アリ又尺八ヲ好ミ深クソノ技ニ達セリト云フ
室ハ村上誓ノ女せき五男八女アリ

高田直友伝

高田直友ハ安政六年十一月十六日豊前中津殿町ニ生ル家世々奥平氏ニ仕フ父ヲ守母ヲ幸ト云フ直友ハソノ三男ナリ
明治八年小幡英之助ノ門ニ入リテ歯科医学ヲ修メ業日ニ進ム即チ十三年十一月ヲ以テ歯科医術開業試験ヲ受ケ其ノ格ニ合ス
十四年公立宮城病院（仙台）ニ聘セラレ歯科医兼教員トナル十六年辞シテ東京ニ帰リ業ヲ麹町平河町ニ開キシガ後居ヲ兵庫県西宮町ニ移シテ業ヲ行フ術ハ技工ヲ主トシ最モ義歯ニ長ゼリ
室ハ長野宗臣ノ女つまニシテ二男三女アリ

桑原敬忠伝

桑原敬忠ハ文久元年五月一日ヲ以テ伊勢国菰野ニ生ル桑原治太夫ト云フ菰野藩主土方家ノ重臣タリ
明治ノ初東京ニ出デ高山紀齋ノ門ニ入リ歯科学ヲ研究セシガ居ルコト数年ニシテ業大ニ成レリヨリテソノ十六年十二月歯科医術開業試験ヲ東京ニ受ケシニヨクコレニ合格シタリ
及第ノ後高山ノ門ヲ辞シ十七年四月頃友人ト共同シテ歯科ノ業ヲ開キシガ思フトコロアリテコレヲ閉鎖シ成医会講習所ニ入リテ医学ヲ修ムルコトヽナレリ
コレヨリ十八年ニ至ルマデ講習所ニアリテ学ヲ励ミシガ業成リテ医術開業試験ニ応ズルコトヲ得タリ
其後ハ或ハ長野県大町ニ或ハ三重県四日市市ニアリテ医業ヲ開キ内科及ビ外科ノ治術ヲ施シテ今日ニ及ビ別ニ歯科ヲ業トセシコトナシト云フ

伊澤道盛伝

伊澤道盛名ハ信崇小字ハ三盛後チ父ノ通称ヲ襲ギテ道盛ト称ス
其祖信美始メテ口科ノ医業ヲ修メ父信全ニ及ビテ柳営ノ医官佐藤道碩ニ従学シ業成リテ黒田家ニ仕ヘ口科ノ典医トナル信全ハ文化三年ヲ以テ生レ慶応二年八月五日ヲ以テ終ル道盛嗣イデ仕フ

伊澤道盛

道盛ハ天保十一年六月十六日麻布鳥居坂ニ生ル長ジテ其ノ支家伊澤磐安ニ医ヲ学ブ
磐安ハ柏軒ト号ス父ヲ蘭軒ト云フ世々阿部家ニ仕ヘテ侍医タリ柏軒後ニ辟サレテ幕府ニ仕フ其ノ子信平ハ道盛ニ養ハレテ嗣子トナル
後家業ヲ修メ其ノ術ニ長ズ
明治八年仏人アレクサドル歯科ノ医業ヲ銀座ニ開ク道盛就キテ学バント欲シ即チ其ノ門ニ詣リシガ故アリテ従学スルトコロヲ得ズ尋デ〔〇七八年ノ交トモ云フ多分八八年〕海津昌哲ト云フモノヲ聘シテ英語ヲ学ビ英書ニ就キテ直接ニ研究セント志セシガ、後〔〇年月未詳〕津田仙氏ノ紹介ヲ以テ小幡英之助ノ門ニ入ル
時ニ小幡ノ門下ニ關川高田篠原等アリシガ何レモ年少ノ人ノミナリ道盛ハ師ニ長ズルコト十余歳ニシテ且ツ業余ノ攻学ナリ熱心ノ人ニ非ルヨリハ到底出来難キ事ナル可シ
九年十年ノ頃松川修ト云フモノニ嘱シテタフト氏歯科治術学メレディス氏歯科治術学ヲ翻訳セシメ以テ研鑽ニ資セリ
十一年内務省医術開業試験ヲ東京病院ニ受ケタリ
十二年頃新タニ治療所ヲ京橋区尾張町ニ設ケ専ラ其術ヲ行ヒ、十三年ニ至リ元数寄屋町二丁目石井南橋ノ楼上ニ移リシガ、十八年コレヲ止ム
十三年固齢草成ル実ニ本邦歯科衛生ノ権輿タリ此書梓行セラル
十九年歯科医術開業試験委員ヲ命ゼラレ再三辞スレドモ許サレズ其ノ秋ヨリ高山紀齋ト交番ニコレヲ担当ス二十二年ニ至リ二氏竝ビテ任アリ分担スルコトヽナル
二十年春上野ニ共進会ノ開設アリ歯科関係出品物ノ審査員トナル
二十六年試験委員ノ任ヲ辞ス嗣子信平代リテコレニ任ゼラル
其ノ試験委員ヲ辞スルヤ率先シテ歯科医師ノ団体ヲ作ラント欲シ自カラ主唱者トナリ小幡高山ノ二氏ヲ説キテ発企人タランコトヲ求メ其歳六月創立総会ヲ芝公園三禄亭ニ開キ委員十数名ヲ挙ゲ会則ヲ定メ九月ヲ以テ東京歯科医会ヲ成立セシメタリ実ニ本邦最初ノ歯科医師団トナス
明治八年以降歯科医ノ数漸ク多ケレドモ之レヲ統一スル機関ナク普通医ニハ医師会ノ設ケモアリタレドモ歯科医ニハ此ノ挙ヲ企ツル人アラザリキ然ルニ当時ハ従来家トテ入歯師ノ数甚ダ多ク社会ハ此等ノ人々ト歯科医トヲ区別スル眼識ナカリシガ故ニ歯科医ハ甚ダシク其ノ権利ヲ蹂躪セラレ非常ノ不利ヲ忍バザル可カラザリキ、サレバ団体ノ成立ハ万人ノ望ムトコロニシテ之アリテヨリ歯科医師ハ統一セラレ歯科医学ノ進歩ニモ大ニ資スルコトヽナリキ
其ノ後各府県競ウテ歯科医会ヲ設立シ遂ニ東京ニ本部ヲ置キ各府県ノモノヲ支部トナシ以テ全国ノ歯科医ヲ統一スルニ至レリ
二十九年一月十三日俄然脳溢血ニ罹リ歿ス享年五十有七
室ハ小西氏子ナシ支家磐安ノ子信平ヲ養ヒテ嗣トス信平初メ東京大学医学部ニ学ビシガ、後家業ヲ専攻スルコトヽナリ米国ハーヴァード大学ニ学ビドクトルノ学位ヲ得更ニ独逸ニ赴キ二十五年三月帰朝シ二十六年試験委員トナリ其業大ニ行ハル
人ト為リ剛直ニシテ権貴ニ屈セズ廉潔ヲ尚ビ不義ヲ疾ビ寸毫モ仮借スルコトナシ性恬淡ニシテ貨殖ノ事ヲ好マズ従ツテ一生中清貧ヲ以テ処シタリ居常謹格ニシテ長上ヲ恭フコト苟モ衿式スルトコロナシ、其師小幡氏ヲ敬スルコト終始変ゼズ其ノ之レヲ称スルヤ常ニ小幡先生ト称シ苟モ私語ノ故ヲ以テ敬称ヲ改メザリシト云ヘリ

荒川　脩　　高橋直太郎　　小西安次郎　　毛利金次郎　　古川丙吉
門倉清廣

アリ
篤学ニシテ博ク百家ノ書ニ通ジ和歌ヲ善クシ書道ヲ好ミ以テ自娯セリ最モ博交ヲ好マズ往来スルト

コロ三四人ニ過ギズ
臨床医学ニ就キテハ研究頗ル勗メ夙ニリッチモンド式歯冠ヲ創始シテコレヲ患者ニ施シ、上顎総義歯ノ中央気室ノ部分ヲ穿チテコレヲ拡大シ以テ義歯ノ欠陥タル味覚ノ損失ヲ補ヒ殊ニ口蓋破裂ノ補綴法ニツキテハ最モ思ヲ凝ラシ遂ニ好成績ヲ挙ゲタリ、充填モ最モ巧ミニシテ壮年時代ニ充填シタル金、「アマルガム」ノ今日往々見ルコトアルガ充填物ト組織トノ間寸毫ノ間隔ナク両者平等ニ磨耗セルヲ常トセリ二三十年後充填物ニ異状ヲ呈セザルガ如キハ容易ノ業ニアラザル可シマタ歯科材料ノ製法ヲ研究シ理想的ノ歯磨煉剤含嗽料等ヲ作リ現ニ世上ニ流布セリ

池野谷貞司伝

池野谷貞司ハ安政元年三月八日江戸浅草栄久町百十四番地ニ生ル
池野谷氏ハ都下屈指ノ旧家ナリ天明寛政ノ頃池野谷貞司ト云フモノアリ頗ル義歯ノ術ニ長ゼシガコノ地ニアリテ始メテ口中科ノ業ヲ開キタリ素ヨリ治術ニ堪能ナリケレバソノ名遠近ニ聞エタリソノ頃ハ衛生思想甚ダ普及セズシテ歯科治療ノ要ヲ認ムルモノ甚ダ少カリケレバ江戸ノ市中ニ於テ口中科ヲ標榜スルモノモマタ稀レニシテ僅カニ三人アリシノミト云ヘリ中ニモ貞司ハソノ道ノ妙手ト知ラレタレバ列侯礼ヲ厚ウシテコレヲソノ邸ニ招キ治療ヲ請フコト少カラザリキコノ人ニ一男一女アリソノ男貞正ト云フハ戸田氏ヲ冒シ父業ヲ継ガザリケレバ門人ヲ養ヒテ女千代子ニ配シテ貞喜ト称セシメ以テ業ヲ承ケシメタリ貞喜モマタソノ道ニ達セシト云フ貞司ハコノ貞喜ノ子ニシテ幼名ヲ初太郎ト云ヘリ長ジテ祖父ノ名ヲ襲グ
貞司幼少ノ頃ヨリ家ヲ習ヒ頗ル精励シタリシガ明治六年ニ至リ仏人アレクサンドルニ就キテ歯科ノ学ヲ習ヒシガ八年八月ニ至リアレクサンドル竹澤氏ニ聘セラレシカバ就学スルヲ得ズヨリテ小幡英之助ノ門ニ入レリ当時小幡ノ門ニハ關川高田篠原ノ諸氏アリ在来歯科ヲ以テ業トセシ伊澤道盛高橋富士松等ニ就キテ学ビタリシカバ貞司モコレ等ノ人々トトモニ日夜心ヲ学業ニ専ニシキシテ小幡ノ門ニ遊ブコト一年許ニシテ辞シ九年ヨリ父貞喜ヲ助ケテ業ニ就キタリ
後〔〇年月未詳〕父歿シテ業ヲ継ギ治術ヲ行フコト前後二十二年明治三十一年一月八日ヲ以テ死亡セリ年四十六府下染井ノ泰安寺ニ葬ル
ソノ門ニ遊ビテ業ヲナセルモノ左ノ如シ

五木田榮之助　瀧澤藤三郎　菊地玄勝　田中佐太郎　森川庄之助

貞司ハ最モ義歯ノ製作ニ長ジ世既ニ定評アリ駿河台ノ渡邊ニアラズバ浅草ノ池野谷ト云ハレシ程ナリソノ印象法咬合法ノ如キハ一種独特ニシテ印象ニハ二圧法ヲ用ヒタリ尚常ニ多数ノ舶来陶歯ヲ所有シ其ノ数万ヲ下ルコトナカリキサレバ歯科商店ニ材料欠乏ヲ告グルニ至レバ同業者ヨリ陶歯ヲ無心セラルヽコト屢々ナリト云フ

二圧式印象法

イ、下顎ノ場合
本法ニ於テ主眼トスル所ハ蝋製ノ即時印象盞ヲ調整スルニアリ先ヅ自家製特殊ノ蝋〔温湯ニヨリ軟化シ冷却スレバ充分ノ硬度ヲ得〕ヲ軟化馬蹄鉄状トナシ是ヲ下顎堤ニ平ラニ圧迫ス且ツ此際手ニテ固定シナガラ他ノ手ノ指頭ニテ必要ノ部位マデ精密ニ圧接シ硬化後取出シ冷水ニ浸シ適当ノ厚径ヲ保タセ過剰部ヲ切除スベシ是即チ第一圧ニシテ此ニ即席ノ印象盞ヲ得タル訳ナリ
サテ薄ク且ツ平均ニ延長シタル同質ノ蝋ヲ第一印象上ニ敷キ少時温湯ニ浸シ第二圧法ヲ行フ此際位置ヲ違ヘザルヤウ注意スベク予メ第一圧蝋ニ印刻ヲ与ヘ置ケバ便ナリ
ロ、上顎ノ場合
上顎ニ於テハ「ブリタニヤ」合鉱製印象盞ヲ選択シ其盞ヲ更ニ木槌ヲ以テ顎ニ適合スベク内外ニ槌

打シ顎ニ精密ニ適合スルニ至リコレニ硬性ナル「モデリング、コンポジション」ヲ以テ一圧ヲ施シ過剰部ヲ切除シ再ビ軟性ナル「モデルリングコンポジション」ヲ第一印象上ニ敷キ少時温湯ニ浸シ第二圧法ヲ施スベシ一圧法ニ比較スルニ遙ニ鮮明完全ナルモノナリ
第二圧法ハ「モデリングコンポジション」ニ換フルニ粘膜ノ状態ニヨリ石膏ヲ以テ行ヒシ場合モアリキ
本法ハ臨床上頗ル効果ヲ得ルモノニシテ下顎ノ如キ既製印象盞ノ適合スルモノ少ク正確ナル印象ヲ得ルハ甚ダ困難ナリ然レドモ本法ヲ施行スレバ如何ナル変態ノ顎例ヘバ孤立歯ノ散在スル場合歯槽吸収著名ニシテ殆ド平坦トナレルモノ或ハ腐骨疽ニ因テ陥没ヲ呈シタルガ如キ場合等ニ於テモ容易ニ的確ナル印象ヲ採得シタリト云フ

金充填

金充填ニ於ケル窩洞ノ形成ハ鳩尾形トナシ〔主トシテ33½ノ「インハーットューン」ヲ用ヒタリ〕適所ニ一箇ノ起始点ヲ設ケタリ又金箔ハ厚中薄ノ三種ヲ備ヘ小窩洞ニハ薄キヲ充填シ又大窩洞ニ於テハ基底部ヨリ凡ソ三分ノ二程薄キモノ填塞シ表面ニ近クニ従ヒ厚キモノヲ用ヒタリ前歯唇面ノ大充填ハ数年ヲ経過スレバ充填面不等海綿状ヲ呈スコトハ往々目撃スル所ナルヲ以テ之ヲ防グタメニ種々苦心ノ結果表面ニ近クニ従ヒ特ニ厚キ金箔ヲ用ヒテ好成績ヲ収メタリト云フ

富永省吾伝

富永省吾ハ安政四年七月十日肥前国大村ニ生ル家世々大村藩士タリ
初メ同藩長與專齋ニ従ヒテ医学ヲ修メシガ明治十一年小幡英之助ノ門ニ入リ歯科医学ヲ学ブ十三年開業試験ヲ東京府ニ受ケテ合格ス
即チ業ヲ東京市京橋肴町ニ開キ後横浜ニ移ル
十七年山口県病院ノ医員トナリ十九年ソノ職ヲ辞ス
後広島市中町ニアリテ業ヲ行フ実ニ三十余年ニ及ブ広島県歯科医師会ノ設立セラルヽヤ会長トナル
其ノ門ニ学ビテ一家ヲナセルモノ甚ダ多シ

鈴木直之丞　金子孫四郎　櫻井近之助　深澤忠一郎　村瀬生松
鶴谷猶松　井出元一　渡邊秀夫

其ノ子寅次郎海軍中佐タリ今官ヲ辞シテ北海道虻田郡ニアリ農場ヲ経営ス

鈴木玉齋伝

鈴木玉齋ハ嘉永四年九月上野高崎ニ生ル幼名ハ玉吉父ヲ菊齋ト云フ浪士ニシテ義歯ヲ作ルヲ業トシキ（テカ）少ニシテ前橋ニ出デ其地ノ従来家鈴木泰爾ト交リ盟ヒテ兄弟トナル由テ鈴木ヲ氏トス父菊齋ノ本姓ハ詳ニスベカラズ
後東京ニ出デ慶応三年ヲ以テ先代神翁金齋ノ門ニ入ル明治十一年師歿シテ其子金齋継グ玉齋ハ力ヲ尽シテコレヲ助ケタリ
カクテ明治二十年ニ至リ師家ヲ去リ神田区柳原河岸二十二番地ニ業ヲ開ク時ニ年三十七ナリキ
明治二十二年神翁金齋吉田仙松高橋富士松鈴木玉齋等相計リ共同出資ノ許ニ歯科矯和会ヲ起シ先ヅ玉齋ノ柳原河岸ノ家ニ講義ヲ開ケリ
コハ前年石橋泉久保田豊慫慂ニヨリテ神翁吉田竹澤ガ共ニ起セシ東京歯科医学専門学校（東京歯科専門医学校）ノ開校間モナク祝融氏ノ災ニカヽリ改築後直チニ校内内訌ヲ生セシカバ其ノ素志ノ空シクナランコトヲ慨シテナリ後教室ヲ日本橋本町一丁目ノ門井小学校ニ移シテ講義ヲ継続セリ其事

神翁金齋ノ伝中ニ見ユ
業ヲ行フコト二十五年明治四十五年五月二十一日歿ス年六十八芝青松寺ニ葬ル
其ノ門ニ入リテ業ヲ成セルモノ左ノ如シ
　澁谷徳三郎　柿本周作　石井銀四郎　大倉長太郎　和賀韶次郎
　桐谷藤吉　伊藤忠三郎　遠山安宅
室ハ日本橋本石町三丁目荒俣藤吉ノ女きく子五男二女アリ長男ヲ玉齋次男ヲ義雄四男ヲ考夫五男ヲ虎雄ト云フ三男ハ夭ス長女ヲうめト云フ石井銀四郎ノ妻トナル次女ヲつるト云フ

瓜生源太郎伝

瓜生源太郎ハ安政元年二月二十一日備前岡山ニ生ル本姓ハ高山後瓜生氏ニ養ハル実父ハ紀州池田氏ノ臣タリ実兄ヲ高山紀齋ト云フ
瓜生氏モト甲斐ノ武田氏ニ仕ヘ後池田家ニ仕ヘテ岡山ニアリ
明治十一二年頃東京ニ出デ高山紀齋ノ許ニアリテ教ヲ受ケ十六年四月歯科医術開業試験ヲ東京ニ受ケテ合格ス
高山歯科医学院ノ設立セラルヽヤ講師トナリ治療主任ヲ兼ヌ後東京市歯科医師会ノ常議員タリ
後〔年月未詳〕岡山市ニ移リ岡山歯科医学校岡山歯科病院等ヲ設立シテ其ノ校長院長トナレリ
大正二年一月二日岡山ニ歿ス即チ中津郡半田山ニ葬ル
其ノ門ニ入リテ一家ヲナセルモノ左ノ如シ
　松浦　謙　寺本　數衞　齋藤　誠二　大塚　安衞　辻　正子郎
　河村　五六　兒島　耕叟　東　勝太郎

渡邊晋三伝

渡邊晋三ハ弘化元年七月七日美作国勝山ニ生ル家世々藩老タリ父ヲ政ト云フ晋三ハソノ家子ナリ長ジテ晋齋ト称ス性温厚篤実ニシテ学ヲ好ム
万延元年藩侯ノ命ヲ奉リテ江戸ニ遊ビ漢学ヲ修メ帰藩ノ後藩学ノ教授タリ
明治ノ初志ヲ立テヽ東京ニ上リ医学ヲ修メントス偶々米国歯科医ポーキンス横浜ニ業ヲ開ク晋三就キテ学ブ〔就学年月詳ナラズ〕明治十二年五月歯科医術開業試験ニ合格シ翌十三年京都ニ至リ柳馬場ニテ堀内清顯ト共ニ業ヲ開ク実ニ京都ニ於ケル近世歯科医学ノ鼻祖タリ
　此ノ受験セシ時トモニ応試セルハ何人ゾ又試験問題ナドモ知ルニ由ナシ
居常端正厳格力ヲ歯科衛生ノ普及ニ注ギ且ツ歯科医師ノ品位ヲ向上セシメンコトニ瘁ヲ尽セリ
明治二十年十月一日歯科医術開業試験委員ニ挙ゲラレ明治三十六年三月三十日正七位ニ叙セラル
明治四十年歯科医師法ニヨリ京都府歯科医師会創立ノコトアリ為メニ大イニ周旋スルトコロアリ設立ニ及ビテ其ノ会長トナル
明治四十二年八月病ヲ得十二月疾革マル危篤ノコト天聴ニ達シ十日従六位ニ叙セラル翌十一日午前六時遂ニ卒ス享年六十

伊藤順二伝

伊藤順二ハ弘化四年十一月一日ヲ以テ尾張愛知郡下之一色村ニ生ル実ハ森氏父ヲ玄龍ト云ヒ母ヲ田鶴ト云フ順二ハソノ次子タリ家世々医ヲ業トシ玄龍ニ至リ医業スデニ六世ニ及ブト云フ

慶応元年伊藤順藏ニ養ハレ其ノ女房子ニ配シテ其ノ氏ヲ冒セリ伊藤氏ノ祖ヲ覺右衞門ト云フ池田輝政ノ麾下タリ民卿ト云フモノニ至リ儒術ヲ以テ三州苅谷藩ニ仕フ受業者数百人ニ上ル民卿順藏ヲ養ヒテ子トス医ヲ以テ大ニ行ハル
明治十三年順二東京ニ遊ビ軍医石坂惟寛ノ紹介ニヨリテ其ノ三月十六日ニ高山紀齋ノ門ニ入リ歯科医術ヲ修ム
十四年二月業成リテ歯科医術開業試験ヲ東京病院ニ受ケテ合格セリ
マタ十五年三月ヨリ十月マデ七月ノ間小幡式歯科医術ヲ研究セリ
其ノ歳始メテ業ヲ名古屋ニ開キ後伊勢ノ桑名ニ移リ今名古屋市東区西新町一丁目五番地ニアリテソノ治ヲ施セリ
十九年九月十四日第二回名古屋歯科医術開業試験委員ヲ命ゼラル
順二ハ別ニ内外科医術開業免状ヲ有シ名古屋ニ於テ衛生取締ノ任ニ当リシコトアリ
其ノ門ニアリテ一家ヲナセルモノ頗ル多シ左ニコレヲ録セン

渡邊敬三郎　加藤鐘次郎　岩瀬虎次郎　遠山　恰　森　省三
小串　子成　小島　隆一　中野　正平　鈴岡善兵衞　渡邊　順吉
立川半五郎　鈴木鍬三郎　梅村　元藏

其ノ最モ長ズル所ハ金銀護謨床義歯ニシテ口蓋裂傷ノ圧定物鼻柱隔ノ製作等モ頗ル精妙ヲ極ムト云フ深ク仏教ニ帰依シ詩文ヲ好ム故ニソノ平生交ハルトコロ学友同業ノ外ニシテハ仏徒ト文人ト甚ダ多シ令息百藏医術ニ長ジ陸軍軍医監正五位勲三等功五級タリ

高木五三郎伝

高木五三郎ハ文久元年二月四日豊前中津片端町ニ生ル父ヲ元太ト云フ
明治十一年小幡氏ニ就キテ歯科ヲ修メント欲シ東京ニ出デ直チニ小幡氏ノ門ニ入ル
十四年二月開業試験ヲ東京病院ニ受ケテ合格セリ
十五年三月小幡ノ門ヲ去リ三月十五日横浜市弁天通二丁目丸善書店ノ二階ニ業ヲ開ク
高木ノ器械ヲ作リシハ神田山本町ノ器械師中澤虎吉ニシテ、コレマデ器械ハ主トシテ舶載ノモノニ限リニコノ時ソノ大部分ヲ邦人ノ手ニテ作リ得タリ
開業ノ広告ハ時事新報第一号ニ出デタリ是レ面白キ偶中ニシテ一時同門中ノ話柄トナリキ
爾来明治二十年マデ横浜ニアリ二十年東京京橋ニ移リシガ二十三年五月ニ至リ函館会所ニ移リ、北海道医師会創立以来歯科医師会会長ニ推サレ現ニソノ職ニアリ大正六年三月菅沼友三郎ノ死スルヤ四月京橋滝山町ノ同氏ノ医院ヲ継承セリ
器械ノ創作改良モマタ多シ「トレー」ハ小幡氏ノモノヲ原型トシ種々ノ苦心ノ末新式ノモノヲ案出シ「エキスカベーター」神経針等製作ニ工夫セシ点少カラズ
其ノ門ニ遊ビテ既ニ一家ヲナセルモノ左ノ如シ

横山篤次郎　俣野　景憲　高山伊之吉　大西　吉造

室ハ東京府士族（九鬼氏ノ臣）飯沼順藏氏ノ女讓子明治十九年一月ヲ以テ高木氏ニ嫁ギ一男アリ捨三ト云フ

長谷川友二伝

長谷川友二ハ安政元年六月十二日越後蒲原郡山崎与野ニ生ル世々医ヲ業トセリ
初メ新潟医学校ニ遊ビ医業ヲ学ビシガ後東京ニ出デ高橋富士松ノ門ニ入リ歯科ノ術ヲ修ム業大ニ進

ミ十五年七月歯科医術開業試験ヲ東京ニ受ケテ合格セリ
十五年十二月業ヲ新潟市ニ開クコレヨリ二十年マデ五年間他ニ一人ノ開業者モ県下ニアラザリシト云フ苦心察ス可シ
室ハ粕谷久之助ノ女やい四男二女アリ長子朋一次子二郎トモ歯科医トナリテ業ヲ行ヘリ
其ノ門ニ遊ビテ業ヲナセルモノニ小林左中太アリ

庄司才之進伝

庄司才之進ハ安政六年十一月八日陸前桃生郡谷地中ニ生ル実ハ近藤氏父ヲ鐵也母ヲとわト云ヒ才之進ハソノ次子タリソノ家世々医ヲ以テ業トシタリシガ明治十一年伊達家ノ医師庄司玄清ノ養子トナリテソノ氏ヲ冒シタリ
明治十四年宮城病院ニ歯科部ヲ設ケラルヽアリテ高田直友新タニコヽニ聘セラレケレバ才之進ハコノ人ニ就キテ歯科医学ヲ研究セリナホ其ノ後〔○年月不詳〕東京ニ出デ小幡英之助ノ門ニ入リ其教ヲ受ケタリ
カクテ十六年三月ニ至リ仙台市ニ帰リテ歯科医術開業試験ヲ受ケテ合格シ其ノ五月ヨリ宮城病院ノ医員トナレリ
十八年初メテ仙台市東三番町ニ業ヲ開キ後試験委員ヲ命ゼラレシコトアリ
二十三年十月十九日病ンデ歿ス即チ仙台市新寺小路成覚寺ニ葬ル
室ハ鈴木順平ノ女うとじニシテ四男一女アリ
其ノ業ヲ行フ五年ニ過ギズ然レドモ其ノ門ヲ出デテ一家ヲナセシモノ伊藤敬三　鈴木卯一郎　岡部麟二郎等アリ

鈴藤文一郎伝

鈴藤文一郎ハ文久元年四月四日ヲ以テ江戸ノ芝新銭座ニ生ル家世々武弁タリ父ヲ勇次郎ト云ヒ母ヲかねト云フ文一郎ハソノ次子ナリ
明治十二年八月桐村克己ノ門ニ入リ歯科医学ヲ修メ大ニ得ルトコロアリ、業就リテ十六年七月歯科医術開業試験ヲ東京ニ受ケコレニ合格シ其ノ歳九月ヲ以テ開業免状ヲ下付セラレタリ
十九年五月初メテ業ヲ東橋（京橋）区三十間堀ノ地ニ開ク
二十二年四月高山歯科医学院ノ講師ヲ嘱託セラレ久シク育英ノ職ニアリキ
二十八年六月ニハ歯科医会評議員ニ推薦セラレタリ
其ノ歳十月横須賀市ニ出張所ヲ設ケシガ此ノ時海軍機関学校生徒ノ歯科治療ヲ嘱託セラレキ翌年二月ニハ更ニ横須賀海兵団医務部ヨリ同団兵士ノ歯科治療ヲ担当スルヤウノ依託アリキ三十六年九月ニ至リシガ横須賀出張所ヲ廃シ従テ海軍機関学校生徒及ビ海兵団兵士ノ歯科治療嘱託ヲモ辞シタリ是ヨリ先キ三十五年一月歯科医学会ノ評議員ニ挙ゲラレシコトアリ
ヤガテ明治三十七八年ノ役起リ海軍ニ歯科医ヲ要スルコトヽナリシカバ三十八年二月第三艦隊ノ歯科医療ヲ嘱託セラレシ奏任官ヲ以テ待遇セラル其歳十一月十五日嘱託ヲ解カル翌三十九年四月一日其ノ戦功ニヨリ勲六等ニ叙シ瑞宝章ヲ授ケラレ併テ金ヲ賜フ
四十年十二月海軍兵学校練習艦隊ノ歯科治療ヲ嘱託セラレ軍艦松島ニ乗組ミシガ翌年四月三十日遠洋航海帰港ノ際台湾馬公港ニ於テ火薬庫爆破ノタメ不慮ノ死ヲ致セリ　両陛下金ヲ賜フテ弔シ給フ海軍マタ金ヲ賜フソノ海軍省ヨリ賜ヒシ文ノ中ニ「歯科医トシテ明治三十七八年戦役ニ従軍シ練習艦隊ノ遠洋航海ニ従フコト前後三回ニ及ビ其ノ功績顕著タリ」ノ語アリ蓋シ文一郎ノ海軍ニ於ケル

功績ヲ尽セリ即チ青山墓地ニ葬ル
室ハ岡部要人ノ女くらニシテ五男一女アリ
其ノ門ニ入リテ一家ヲナセルモノ榎本積一、在竹三郎アリ

神翁金齋伝

神翁金齋ハ嘉永五年九月十三日ヲ以テ江戸ニ生ル実名ハ金松父ヲ鹿之助信應ト云フ信應ノ父ハ金齋信富トテモト大和滝之村ノ人ナリシガ後チ江戸ノ神翁家ヲ相続セリ信應ノ妻ハ常子トテ江戸城本丸大奥ノ口中療用ヲ仰セ付ケラレ時々出勤セリトノ云ヒ伝ヘアリ
ナホコノ家ノ伝ヘニ大奥ノ療用ニハ男子ヲ用ヒザル習ナリシカバ常子ハ御召ニヨリテ出勤シ入歯歯抜ソノ他口中療用一切ヲ承ハリタリナホ出勤ノ際駕籠中ニテ使用セル手アブリモ現存セリト云フコノコト甚ダ不審ナリ更ニ研究ヲ要ス
金齋ハ幼時上野寛永寺中ニアリテ輪王寺宮ニ仕ヘタリコレ初メ歯科ノ業ヲ好マズ他業ニ転ゼントスル心切ナリシヲ以テナリ然レドモ一日西洋ノ義歯ヲ見ソノ精緻ナルヲ知ルニ及ビ志ヲ翻シテ歯科ノ業ヲ修ムルコトヽナレリ会々明治六年ニ至リ仏人アレクサンドル歯科ノ医業ヲ築地ニ開キシガ金齋コレヲ聞キ人ノ紹介ヲ以テソノ門ニ入レリ
竹澤國三郎伝ニハ神翁金齋ノアレクサンドルニ就学セシハ明治八年竹澤ガアレクサンドルヲ独占セシ後ナル由ニ見ユ何レガ是ナルヤヲ知ラズ
金齋幼年ニ頃ハ父信應ノ門生ニ鈴木玉齋ト云フ人アリテ甚ダ義歯ニ長ジ父ヲ助ケテ業ヲ営ミシカバ差支ナカリキカクテ父ハ明治十一年五月ニ歿セシガソノ頃ニハ金齋モ西式ノ治術ヲ習得シテ父業ヲ嗣グヲ得タリ
明治二十一年三月京橋区弥左衛門町ニ東京歯科専門（“医”脱）学校成ル初メ千葉県出身ニテ医師タリシ石橋泉ト久保田豊〔志村誠麿ノ父ナリ〕ノ二氏都下ニ歯科医育ノ機関ナキヲ慨シコレヲ設立セントテ歯科ノ有力者ヲ周旋セシモ効ナカリシカバ共ニ金齋ノ許ニ至リテ助力ヲ乞ヘリ金齋ハ竹澤國三郎吉田仙正ノ諸氏ト共ニ尽力シテ成立ニ至ラシメタリ石橋泉校長トナリ竹澤吉田神翁ノ三氏学監トナリ久保田豊幹事トナル修業年限ハ一ケ年半ニシテ分チテ三期トナス其ノ設立ハ甚ダシキ苦心ノ結果タリシニ拘ハラズ開校ノ後間モナク火災ニカヽリシカバ校舎ヲ水天宮ノ空地ニ建築シ更ニ授業ヲツヾクルコトヽナレリコノ建築ノ出資者ハ金齋一人ナリシガ故アリテ久保田ノ名義トナシヽタメ久保田ニ権力ヲ生ジ石橋校長トノ間ニ不和ヲ生ジ校長ハ遂ニ学校ヲ去レリ久保田ハコレヨリ自カラ校長トナリ小島原泰民ヲ聘シテナホ業ヲ継続セシガコヽニ至リテ竹澤吉田二氏ハ全ク関係ヲ絶チ金齋ノミ更ニ資ヲ出シタリシカモ学校ハ収支相償ハザリシ上ニ金齋ノ志ニ満タザルコト多カリケレバ金齋モ最後ニ手ヲ引クコトヽナリ久保田ハ校舎ヲ売却シテ結末ヲツケタリ後久保田ハ校名ヲ利用シテ田舎廻リヲナセリ
コノ事業ハ功ヲ収ムルコトナカリシモソノ歯科医育ノ権輿タルガ故ヲ以テ特筆大書セラルベキモノトス
明治二十二年歯科矯和会成ルコハ金齋ノ同志高橋富士松吉田仙正ト計リ資ヲ出シテ組織スルトコロナリ日本橋本町二丁目ノ門井小学校ノ一部ヲ教室トシ一週一回講義ヲ開クソノ講師タリシモノハ石橋泉小島原泰民ノ二氏ニシテノチニハ毎月二回ノ講義録ヲ発行シ大倉長太郎〔神翁門人〕木村文次郎〔高橋門人〕小笠原義章〔吉田門人〕ヲ以テ事務担任者トナス後幹事ヲ置クニ及ビ前記ノ大倉ノ外ニ柿本周作〔鈴木門人〕ヲ以テコレニ任ゼリ居ルコト数月ニシテ名ヲ講義会ト改メドクトル菅沼友三郎ドクトル伊澤信平ヲ増聘シテ講師トス
　高橋直太郎ドクトル一井正典医学博士田代義徳モノチニ講師トナリ石原金作古谷忠次郎幹事トナ

ル会ニテ出版セルモノハ石橋泉ノ著化学解剖学生理学小島原泰民ノ著歯科小林（小技ヵ）菅沼友三郎ノ著乱排歯矯正術及同図譜伊澤信平ノ著歯科機械（器械）学高橋直太郎ノ著新纂歯科病理学、歯科病理新論、歯科治術学ヲ治（始ヵ）トシハリスノ著ヲ小島原ノ訳セル歯科解剖学同図譜歯科生理学歯科薬物学歯科病理各論歯科治金学畸形歯論〔歯差〕歯矯正術外科通論裁判科学等アリ

後ニハ高橋直太郎主ナル講師トナリ吉田仙正主事トナリテ講義ヲ継続セシガ丸ノ内商工学校ニ移ルニ及ビ名ヲ共立歯科医学校ト改メタリ後マタ神田雉子町ニ徒ル此ノ学校ハ後年中原市五郎ノ手ニ帰セシガココニ至ルマデ毎月経費ノ不足額ハ金齋一人ニテ負担セシト云フ

吉田竹澤鈴木高橋ノ諸氏モ初メハ同志ニテ此ノ挙ヲナシタルガ一時ニシテ中止シタリニ金齋ノミハ有終ノ美ヲナセリ此ノコト特筆サザルベカラズ

大正　年病ンデ死ス則チ芝青松寺ニ葬ル

其ノ門ニ入リ名ヲナセルモノマタ多シ

鈴木　玉齋	免養　九一	吉田　仙正	神翁廣太郎	○神翁　由松
鈴木　　祇	石井大之進	須田松兵衛	石川　金吾	小島　宗績
仁村光之助	○森　甚三郎	○中村　好正	古谷忠次郎	○杉原清太郎
○伊藤忠三郎	○中島徳太郎	○岩下　専造		

註、圏ヲ附セルハ歯科医籍ニ登録セラレタルモノ

室とく子三男六女アリ其ノ一男ヲ隆ト云フ現存ス家業ヲ継ガズ女婿憲太郎日本歯科医学専門学校ヲ卒業シテ業ヲ継グ

エリオット伝

セント、ジョージ、エリオットハ千八百三十八年〔天保九年〕十月ヲ以テ今紐育市ノ中心トナレル田舎ノ地ニ生レタリ父ハ眼科医ナリキ初メ兵士トナリヲ（テヵ）南北戦争ニ従ヒ累進シテ連隊司令官附将校トナリシガ負傷ノタメ除隊セラレタリ戦争ノ終期ニ至リ軍医官トシテ再ビ陸軍ニ入リ其後独立シテ医業ヲ営メリ

然ルニ日本及ビ支那ニ在住セル人々ヨリノ通信ニヨリ東洋地方ニ医術ヲ開業スルノ有望ナルヲ知リ遂ニ東洋ニ来ルコトヲ志セシガコノ時歯科的知識ヲ有セバ更ニ都合ヨカル可シト忠告スルモノアリシカバ意ヲ決シテフィラデルフィヤノ歯科医学校ニ入リ同校所定ノ課程ヲ卒ヘ千八百七十年〔明治三年〕ヲ以テ東洋ニ向ヘリ

其ノ郷ヲ出ルヤ上海ニ到ラントセシガ其ノ横浜ヲ見ルニ及ビ切ニコヽ止マラント欲シ予定ヲ変更シテコヽニ上陸シタリ

此ノ時横浜ニ二名ノ外国医アリテ歯科ノ業ヲ開ケリ其ノ一名ハ仏人ニシテ一名ハ米人ナリシガ何レモ極メテ低級ノ歯科医ニシテ云フニ足ラザルモノナリキ而シテエリオットノ渡来スルヤ数週ナラズシテ仏人ハ内地ニ入リ仏語教授トナリ米人ハ本国ニ帰リ去レリ

カクテエリオットハ五十七番館ヲ借リ受ケコレヲ改造シテ治療所トナシ業務ヲ開始セリ。其ノ最初ノ患者ハタヾ外国人ニ限ラレタル如クナリシモ後ドクトル、シモンスノ勧告ニヨリ邦人ノ患者ヲモ取扱フコトヽナレリ。然レドモ邦人ニシテ治ヲ請フモノハ裕福ナル官吏ノ外余リ多カラザリシヲ以テ治療所ヲ償フニ足ラザリシト云フ。エリオットノ自記ニヨレバ木戸（原注：孝允？）モ其ノ患者ノ一人ナリシトゾ

エリオット曰ク余ノ手術料ハ最初十弗ヲ最低トシタリ則チ以前日本ニ来リテ施術セシドクトル、アートラック氏ガ最低十五弗ト定メシヨリモ少シク廉ナリキ而シテ当時ノ状態ヨリ見ルニ余ノ手術料ハ最ニ適当ナリシガ如ク何等ノ反対ヲモ受クルコトナカリキト云々、是ヨリ先ドクトル、ウィントト

云フ人香港ニ業ヲ開キシガ夏期ノ一部ヲ我国ニ送リテ莫大ノ収入ヲ得シガコヽニ至リテ其ノ勢力範囲ヲ悉クエリオットニ譲ルコトヽナレリ
カクテ千八百七十五年〔明治八年〕マデエリオットハ横浜ニ留マリテ治ヲ施セシガ、其ノ間門下ニアリテ教ヲ受ケタル小幡英之助ハ我国ニ於ケル近世歯科医学ノ鼻祖トナレリ。此外門生ニハ佐治職英人ポート等アリ。小幡及ビ佐治ニハ別ニ伝アリ就キテ看ル可シ英人ポートハ後紐育及費府ニ於テ業ヲ了ヘ香港倫敦等ニ於テ開業シ数年前隠退シタリト云フ。マタ松岡萬藏ト云フ人ソノ家ニアリシガ、コレハ門生ノ列ニ入ラザリシトモ云フ。松岡ノコトハ桐村克己伝中ニモ見ユ。エリオット自ラ記セルトコロニヨレバ、エリオットハ「学生ニ対シテ喜ンデ指導スルヲ常トセリ。希望者サヘアリシナラバ、尚ホ多数ノモノヲ養成シ得シナラン。コレ等ノ学生ニ対シテハ、アル機会ニ於テ米国ニ赴キ歯科医学ヲ研究センコトヲ勧ムル外何等ノ報酬ヲ求ムルコトナカリキ」ト云ヘリ
前ニ云ヘルガ如ク千八百七十五年〔明治八年〕十一月頃日本ヲ発シ支那ヘ向ヘリ。此ノ時小幡英之助ハ別レヲ惜ミ、随従シテ上海ニ赴キ留マルコト半歳ニ及ビシガ、エリオット上海ヲ出デヽ新嘉坡ニ向フコトヽナリシヲ以テ小幡ハ行李ヲ整ヘ帰朝シタリ〔此事ハ小幡ノ伝中ニアリ〕
エリオットハ新嘉坡ニ至リテ業ヲ開キシガ、後〔年月不詳〕錫蘭印度及ビ欧州ノ諸地ヲ経テ千八百七十九年〔明治十二年〕倫敦ニ入レリ其年倫敦ニ於テフィールドノ跡ヲ引受ケテ開業シタルガ、其頃英国歯科医ノ技術ハ未ダ技術進歩セザリシヲ以テ非常ノ成功ヲ収メタリ
其ノ後〔年月不詳〕倫敦国立歯科医学校ノ歯科手術学教授トナリ、五年ノ間ソノ職ニアリキ。然レドモ英国歯科医ハ多ク理論ニノミ走リテ実際的手術ニ対スル興味ニ乏シク常ニ社交場裡ニ好位置ヲ得又外科医ト思ハレンコトノミヲ希望シ業務ニ疎カナリシヲ以テエリオットハ失望ヲ禁ゼリキ
後〔年月未詳〕紐育ニ帰リ其ノ地ニ歯科ノ業ヲ開キ大ニ治ヲ遠近ヒ施セシガ、ヤガテ隠退シ今ハニュー、ジャーシー州サウス、オンレジ市ニ在リ

西村輔三伝

西村輔三ハ安政元年三月十日ヲ以テ但馬豊岡ニ生ル父ヲ安平ト云フ
明治ノ初本邦ノ商業振ハザルコト甚ダシ輔三大イニコレヲ慨シ米国ニ遊ビテ商事ノ研究ヲナサントノ志アリ偶々豊岡藩ノ家老岩崎氏米国ニ遊バントセシカバ請フテコノ人ニ随行シ明治七年ヲ以テ彼ノ地ニ至レリ
輔三米国ニアリテ各地ヲ巡回シ人情風俗ヲ視察シテ得ルトコロアリ且ツ深ク英語ニ通ジ明治十年ヲ以テ帰朝セリ
カクテ帰朝ノ後ハ横浜ニアリテ米国商人某氏ニ就キ商業ヲ見習ヒタリ
偶々米国歯科医ハラク、マンソン、ポルキンス其ノ助手松岡萬藏ト云フモノヲ失ヒコレガ後任ヲ要スルコトアリシカバ輔三ハ断然志ヲ決シテ此ノ人ノ門ニ入リ歯科医学ヲ研究スルコトヽナレリ
十一年ニ至リテポルキンス帰国セシカバ輔三ハソノ後独学ニテ研究ヲ継続シ翌十二年ニハ歯科医術開業試験ヲ東京ニ受ケテ及第セリ
其ノ歳業ヲ東京京橋竹川町ニ開キシガ十五年大阪ニ移リ東区本町ニアリテ業ヲ行ヘリ
是ヨリ先キ明治十年前後ニハ緒方病院ニ歯科部ノ設ケアリテ佐治職コレガ主任トナリ大ニ治術ヲ施シタリシガ佐治去リテ後ハ歯科部ヲ廃絶シ十四五年ノ頃ニ至リテハ近世歯科医術ヲ行フモノトテハ大阪ニ一人モナカリシ有様ナリキサレバ当初ハ患者モ疑念ヲ抱キテ其ノ施術ヲ信用セザルモノ多ク非常ノ困難ニ遭遇セリ殊ニ船場ニ開業セシ或ル大医ノ如キハ「西村ハ歯牙ニ金銀ヲ充填スル由ナルガ以テノ外ノ事ナリカヽルモノヲ充填セバ熱ヲ生ジテ耐フ可クモアラズ且ツ極メテ危険ナルモノナレバ決シテコレヲ行フ可ラズ」ト患者ニ警告セリト云フソノ一般ヲ察ス可シ故ニソノ開業当時ノ苦

心ハ頗ル今人ノ想像ヲ許サヾルモノアリ
大阪ニ於ケル近世歯科医学ノ創建ハ実ニ緒方病院歯科部ノ主任タリシ佐治職ニアリ然レドモ佐治ノ蒔キシ種子ハ不幸ニモ地中ニ埋モレテ出デズ此ノ人ノ苦心ニヨリテ初メテソノ芽ヲ発スルコトヲ得タリ其ノ功績最モ忘ル可カラズ
ヤガテ東区本町ノ家ニ移リテ西区汐見橋ノ地ニ居リシガ更ニ東区伏見町ニ転ジ十六年ニ至リテ東区今橋五丁目ニ徒リタリ即チ現住ノトコロナリ
十七年歯科医術開業試験ノ改正セラルヽヤコレガ試験委員ヲ命ゼラレ爾来大正五年ニ至ルマデソノ任ニアリキ
二十三年大阪私立衛生会常議員及ビ幹事トナル後理事ニ挙ゲラル
是ノ歳大阪市会議員トナル二十八年再選セラレマタ大阪築港期成会委員トナル
二十九年「ペスト」病予防委員ヲ嘱託セラル
大阪市歯科医師会設立ノ際ニハ発起人トシテ大ニ奔走シソノ会ヲ成立セシメシコトアリ
四十二年関西歯科医師会大会ノ決議ニヨリ官立歯科医学校設置ニ関スル陳情委員トナリ貴衆両議院ニ請願セリ幸ニシテ両院ヲ通過シタレドモ恰モ政費節減ノ際ナリシヲ以テ直チニ設立セラルヽニ至ラズ
施術ノ範囲ハ治療技工両方面ニ渉リ金充填義歯抜歯等ミナ其ノ長技タリ
其ノ門ニ学ビテ一家ヲナセルモノ

古堅谷萬次郎	吉武　方二	櫻井安太郎	中島　欽二	瀧　貢太郎
澤　猶太郎	光安　常重	宿南　郁三	富澤　正美	山田　利充
原田幸次郎				

等アリ
嗣子好徳家業ヲ継ギテ名アリ

桐村克己伝

桐村克己ハ嘉永四年十月十日豊前中津殿町ニ生ル父ヲ〔俗称吉兵衛雅号秋亭〕ト云フ克己ハ其ノ次子ナリ幼ニシテ藩学進修館ニ学ブ元治甲子幕府征長ノ役ニハ止マリテ留守員中ニアリキ
明治六年志ヲ立テヽ東京ニ出ヅソノ横浜ニ上陸スルヤ路ニ小幡英之助ニ遇フ然レドモ英之助恰モエリオットノ許ニ通学スル途次ナリシヲ以テ語ヲ交フルコト久カラズ袂ヲ分テ東京ニ入ル
後時計業ニ携リシガ其間英之助ノ歯科用金ヲ取扱ヒタルコトアリコレヨリ英之助ト接スルコト密ナリ且ツ幼時郷里ニアリテ嬉戯ヲ共ニセシコトアル間柄ナレバ此間ニ於ケル感作ハ頗ル大ナルモノアリシナラン克己ガ歯科ヲ修メントスルニ至リシハ此ノ間ニアリ且ツ時計業モ意ニ満タザリシニヨリ之レヲ友人ニ託シ志ヲ決シテ小幡氏ノ門ニ入ル時ニ明治八年十一月ナリ
　克己ハコノ決心ヲナスニ当リ一度中津ニ帰省シタリシガ偶々英之助モ帰省セシカバ即チ入門ノ約ヲ固フセリト云フ克己ハ入門ノ後恭敬ヲ以テ師説ヲ奉ジ常ニ研究ニ専念シテ斯学ノ大成ヲ期セリ。エリオットノ門下ニ松岡萬藏ト云フモノアリ、深ク金床義歯ノ術ニ長ジ、エリオット帰国ノ後来朝セルポルキンスPorkins ニ助手タリ、克己即チ機会アル毎ニ横浜ニ赴キ此ノ人ニ就キテエリオット所伝ノ金床義歯ノ術ヲ学修セリ蓋シ師ノ志ヲ継ギコレヲ拡張スルナリ
松岡萬藏ハエリオットニ随従セシ人ナリ、エリオットノ門生ニハ前ニ小幡英之助アリ佐治職アリ、松岡ハ門下ノ中ニアラズト伝フレドモ技工ニ長ズルヲ以テ困難ナル斯術ヲ習得シタル可ク、コレアルガ故ニポルキンスノ助手トナリシナリ此ノ人ハ開業セズシテ歿シタレドモ斯学ニ大功アル人ナリポルキンスノコトハ西村輔三ノ伝中ニ譲ル

十二年一月開業試験ヲ東京ニ受ケテ合格セリ
十二年八月八日ニ至リ小幡ノ塾ヲ出デ直チニ京橋区丸屋町五番地ニ開業ス。九月祝融氏ノ災ニ罹ル間モナク修理シテ業ヲ続ケ以テ今日ニ至ル
開業当時ニハ鈴藤文一郎アリテ業ヲ受ケ且ツ助手タリ又小幡門下ノ高木菅沼モ来リテ助力セリ
克己ハ特ニ金床義歯ノ術ニ長ジ大ニ世ニ行ハル性謙譲ニシテ一見古武士ノ風アリ一時ノ雄長ソノ治ヲ受クルモノ多シ山地川上乃木ノ諸将軍常ニ其ノ治ヲ受ケタリト云フ
明治十三年『歯ノ養生』ヲ著ハシ十四年初秋ニハ医師青木担平ニ嘱シテ『口病窺管』ヲ作ラシム蓋シ慮ルトコロ深キナリ
克己能ク誨ヘテ倦マズ其ノ門ニ遊ンデ一家ヲナセルモノ甚ダ多シ

鈴藤文一郎	山家友二郎	木田平太郎	荒尾　昂曹	木田　一治
荒木　盛英	町田　新八	原岡　清次	長島　兵治	

小幡英之助伝

小幡英之助ハ嘉永元年八月十日豊前中津殿町ニ生ル家世々奥平家ニ仕ヘテ士籍ニ列セリ父ヲ孫兵衛ト云フ藩ノ甲州流軍学ノ師範役タリモト服部氏小幡篤三養ヒテ子トナシ其ノ妹あきヲ以テコレニ妻ハスあきニ三男四女アリ英之助ハソノ長男ナリ
英之助幼ヨリ藩学進修館ニ遊ビ文武両道ヲ修メ頗ル造詣スルトコロアリ元治元年幕府長州ヲ征スルヤ従軍シテ功ヲ樹テタリ明治二年大ニ時勢ニ感ジ東京ニ上リテ日進ノ学術ヲ講ゼント欲ス然レドモ物議ヲ醸サンコトヲ恐レ砲術ヲ大阪ニ学ブト称シヲ（テカ）許可ヲ受ケ中上川彦次郎トトモニ郷ヲ出デ即チ東京ニ至ル時ニ英之助ノ諸父〔○小幡篤三ノ長子〕ニ小幡篤次郎ト云フモノアリ慶応義塾ノ教頭トナリ名声天下ニ籍甚ス因リテ此ノ人ニ就キテ芝新銭座ノ慶応義塾ニ入リ福澤諭吉ニ師事シ英学ヲ修ム居ルコト幾モナクシテ塾ヲ去リ〔○同年ナル可シ〕新銭座ニ開業セシ中津出身ノ医師佐野諒元ノ門ニ入リ医術ヲ学ビ業日ニ就リ終ニ代診生トナル、四年ノ秋篤次郎ハ英之助ノ外科医ニ適ス可キヲ見テ横浜十全病院長近藤良薫ノ門生タラシム良薫ハ嘗テ慶応義塾ニ学ビ篤次郎ト親交アリ時ニ十全病院長トナリ外科ノ術ニ於テ嘖々ノ声アリ別ニ高砂町ニ医院ヲ開キ賛育舎ト云ヘリ英之助ハコヽニ入リテ外科学ノ攻究ヲ励ミキ
一日近藤氏ノ書匣破損セシコトアリ英之助コレガ修理ヲ命ゼラレシガ其ノ成ルヤ技工精妙ニシテ驚クニ堪ヘタリ良薫ノ兄ニ担平ト云フ人アリ医ヲ業トシテ三河ニアリシガ偶々病ヲ得テ良薫ノ家ニ療養セシガ、英之助ノ技工ニ長ズルヲ見、固ク説イテ歯科医学ヲ修メシム曰ク歯科医術ハ前人未知ノ術ナリ之レヲ専攻シ以テ一世ノ師宗トナルマタ快事ナラズヤト英之助聞キテ発奮シ心既ニコレニ決ス然レドモ仍ホ諸ヲ先輩ニ計レリ、当時ノ士風歯科ヲ以テ士人ノ業トセズ反対甚ダ多ク篤次郎モマタコレニ賛成ヲ表セザリキ英之助ハカヽル謂レナキ反対ヲ以テ志ヲ翻スモニアラズ是ニ於テ担平ハ為ニ篤次郎ト会シ歯科医学ノ将来望ミ多キコト、英之助ノ技能甚ダコレニ恰好ナルコトヲ縷説シ以テソノ承諾ヲ得タリ
ソノ是ヨリ先キ担平良薫トモニ歯病ニ罹リ咀嚼ノ困難ヲ来シタルコトアリテ米国歯科医エリオットEliotteノ治ヲ請ヒシガ頓ニ治癒セシヨリ深ク此ノ人ノ治術ニ服シ爾来交情甚ダ厚カリキ因テ紀州水野ノ藩士ニシテ慶応義塾ニ学ビ英語ニ錬達セシ坪井某ト云フ人ヲシテ英之助ノ入門ノ件ヲ請ハシメタリサレドエリオットハ渡来以後数名ノ邦人ヲ雇ヒ入レ雑事ヲ辨ゼシメタレドモ孰レモ徳義ヲ守ラズ信頼ス可カラザルコト甚シ故ニ新タニ邦人ヲ門生トスルコト最モ好マシカラズトテ容易ニ肯ンゼス是ニ於テ良薫ハ坪井ト同行シテエリオットニ懇願シ自カラ保証人トナリ己レノ家ヨリ通学セシムルコトヽシ漸ク入門ノ承諾ヲ得タリ是レ四年ノ末カ五年ノ初ナリ

英之助ガ歯科医トナリシハ近藤兄弟二氏ノ賜ナリ担平ハ東京医科大学教授近藤次繁教授ノ養父ニシテ今年七十四歳ナホ壮者ヲ凌グ慨アリト云フ
入学ノ後ハ忠実ヲ旨トシ研究ノ態度頗ル熱心ナリケレバエリオットモ深クコレニ同情シ極メテ懇切ニ教訓セシト云フ
七年ノ末エリオット横浜ヲ去リ上海ニ赴ク時ニ英之助ハ随従シテ上海ニ赴キ留マルコト約半歳ナリシガエリオット英国ニ向フコトヽナリ英之助モ行李ヲ治メテ帰朝セリエリオットハ英之助ガ開業ニ要スル器械材料等ヲ米国ニ注文シテ袂別セシガ、八年春ニ至ルマデ着荷セズ従テコノ頃マデ開業ノ運ビトハナラザリキ
八年ノ夏英之助ハ東京医科大学校ニ出願シテ試験ヲ請ヘリ実ニ本邦歯科試験ノ嚆矢トス当時ハカヽル試験ノ先例ナカリシヲ以テ医科大学校長長與専齋ハ諸教授ト諮ルトコロアリ熟議ノ末教授赤星〔目折〕造試験主任トナリ長與校長総幹事草郷清四郎「幹事長三輪光五郎」教授石黒忠悳同三宅秀列席ノ上試験ヲ行ヘリ先ヅ歯鍵ヲ示シテ其ノ用法ヲ問ヒ、次ニ抜去シタル大臼歯ヲ示シテソノ名称、左右孰レナルカ及ビ抜去法ヲ問ヒ、最後ニハッチンソン氏歯ニ関スルコトヲ問ヒシガ、答弁流ルヽガ如クニシテ試験官ヲ感動セシメタリ其年十一月（ママ）免状ヲ下附セラル、其ノ文下ノ如シ

小倉県士族
小幡英之助
割印　歯科医術開業免許候事
明治八年十月二日
第四号　内務省衛生局

英之助ガ未ダ前例ナキ試験ヲ出願シ然モ良好ノ成績ヲ以テ合格セルハ豫ガテ独立セル歯科医師試験ノ制定セルヽ基トナリ延イテハ独立セル歯科医師法ノ成立スル源トモナリタルモノト云フ可ク歴史ト重大ナル事蹟トス
　長與専齋ハ其ノ著松香私志篇ノ中ニ凡ソ余ガ事業中医術開業試験ホド意想外ニ心ヲ苦シメ思ヲ焦シタルコトナシ云々トテ漢方家其ノ他ノ反抗コレニ伴フ党同伐異ノ趣ヲ記シタル然ル時ニ英之助ガ率先シテ試験ヲ受ケタルハ一大英断ニシテナタ（マタヵ）斯界ニ於ケル大功ナル可シ
八年夏業ヲ京橋区采女町医師隈川宗悦ノ宅ニ開ケリ
隈川宗悦ハ東京医科大学教授隈川宗雄博士ノ父ニシテ初メ松山棟庵ト共ニ慶応義塾ニ教ヘタリ英之助ハ此ノ人ニ就キテ学ビタルコトアルガ如シ此ノ人ノモト芝ニ住ミシタルガ此頃治療所ヲ此ノ地ニ営ミ竝（茲ヵ）ニ至リテ英之助業ヲ開カシメタリ
当時渡邊良齋ハ名門ノ後ヲ以テ、マタ伊澤道盛ハ旧藩国ノ口科医ヲ世襲シ来リタル故ヲ以テ各一方ニ雄飛セシガ孰レモ新式ノ技術ヲ習得セントシテ止マズ此頃〔○八年ナラン〕道盛ハ津田仙ノ紹介ヲ以テ教ヲ乞ヒ熱心ニ研究セリ十一年ニ至リ高山紀齋米国ヨリ帰朝シテ歯科医術ヲ開業スルアリコレマタ一時ニ鳴ル此ノ三人ハ英之助ト同ジク士籍ヨリ出デシヲ以テ自カラ持スルトコロアリ頗ル高ク従来市中ニ開業セシ入歯師香具師ノ類トハ稍々其ノ風格ヲ異ニシタリ加フルニ其ノ技術勝レタルヲ以テ世人モ漸ク其ノ差異ヲ認識セントセリ故ニ従来開業者ノ間ニモ新式ノ医業ヲ修メテ自己ノ地位ヲ向上セシメント計リシモノ少カラザリシガ中ニモ高橋富士松池野谷貞司ノ二人ハ英之助ノ門ニ入リテ教ヲ受ケ只管攻究ニ従ヘリ
十一年冬居ヲ京橋区尾張町新地一番地ニ転ゼシガ、十四年春ニ至リ南鍋町一丁目ニ移レリ
英之助ハ開業トトモニ其ノ手術料ヲ一定セシガ終始一貫人ニヨリテ手術料ヲ左右スルコトナカリキ縉紳素封ノ患者ト雖モ抜歯ニハ二十五銭以上ヲ請求セズ護謨床義歯ハ一枚八円ニ止マリシナリ斯クノ如キハ人ノ容易ニナシ難キトコロニシテ後進医生ノ箴規トスルニ足ルモノナリ
マタ自ラ持スルコト高ク権貴ト雖モ枉グルトコロナシ木戸孝允モ其ノ門ヲ叩キテ始メテ治ヲ受クル

ヲ得タリト云ヒ某宮家ヨリ参殿ノ上診察セヨトノ恩命アリシニ器械設備等ニ闕クルトコロアラバ治術ヲ施シ難キ旨ヲ啓シテ遂ニ御成ヲ仰ギタリト伝フ中道ノ行トハ謂ヒ難ケレドモ歯科医師ノ地位甚ダ低カリシ時代ニ於テ苟モ人ニ下ラザル慨ヲ示シタルハ斯界ニ自信ヲ与フル恰好ノ刺戟ナリシコト疑フ可アラズ

常ニ公然タル事業ニ携ハルコトヲ好マズ侍医局勤務ヲ慫慂セラレタルコトアリシガ辞シテ出デズ試験委員ニ挙ゲラレタレドモ門下ノ井野春毅ニ委ネ博覧会ノ審査員ニスラ就キシコトアラズ故ニコノ方面ニ於テハ全ク伝フ可キコトナクコレガ為メニ英之助ノ事蹟ハ動モスレバ伝ラザラントスルナリ其ノ後進ヲ率ヒルヤ諄々トシテ倦マズ且ツ其ノ間一ノ秘密ヲ存スルナシ当時ノ医家技術家等ハナホ旧套ヲ守リテ秘事秘伝ト称スルモノ多ク門下ト雖モ容易ニ其ノ蘊奥ヲ闡クコト能ハザリシガ英之助ハ初メヨリ其ノ治療ヲ公開シ些末モ隠ストコロナカリキニ時ニ医道ノ某大家勧告シテ一二事ヲ以テ秘訣トナサシメントセシガ遂ニ聞カザリシト云フ後年門下ノ高足其ノ風ヲ回想シテ曰ク先生ノ教ヲ垂レ給ヘルハ大ニ世俗ト異ルモノアリ通常数年ノ修業ヲ経デハ教ヘラレザルコトモ随分初メヨリ教ヘレタリ其ノ門ニ在リシ間ハ何トモ考ヘザリシガ成業ノ後他人ノ話ヲ聞キテ感慨無量ナリト其ノ薫陶ヲ受ケテ一家ヲナセルモノ頗ル多シ左ニコレヲ列挙セン

桐村　克己（明治八年十一月入門同十二年八月マデ）
高田　直友（明治八年入門同十三年マデ）
富永　省吾
高木五三郎（明治十一年八月入門同十五年三月マデ）
直郵善五郎（明治四（十四？）年三月入門同十八年一月マデ）
竹下初太郎
岩田萬次郎
小林　勝之（明治十三年入門同二十二年五月マデ）
倉成　愼治
俣野　景範（明治十三年七月入門同十五年二月マデ）
菅沼友三郎
堀内　　徹（明治十七年入門同十九年五月マデ）
風斗　就愛
小堀乾三郎（明治十四年一月入門同十七年十二月マデ）
高橋　全治（明治二十年七月ヨリ同二十七年一月マデ）
武藤切次郎（明治二十一年入門同二十六年マデ）
大西　吉造（明治二十三年十月入門同二十六年三月マデ）
三輪五郎七（明治二十六年六月入門同三十四年一月マデ）
伊藤　　喬（明治二十三年二月入門同三十四年十一月マデ）
石川　猶次（明治十九年三月入門同三十四年十一月マデ）
高木恒三郎（明治三十八年四月十九日入門同四十二年四月マデ）

マタ關川重吾モ一時ソノ門ニ在リ〔〇八年六月入門〕黒田家ノ口科伊澤道盛警察医井野春毅モソノ教ヲ受ケ従来家高橋富士松池野谷貞司モ其ノ門ニ入リシコトハ前ニモ一言セリ

二十年門生小林風斗主唱シテ交詢会ヲ起シ小幡学派ノ結束ヲ固ウセントス英之助資ヲ出シテコレヲ後援セリ七月京橋区新肴町開花亭ニ宴シテ発会ノ式トナス而シテ小林ソノ会長トナリ風斗副会長トナル翌二十一年故アリテ其ノ会ヲ閉ヂタリ

三十二年一月十四日小幡氏ノ宅ニ温交会発会式ヲ挙グ此ノ会合ハ旧交ヲ温ムルトトモニ研究ヲ進ムルヲ以テ目的トシ小幡系統ノ全部ヲ網羅シ機関雑誌ヲ発行セリ

同年六月ニ至リ翌年八月八日ヨリ一週間仏国巴里府ノ大博覧会ヲ期トシテ万国歯科大会ヲ開カントストテ本邦ニモソノ参加ヲ求メ来リシガ本邦ニテハ菅沼友三郎委員トナリテ参加スルニ決シ此ノ時英之助ハ推サレテ名誉会頭トナル

此ノ時小幡氏名誉会頭トナリ高山氏会頭トナリ一井正典伊澤信平富安晋青山松次郎榎本積一菅沼友三郎副会頭トナリルイスオットフィー名誉書記トナリ荒木盛英会計主任トナレリ

其ノ業ヲ行フ明治八年ニ始マリ大約三十五年明治四十二年卒然病ヲ得同月二十六日京橋区南鍋町ノ自邸ニ永眠ス二十八日コレヲ青山塋域ニ葬ル平常家人門生ニ語リテ曰ク我レ死ナバ広間ヲ借リテ友朋知人ヲ集メ告別ノ式ヲ挙ゲ遺骸ハコレヲ品川沖ニ投ズ可シ心（必ヵ）ズ墓標ヲ立ツルヲ得ズト故ニ其ノ葬ルヤ金石ヲ以テコレヲ表セズ一庭石ヲ埋棺ノ所ニ置キテ以テ標識トセリ門生等固ク請ヒテ碑ヲ其ノ傍ニ建テ記ヲ撰リテ後葉ニ垂ル

室ハ徳川伯（一橋家）ノ近臣三宅矩方ノ長女八重子ニシテ明治十一年八月ヲ以テ小幡氏ニ嫁ギ一男一女ヲ生ム男ハ重一ト云フ理学士トナリ逓信省ニ奉ズ女ハ英子東京帝国大学教授工学博士末廣恭二ノ室トナル

資性頑固ニシテ憚ルトコロナク人ヲ見レバ揶揄一番其ノ人窮スレバ呵々大笑ス友朋門下コレヲ称シテ一本槍ト云フ然レドモ此ノ風ヲ知ルニ至レバ以テ交誼ヲ害スルナシ最モ釣魚網罟ヲ好ミ木菟引ヲ楽シミ毎歳一月ニハ一週間許リノ旅行ヲ試ミ「旅行ニ付年始ノ礼ヲ欠ク」ト云ヘリ新聞広告ノ俑ヲ作レリ旅行ハ殊ニ漁村ヲ好ミ漁家ニ入リテ獲物ヲ一見セザレバ帰宅セズ嘗テ漁村ヲ通行セシニ夫ハ怒リ妻ハ泣キ小児ハ戸外ニ走リ出セリ英之助ハ嚢中ヲ探リテ小銭ヲ出シ夫婦ノ許ニ持参セシメタルニ天晴レ雨収マリテ俄カニ笑顔トナリ共ニ英之助ニ謝セリト云フ其性コレヲ座視スルニ忍ビザルナリ又乗馬ヲ好ミ人力車ノ創マリシ頃ニハ早ク作ラシメシモ間ニ合ハズ幌ナシノマヽニテ平然乗行セシコトアリ又角觝ヲ好ミ三田ノ邸内ニ力士ヲ集メテ競技セシコトモアリ酒ヲ嗜ムコト甚ダシクコレガ為ニ病ヲ得ルニ至レリ晩年料理法ヲ学ビ之ヲ以テ自娯セリ

高山紀齋治療術式

治術方面

治術方面ニ於ケル主要ナル術式ヲ挙ゲン

一、歯齦疾患　歯齦炎　歯石ヲ除去シタル後沃度丁幾ヲ塗布シ含嗽剤ヲ塗布スソノ含嗽剤ノ処方ハ左ノ如シ

　一、塩剥　　明礬　水

　一、単寧酸　　酒精　水

一、象牙質知覚過敏症　本症ニハ「クレオソート」ト塗抹シ乾燥セシメタル後「セメント」〔○「ロックセメント」即チ「コロール」化「セメント」〕「アマルガム」又ハ金ヲ以テ充填ス

一、歯髄充血　桂皮油、丁香油若クハ「クレオソート」ヲ貼付シタル後「コロヽポルチャ」又ハ「ガッタパーチャ」ヲ裏装シ「セメント」、「アマルガム」又ハ金ヲ充填ス

一、歯髄露出　失活剤ヲ貼付シタル後抜髄シ根管ハ「ガッタパーチャ」若クハ軟性金〔即チ焼還セザルモノ〕ノ充填ヲ施シ、ソノ窩洞ハ「ガッタパーチャ」若クハ「アマルガム」、金ヲ以テ充填ス。抜髄ニハ「ネルブ、エキストラクト」ト称スル黄袋入ノ抜髄針ヲ使用ス。金充填ハ手圧法ナルガ故ニ成形充填ハ不能トス。ソノ失活剤ノ処方ハ左ノ如シ

　一、亜砒酸、塩酸「モルフィネ」、「クレオソート」或ハ石炭酸

一、歯根膜炎　髄腔ヲ開鑿シテ腐敗セル歯髄ヲ除去シソノマヽ放置スルコト一週日ニ及ブソノ間塩剥含嗽剤ヲ投与シテ食物ヲ侵入セシメザルヤウ注意ス、期ヲ経テ一回乃至数回「クレオソート」ヲ

貼付シソノ後「ガッタパーチャ」ノ仮充填ヲ行ヒ、最後ニ永久充填ヲ以テコレニ代フ
一、歯槽膿瘍　コノ処置ハ歯根膜炎ノ処置ト異ラズ、マタ歯齦ヲ切開シ、沃度双蘭菊丁幾ノ合剤ヲ塗布スルコトアリ、コノ法ハ歯髄膜炎ニモ用ヰラル
一、歯槽膿漏　歯石ヲ除去シタル後歯牙歯齦ヲ乾燥シ、「クレオソート」ヲ楊枝ノ尖端ニ浸シテ歯頸部内部ニ塗布シ、歯齦ニハ沃度丁幾ヲ塗布シ別ニ含嗽薬ヲ投与ス
一、歯牙磨耗症　知覚過敏ノモノハコレヲ乾燥シタル後、「クレオソート」ヲ塗布シ、磨光具ヲ以テ摩擦シ、且ツ自家製ノ歯磨粉ヲ使用セシム、ソノ歯磨粉ノ処方左ノ如シ
一炭酸石灰　二tt　白砂糖　四◎　「カスチール」石鹸　四◎　鹿蹄芋油（ウインターグリーンオイル）二◎　〔バンデンボルグ氏ノ処方〕
前犬歯ノ磨耗甚シキモノハ継続歯ヲ施ス、継続歯ハ当時「ピポット、チース」ト称スル陶歯ノ底孔内ニ「ヒッコリー、ウード」ヲ挿入シヒル氏ノ「ストッピング」ヲ以テ歯根ニ固着セシムルモノトス
一、抜歯　ソノ頃ハ未ダ局所麻酔薬ヲ使用セザリシヲ以テ、直チニ鉗子ヲ以テ抜去シ、残根ニハ「エレベーター」ヲ使用セリ。外国人ニ施術スルニハ多ク「クロヽフォルム」ノ全身麻酔ヲ施スカヽル際ニハ實吉博士又ハ外人医師ニ立会ヲ乞ヘルコト多カリキ
一、抜歯後出血処置　単寧酸、明礬、過格魯児鉄液ノ貼付ヲ施ス、時トシテハ「プラスター」ヲ以テコレヲ被フ
一、口腔外科的疾患　多分ハ外科専門ノ医師ニ委任セシモノナラン
一、薬品及材品　其ノ著「歯科薬物提要」ハ自家常用ノ薬品及ビ材品ヲ基礎トセルモノナルガ、今ソノ主要ナルモノヲ挙グベシ
薬品　失活剤、「クレオソート」丁香油、桂皮油、沃度丁幾、沃度双蘭菊丁幾合剤、単寧酸、塩剥、明礬、過格魯児鉄液、「クロヽフォルム」、「コロヽポルチャ」、「サンダラクバニシュ」
一、歯髄疾患ノ鎮痛剤トシテ阿片丁幾、樟脳油等分ニ「クレオソート」ノ少量ヲ加ヘタル者ヲモ使用セリ
材品　金箔、「アロイ」〔自家製品「メキシコ」銀四錫五ヲ溶合セルモノ　或ハ銀二十八匁八分白銅三匁二分錫四十匁ノ割合トス〕「セメント」〔○「コール」化「セメント」〕「ガッタパーチャ」、「ヒル」氏「ストッピング」
技工方面
一、「ゴム」床義歯
印象材品ハ自家製ニシテ黄蝋ニ「ガッタパーチャ」少量ヲ混ズ
仮床材品ハ自家製ニシテ黄蝋ヲ扁平トナセルモノト棒状ニナセルモノトヲ併用ス
模型材品ハ「ホワイト」製「プラスター」ヲ用フ
金鉤ヲ使用セズ局所義歯ニ於テハ臼歯ハ「ゴム」床ヲ以テ隣歯ノ頰舌面ヲ挿ミ前歯ハ「ゴム」床ヲ延長シテ大臼歯ノ舌面ニ及ボシコレヲ維持シ、上顎ニ於テハ時トシテ金床ヲ付ス、上顎総義歯ニハ空室ヲ装付ス
蒸和「ゴム」ハ「ピンク」、弓引、黒「ゴム」〔但シ上顎ニ〕ヲ使用ス
黒「ゴム」ハ弾力強ク至極薄ク製作サレ上顎義歯床ニ適応シ主トシテ外国人向ニ使用セラレタリコノ蒸和ハ至ツテ困難ニシテ、モシ火力ヲ誤レバ海綿状トナリヤスシト云フ
マタ明治二十一年頃マデハ金床ノ製作ナカリキト云フ
咬合ハ咬合器ヲ使用セズ試適ニ際コレヲ修整シ、若クハ総義歯ニ於テハ咬合蝋ヲ嵌シ、模型ノ後部ニ十字以テ適合シマタ局所義歯ニ於テハ咬合蝋ヲ模型ニ被ヒ「ギブス」ヲソノ上部ヨリ内部ニ注流スルモノトス

治療器械、技工器械
小幡式木製椅子　木製「キャビネット」、「ケーブル、インジン」〔但シ殆ド使用セズ〕治療室「レーズ」、技工室「レーズ」、蒸和罐及ソノ付属品、抜歯鉗子、「エレベーター」、手柄「バー」、「エキスカベーター」、「チセル」「ドリル」、「スケール」、歯齦刀、歯間分離鑢子、洗滌器、乾燥器、「クランプ」、「インジン」ハ備付ケアレドモ使用セルコト稀ナリ、マタ「ドリール」モ柄付ノモノヲ用ヰタリコレ患者ニ震動ノ不快ヲ感ゼザラシメントノ主旨ニヨルモノ歟
「インジン」ヲ使用セザル故小器械ハミナ各種ノ鋭利ナルモノヲ備ヘ「エキスカベーター」、「ドリール」、「スケール」等ノ如キハ刃端ヲ製作修理セリト云フ
ソノ治療ノ大方針ハナルベク天然ヲ失ハザランコトヲ期シ、歯牙ニ震動ヲ与ヘザルコトヲ念トセリサレバ金充填ノ如キモ初メニハ圧迫充填ヲ採用セリ

高橋富士松伝

高橋富士松ハ嘉永元年二月八日ヲ以テ江戸日本橋本町三丁目ニ生ル祖父ハ虎一屋藤右衞門ト呼ビ両国ニ菓子商ヲ営ミシガ其ノ父ニ至リテ歯科ヲ業トセリ富士松幼ヨリ父ニ随ヒテ其ノ道ヲ修メ頗ル得ルトコロアリ
明治八年ノ頃小幡英之助洋式歯科医術ヲ以テ名都下ニ著ハル富士松ハ此ノ頃スデニ業ヲ開キテ多クノ患家ヲ有セシガ新知識ヲ得ントスル念禁ジ難ク隈川宗悦ノ紹介ニ由リテ贄ヲ執リ業余ヲ以テ通学セリ
従遊二年ニシテ業大ニ進ム
富士松ニ近隣ニ清水卯三郎ト云フモノアリ書肆ヲ営ミテ穂積（瑞穂）屋ト称ス富士松ガ同志トトモニ此ノ人ニ託シテ歯科ノ器械ヲ米国ヨリ輸入セシハ実ニ明治八年ノコトナリ初メ竹澤國三郎アレクサンドルヨリ「カタログ」ヲ借リ其ノ書ヲ買ハントテ周ク市中ノ洋書店ヲ訪ヒテ要領ヲ得ザリシガ富士松ハコレヲ聞キテ竹澤ヲ穂積（瑞穂）屋ニ伴ヒテ相談セシニ其ノ売品ニアラズシテ注文者ニ無代贈与サルヽモノナルコト判明セシカバ神翁金齋トモ計リ三人共同出金シテ穂積（瑞穂）屋ノ手ニテ機械材品ヲ米国ニ注文スルコトヽナレリ是レ本邦ニ於ケル歯科器械輸入ノ嚆矢トス穂積（瑞穂）屋ハ此ノ輸入ニ利ヲ得シト見エ盛ニ輸入販売ヲナセシカバ都鄙ノ需用者ハ非常ノ便ヲ得タリ
富士松ハ爾来業ヲ本町ニテ行ヒシガ明治二十一年ニ至リ宮内省皇后宮職ノ命ニヨリ爾来折々参殿シテ二位ノ局高倉典侍其ノ他高級女官ノ歯科診療ヲ担任スルコトヽナレリ
明治二十二年神翁金齋吉田仙正ハ富士松ト計リ共同出資ノ下ニ歯科矯和会ヲ起シタルガコハ前年石橋泉、久保田豊ノ慫慂ニ依リテ神翁吉田ガ竹澤國三郎ト共ニ起セシ東京歯科専門医学校ノ開校早々祝融ノ災ニカヽリ改築後間モナク校内ニ内訌ヲ生ジテ瓦解セシカバ其ノ素志ノ空シクナランコトヲ慨シテナリ矯和会ハ幾モナクシテ講義会トナリ更ニ共立歯科医学校トナリ今ノ日本歯科医学専門学校ノ基礎トナル其ノ顛末ハ神翁金齋ノ伝中ニアリ
明治三十年一月九日伊豆熱海ニ於テ歿ス年五十浅草福寿院ニ葬ル
其ノ門ニ入リテ一家ヲ為セルモノ左ノ如シ

鈴木伊麻吉	笹川鐵五郎	早野連之助	木内　粂吉	長谷川友二
竹澤　保	阿部清之助	志賀　信藏	木村文次郎	天野　貞

其ノ子虎一箕裘ノ業ヲ継ギテ名アル外、長女孝子ノ社会ノ風潮ヲ察知シ夙ニ婦人歯科医ノ必要ヲ認メテ明治二十七年四月開業試験ニ及第シ本邦ニ於ケル婦人歯科医ノ鼻祖トナレルアリ

竹澤國三郎伝

竹澤國三郎ハ天保十四年二月二十五日ヲ以テ江戸日本橋上槇町二十一番地ニ生ル父ハ竹澤久司ト云ヒ武州鴻ノ巣ノ産ニシテ口科ヲ以テ業トセシ人ナリ、母ハ小林氏國三郎ハソノ三男タリ、嘉永元年國三郎六歳ノ時父歿セシカバコレヨリ養父ノ許ニアリ養父モ名ヲ竹澤久司ト称シ実父ノ業ヲ継ギシモノナリ

安政五年養父ニ従ヒテ実業ヲ学ビシガ頗ル勤勉ニシテヨクソノ道ニ達シケレバ明治二年四月ニ至リ芝宇田川横町五番地ニ業ヲ開キソノ術大ニ世ニ行ハレタリ

明治七年仏人アレキサンドル東京ニ遊歴シテ京橋区明舟町一丁目一番地ニ寄留シ頗ル歯科ノ術ニ長ゼル由ナリキ会々駅逓局官吏ニ大川氏ト云ヘル人アリアレキサンドルト交際アリト聞キ同氏ノ紹介ニヨリテアレキサンドルノ家ニ通学シ西式ノ歯科医術ヲ学ブコト六ケ月ニ及ビタリ然レドモ家ニ業ヲ開キ日夜患者ニ接セル身ナリシカバ自然学業ニ専念ナリガタクハカバカシキ進歩モ見エザリシヨリ翌年八月意ヲ決シ当局ノ許可ヲ請ヒテ八年七月一日ヨリ九年六月末日マデ一年ノ契約ニテアレキサンドルヲ自己独占ノ教師ニ聘セリ当時外国人ヲ雇ヒ入ルヽニハ府知事ノ許可ヲ要セシガソノ煩瑣ナルコト驚クノ外ナク出願シテヨリ許可セラルヽマデニ十三回モ府庁ヘ出頭セザルベカラザリシト云フ其ノ間休日ヲ除キテ毎日四時間ヅヽ〔午前十時ヨリ十二時マデ午後二時ヨリ四時マデ〕ソノ伝習ヲ受ケ期ニ至リテ業大ニ進メリヨリテアレキサンドルハ仏文ノ歯科修業証書ヲ授ケテ歯科ノ医タルニ堪フルコトヲ証セリ抑々外人ニ就キテ蛍雪ノ功ヲ積ミタル歯科医ノ数ハ決シテ少カラズ然レドモ外人ヲ招聘シテ自己独占ノ講師トナシソノ業ヲ習ヒシモノハ未ダ有ラザルトコロナリ

神翁金齋マタコノ挙ヲ賛シ学ヲアレキサンドルニ受クシカレドモ故アリテ退学シ業ヲ卒フルニ至ラズ其ノ業ヲ受クルヤ言語充分ニ通ゼザルタメ技工方面ノコトハ習得ヤヽ容易ナレドモ治療病理薬物学等ノ理論応用ニ至リテハコレヲ覗フコト甚ダ困難ナリキ初メテ「プラスタ」ヲ見シトキソノ名目代理売捌所ヲ知ラントシテコレヲ教師ニ問ヒシモ要領ヲ得ズ僅カニソノ鑵ニ貼付セル「レッテル」ヲ剥ガシ携ヘテ横浜ニ至リ五十九番館ニ於テ得タルコトアリ、マタ「カタログ」ヲ借リソノ書ヲ得ントテアマネク市中ノ洋書店ヲ訪ヒ穂積（瑞穂）屋ニ至リテヤウヤクソノ売品ニアラザルコト判明シヨリテ神翁金齋、高橋富士松ノ二氏ト謀リ醵金シテ穂積屋ニ託シ米国ヘ注文セシコトアリコノ米国ヘ材品ヲ注文セシハ本邦ニ於ケル輸入ノ嚆矢ナリト云ヘリ穂積（瑞穂）屋ハコノ輸入ニ利ヲ得シモノト見エ業務ヲ次第ニコノ方面ニ拡張セリコノ穂積（瑞穂）屋ノコトニツキテハ別ニ記ス可シ

明治二十一年三月京橋区弥左衛門町ニ東京歯科専門医学校成ルコレ千葉県ノ人石橋泉（千葉病院医学校出）ト久保田豊ノ二氏都下ニ歯科医育ノ機関ナキヲ患ヘ竹澤國三郎吉田他（仙ヵ）正神翁金齋ト謀リテ立ツルトコロナリ即チ石橋泉校長トナリ竹澤吉田神翁ノ三氏学監トナリ久保田豊幹事トナル修業年限ハ一ケ年半ニシテ分チテ三期トナスソノ設立ハ甚ダシキ苦心ノ結果タリシニ拘ハラズ開校後数月ニシテ校長ト幹事トノ間ニ衝突起リ校長ハ職ヲ辞スルニ至レリ然ルニ学校ハイツシカ幹事ノモノトナリ久保田自カラ校長トナリ小島原泰民ヲ聘シテ講師トナヒナホ業ヲ継続スコノ時竹澤吉田ノ二氏関係ヲ絶チ神翁金齋一人ノミ更ニ出資経営スルコトヽナルシカモマタ不結果ニシテ永続スベカラズ一年ヲ経ズシテ閉校ノ止ムナキンニ至レリコノ事タトヒ功ヲ収メズト雖モソノ歯科医育ノ権輿タルガ故ニ特筆大書セザルベカラズ

大正三年三月二十六日歿ス即チ荏原郡目黒村中目黒祐天寺ニ葬ル子久治郎業ヲ嗣グ

ソノ門ニ入リテ歯科医トナリシモノ

　　中根　茂一　　竹内　清平

アリ

中年ヨリ天源陶宮術ヲ修メソノ奥義ヲ究ム

清水卯三郎伝

清水卯三郎ハ文政十二年三月四日ヲ以テ武州羽生町ニ生ル家郷士タリ父某卯三郎ハ其ノ三男ナリ壮ニシテ学ニ志シ江戸ニ出デ箕作阮甫ノ門ニ入リ蘭学ヲ修ム然レドモ一家ノ意ニアラザルガ故ニ自己ノ書籍什器ヲ估リテ学資ニ供セリ

安政元年露国ノ使節伊豆下田ニ来ル卯三郎幕使ニ随行シテ露人ニ接シ露語ヲ学ヅ（ブヵ）コトヲ得タリ

文久三年鹿児島ニ寇ス文書翻訳ノ為特ニ幕府ノ許可ヲ得テ英艦ニ搭乗ス後生麦事件媾和談判ノ事起ルニ及ビ大ニ斡旋ノ労ヲ取ル

慶応三年万国博覧会ノ巴里ニ開設セラルヽヤ吉田某トトモニ其ノ地ニ到リ日本紙蒔絵磁器其他ノ品ヲ携ヘテ出陳シ大ニ本邦美術工芸ノ真価ヲ知ラシメタリ是我ガ商人ノ公然海外ニ出ヅル嚆矢ナリ是ニ於テ諸般ノ学術技芸ヲ修メ就中陶器七宝ノ術ヲ学ビ滞留中仮名活字ヲ鋳造セシメ活版石版ノ器械ヲ始メ幾多ノ器具材料ヲ購入シ帰途米国ヲ歴覧シ明治元年五月ヲ以テ帰朝セリ

乃チ浅草森田町ニ店舗ヲ開キテ穂積（瑞穂）屋ト称シ洋書及諸器械ヲ売リ傍ラ石版印刷業ヲ開ク

其年進ンデ新聞ヲ発刊ス六合新聞ト云フ忌諱ニ触レテ禁止セラル

明治二年本町三丁目ニ移リ大ニ業務ヲ拡張セシガ八年ニ至リ初メテ米国ヨリ歯科医療器械ヲ輸入セリ此ノ歯科医療器械ノ輸入ハ本邦歯科史上注意スベキ出来事ナリ事神翁高橋等ノ伝ニ見ユ

其後或ハ自家ノ研究発明ニ係ル窯業用薬品ヲ製造販売シ陶器七宝ノ製造法ニ改良ヲ加ヘ或ハ六合館ヲ経営シテ洋書翻刻ノ業ニ従ヒ国語改良ノ必要ヲ唱道シテ「かなのくわい」ヲ起シ本邦最初ノ国語辞書タル「ことばのはやし」ヲ出版スルニ至ル

又日本橋区学務委員トナリテ教育上ニ裨益スルトコロ多ク書籍業者組合ノ第一次ノ委員トナリテ斯業ノ発達ニ寄与スルコト少カラズ夙ニ民権主義ヲ抱キ明治ノ初年瓦斯局埋管費用ヲ需要者ニ負担セシメントノ議アルヤ敢然論争シテ免除ノ目的ヲ達セリト云フ

夙ニ漢学ヲ吉川波山ニ受ケ詩賦ヲ能クシ蘭英仏三国ノ語ニ通ジテ著訳少カラズ殊ニ化学ノ研究ニ深ク薬物学醸造学ニ関スル述作アリ居常学ヲ尚ビ攻ヲ怠ラズ世ニ先ンジテ新文物ヲ採用スルヲ至楽トセリ

明治四十二年一月二十日歿ス年八十二

翌四十三年其ノ功ヲ録セラレ嗣連郎ニ銀杯一箇ヲ下賜セラル

吉田仙正伝

吉田仙正ハ弘化四年〔○月不詳〕武蔵国波久礼ニ生ル。旧姓ハ羽金、家世々郷士タリ、安政四年両親ヲ喪ヒ東京ニ出ヅ時ニ年十一

此頃神田柳原ニ吉田仙貞ト云フモノアリ口科ヲ以テ門戸ヲ張リ貴紳ノ治ヲ受クルモノ多カリシガ仙正ハコノ家ニ寄寓スルコトヽナリ、遂ニ歯科ヲ志セリ。吉田氏子ナカリシカバ仙正ハ遂ニ師ノ姓ヲ冒シ即チ仙正ト改名セリ

成業ノ後師ヲ助ケテ治ヲ施セシガ、ヤガテ師ノ実子生ルヽニ及ビ師家ヲ辞シテ日本橋村松町ニ独立開業セリ時ニ明治十年ニシテ仙正ノ齢正ニ三十ナリキ

カヽリシ程ニ泰西歯科医学漸ク我国ニ行ハレ在来ノ開業者モ有志ノモノハ或ハ外人ニ就キテ新式ノ治術ヲ研究シ或ハ外人ニ就キテ学ベル先進ノ門ヲ叩キテ教ヘヲ受ケタリ。此ノ時仙正モ心ニ感ズルトコロアリ神翁金齋ノ門ニ入リテ金床義歯ノ法ヲ受ケタリ

明治二十一年三月京橋弥左衛門町ニ東京歯科専門（“医”脱）学校ヲ石橋泉久保田豊二氏ノ発起ニテ成立セシトキ神翁金齋竹澤國三郎トソノ挙ヲ賛シ資金ヲ出シ且ツ其ノ学監トナレリ其ノ業成ラズ

シテ解散セシガ翌年歯科矯和会ノ成リシ時マタ高橋神翁ト共ニ資ヲ出シタリ
此ノ会ハ後ニ講義会ト改マリ後ノ共立歯科医学校ノ前身ナリ
業ヲ行フコト三十年明治四十五年一月二十八日病ヲ以テ赤十字病院ニ歿ス年六十四
ソノ門ニ入リテ業ヲ遂ゲ一家ヲナセルモノ左ノ如シ

長谷川滿壽吉	武内　雅三	鈴木敏之助	石原　金作	小笠原義章
工藤　利作	笠間　三藏	緑川　宗作	市川　豊次	別府　禮吉

室ハしん子吉田仙貞ノ養女ニシテ四男三女アリ、長男ハ俊道千葉医学専門学校ヲ出デ目下米国サクラメント市ニアリ医ヲ業トス次男ハ夭ス三男ハ上杉ト称シ歯科ヲ業トセリ四男ハ弘東京歯科医学専門学校ノ出身長女ハあさ子塚原氏ニ養ハル二女ハすゞ子長谷川滿壽吉ノ室トナル三女ハあか子鈴木敏之助ノ室タリ
居常端正ニシテ酒色ニ耽ルガゴトキコトナクタヾ漁ト旅行トヲ好メリ、マタ角力モ甚ダ之ヲ好ミ大角力ハ毎回コレヲ見ズンバヤマザリキト云フ

高山紀齋伝

高山紀齋ハ嘉永三年十二月十二日備前岡山ニ生ル家高山右近ニ出ヅト伝フ世々槍術ヲ以テ藩侯ニ仕フ父ヲ紀次母ヲ清子ト云ヒ其ノ長子タリ幼名ヲ彌太郎ト云ヒキ
幼ニシテ藩校ニ入リ文武ノ道ヲ励シガマタ其ノ叔父磯田郡次兵衞ニ就キテ儒術ヲ学ビ阿部右源次ノ門ニ遊ビテ真影流ノ剣術ヲ究メ渡邊儀兵衞ニ従ヒテ甲州流ノ軍書ヲ講ジタリ後蘭学ノ隆盛ナルニ及ビテハ転ジテ洋法ノ兵式ヲモ習ヒタリ
其ノ藩校ニ在ル日君侯ノ親ラ衆生ノ学力ヲ試ミラレタルコトアリ紀齋ハ其ノ御前ニ左伝ヲ講ジ儀容整然言辞明白ナルヲ以テ列座斉シク驚倒シ侯ヨリハ物ヲ賜ヒシト云フ
慶応四年正月岡山藩ノ兵摂州西ノ宮マデ出陣セリ時ニ紀齋ハ洋式兵術ヲ習得セル故ヲ以テコノ行ニ加ハルコトヲ命ゼラレ西ノ宮ニ到リ次デ京都ニ入リ偶々王政維新ノ業成リ征東ノ師発セントスル時ナリシカバコノ軍ニ加ハリテ東征シ白河二本松福島若松等ノ各地ニ転戦スルコト一年余東北鎮静ノ後初メテ郷里ニ帰ルコトヲ得タリ
紀齋思フヤウ国ヲ挙ゲテ党争ヲ事トシ徒ラニ干戈ヲ玩ベドモ時勢ハ其ノ間ニ急転セリ、今ハ斯カル無用ノ業ニ専念スベキ時ニアラズ、ナホ旧来ノ陋習ヲ墨守シテ新シキ潮流ニ棹スコト知ラズンバヤガテハ外国人ノ乗ズル所トナリテ我国ハ危カルベシ、若カズ力ヲ平和ノ業ニ尽シテ我ガ文明ノ発展ニ資センニハト。即チ戎衣ヲ脱シテ再ビ学窓ノ人トナレリ
明治二年四月陸軍省御用掛ニシテ兼テ慶応義塾塾頭タル熊本ノ人岡田攝藏故アリテ岡山ニ滞在スルコトアリシカバ、岡山藩ニテハ此ノ機会ヲ利用シテ藩ノ子弟ニ英学ヲ伝習セント欲シ有志者ヲ募リ其ノ中ヨリ十人ヲ簡抜シテ従学セシメタリ。紀齋モ其ノ選ニ当リ藩学教授補トナリテ岡田ノ教ヲ受ケタリ。然ルニ六十日許ニシテ岡田ハ帰京スルコトヽナリシカバ英学ノ稽古モ一段落トナレリ、紀齋ハ大イニコレヲ惜ミ岡田出発ノ前夜コレヲ其ノ寓ニ訪ヒ卒然コレニ問ヒテ曰ク英学ハ六十日間ノ修業ヲ以テ人ヲ教フルニ足ルカ、対ヘテ曰ク否曰ク小子ハ藩学ノ教授補トナリテ先生ニ従ヘリ、先生帰東ノ後ハ藩学ニ於テ諸生ヲ教ヘザルベカズ、而シテ英学ノ秘蘊ハ小子遂ニコレヲ極ムル能ハズ惜ムベキニアラズヤ、曰ク真ニ惜ムベシ曰ク進ンデ英学ヲ修ムル方法ナキカ曰ク東京ニ出ヅルニ若クハナシ紀齋コヽニ於テ容ヲ改メテ曰ク小子ハ先生ニ東京ニ従ヒテ英学ヲ修メ其ノ堂ニ上ラントス、先生小子ノ請ヲ容レ教育ヲ給フヤ対ヘテ曰ク可ナリ、曰ク岡山藩ニ内規アリ書生ヲ他郷ニ游学セシメズ、故ニ小子ノ目的ハ達スルニ由ナシ、願ハクハ先生ノ高蔭ニ依リテ郷ヲ出ヅルヲ得ント、岡田コレヲ諾ス。翌日岡田大参事ノ邸ニ至リテ曰ク、某貴藩ニ客タルコト二閲幸ニ秀才ヲ教育スルヲ得

タリ喜悦何物カコレニ若カン、然レドモ某将ニ東ニ帰ラントス再遊期スベカラズ、目下某ノ許ニ遊ベル秀才ノ業廃センコトヲ恐ル、願ハクハ数年ノ間コレヲ借リテ東京ニ伴ヒ斯学ノ奥義ヲ究メシメント、大参事対ヘテ曰ク、藩ニ内規アリ許シ難シ、岡田曰ク然ラバ其ノ半数ヲ借ラン、曰ク貸シ難シ、曰ク然ラバ某々ノ三人ヲ貸ラン、大参事止ムコトヲ得ズシテコレヲ許ス、其ノ夜大参事諸士ヲ会シテ議ス、衆皆不可トナス大参事即チ岡田ノ寓ニ至リテ陳謝ス、岡田怒リテ曰ク、某ハ陸軍御用掛兼慶応義塾塾頭ナリ、某ヲ愚弄セラルレバ、某マタ考フルトコロアリト辞色峻烈枉グベカラズ、大参事遂ニ其ノ二人ヲ一人ニ減ゼンコトヲ乞フ岡田止ヲ得ザルト為シテコレヲ一人ニ減ズルコトヲ許ス、其ノ一人ハ即チ紀齋ナリ

カクテ東上ノ後慶応義塾ニ入リテ専ラ英学ヲ習ヒシガ後義塾ヲ去リ米人ガロゾルGarosol ニ従ヒテ業大ニ進ム是ヲ以テ藩侯ハ紀齋ヲ挙ゲテ留学生トナシコレヲ海外ニ赴カシメントセシガ幾モナクシテ文部省ノ制度一変シ、各藩ヨリ留学生ヲ出スコト能ハザルニ至リシカバ紀齋ハ洋行ヲ中止セザルベカラザルコトヽナレリ

曩ニ紀齋ガ東京ニ出デシハ尋常ノ手段ニアラザリシヲ以テ僚友多クハコレヲ嫉視シ陰ニソノ業ヲ励メリ故ニ学業中途ニシテ郷ニ帰ルハ洵ニ忍ビザルモノアリヨリテ百方双親ニ説キ僅カニ渡航ノ費用ヲ乞ヒ明治五年一月単身米国ニ渡レリカクテ渡米ノ後ハ種々ナル職業ヲ求メテ多少ノ資ヲ得其ノ余暇ヲ以テ研究ニ従事セシガ数月ノ後始メテ便宜ヲ得プリンスノ学校ニ在リテ正則ノ教育ヲ受ケタリ紀齋ハ幼年ノ頃ヨク糖果ヲ好ミ久シク歯牙及歯齦ヲ病ミ時トシテ其ノ苦痛堪ヘガタカリシカバ郷里京都及東京等ニ於テ口科医ノ門ヲ叩キシモ皆其ノ医スベカラザルヲ云フノミニテ殆ド其ノ喪失ヲ待ツノ外ナキ有様ナリキサテプリンスノ学校ニ通学シツヽアル間ニモ其ノ痛ヲ発シタレバ一日歯科医師ヴン、デンブルグ Van Denburgノ診察ヲ受ケタリヴン、デンブルグハ一見シテ其ノ病状ノ重大ナルニ驚キ卒然トシテ日本ニ歯科医ナキカト問ヘリ紀齋ハコレニ答ヘテ日本ニ歯科医多数アリト雖モ一人之ヲ治スルモノアラザリキト云ヘルニヴン、デンブルグハ聞キテ茫然タルモノアリキコレヨリ日々其ノ家ニ通ヒテ治療ヲ受ケシニ其ノ治術効ヲ奏シ漸クコレヲ恢復シマタ硬質ノ物ヲ咀嚼スルヲ得ルニ至レリ

カヽリシカバ紀齋ハ其神効ニ驚キツヽ其ノ治療所ニ出入セシガ次第ニヴン、デンブルグト懇親ヲ重ネ遂ニ歯科医学ノ研究ヲ慫慂セラレタリ

ヴン、デンブルグ曰ク「過日君ノ語レル所ニ依レバ日本ニハ歯科医アレドモ君ノ歯病ヲ治スルニ足ルモノナシトノ事ナリ而シテ君ノ歯病タルヤ米国歯科医ニ取リテハ別ニ治療ニ困難ナリトハ思ハザルモノナリ日本ハ今ヤ文明ノ世界ニ入リ百事皆新ニシテ万般ノ学術一トシテ緊要ナラザルハナケレド余ノ門ニ入リテ歯科学ヲ修メテ帰リ斯学ノ発達ニ貢献セヨ米国ハ斯学ニ於テ全地球上最モ進歩スル所ナレバ君ガ此ノ国ニ於テ此ノ学ヲ修メテ帰ルハ独リ君ニ取リテ好都合ノミナラズ国家ニ取リテモ非常ニ利益ナルベキヲ信ズ」ト

紀齋ハ其ノ意ヲ諒セシモ我ハコレ武士ナリトノ先天的自負心ノタメニ当時ノ所謂入歯師トナルヲ肯ズル能ハズ答ヘテ曰ク「米国ニ於テハ歯科医師モ紳士トシテ待遇セラルレドモ日本ニ於テハ士人ハ之ヲ歯セズ遠ク笈ヲ負ヒテ来リ辛酸ヲ嘗メテ学ビ帰国ノ後郷党ニ容レラレズ朋友ニ軽蔑セラルヽガ如キハ余ノ願ハザルトコロナリ」トヴン、デンブルグコレヲ聞キテヤヽ色ヲナセシガ沈思ヤヽ久シクシテ曰ク「歯科医師ガ日本ニ於テ尊敬セラレザルハ蓋シ其ノ無学ナルニ由ルナラン歯科医ニシテ学術ノ素養ダニアラバ決シテ人々ヨリ侮ラルヽ筈ナキナリ」ト。紀齋コヽニ於テ深ク心ニ感ズル所アリ然モナホ決心スルニ至ラズ然レドモヴン、デンブルグ懇説シテ止マズ紀齋モヨリテ誤解ヲ一掃シ斯学ニ従事スルコトヽナレリ此ノ間ニ於ケルヴン、デンブルグノ好意ハ実ニ常人ノ企及スベキ所ニアラズ其ノ本邦歯科医学ニ及ボシタル影響マタ計ルベカラザルモノアリ

紀齋ハコレヨリ、ヴン、デンブルグノ家ニ寄寓シテ教ヲ受クルコトヽナリ奮励努力ヲ以テ研究ニ従

ヒシガ其ノ理解力ニ富ミ手技ニ巧ミニシテ万事武士的ナル態度ハ大イニ師ノ心ヲ喜バシメ治療室及ビ技工室ノ助手トシテノミナラズ家内ノ細事マデ担任セシメラルヽニ至レリ
カクテ其ノ業成リシカバ明治十一年四月ヲ以テ本邦ニ帰レリコレヨリ直ニ両親ヲ郷里ニ省シガ間モナク東京ニ出デ開業試験ヲ受ケテ業ヲ銀座ニ開ケリ
紀齋後年ノ談ニヨルニ此ノ時未ダ歯科医術ノ前途目睹スベカラズ果シテ斯業ニヨリテ世ニ処シ得ベキヤ否ヤサヘ危ブマレタリト云フ亦以テソノ振ハザリシコトヲ知ルニ足ランカ而シテ積年ノ餘習ニヨリテ世人ノ歯科医ヲ見ルコト甚ダ軽カリシカバ開業当時ノ苦心ハ頗ル甚ダシキモノアリ当初ハ紀齋モ因テ生計ヲ立ツルヲ得ルヤ否ヤサヘ覚束ナク感ジタリト云フ有様ナリキ然レドモ拮据倦ムコトナク或ハ患者ニ誨ヘ或ハ公衆ニ説キテ歯牙ノ重ンズ可キ所以ヲ明カニシ十四年五月ニハソノ主旨ヲ編シテ保歯新論ヲ作リコレヲ梓ニ上セテ世ニ出セリ、ソノ後モコノ種ノ書ヲ多ク著シテ世人ヲ導クコト多カリケレバ世人モ漸ク歯牙ノ尊重スベキコトヲ知ルニ至レリ
十七年九月ニ至リ歯科医術開業試験委員ヲ仰付ケラレタリ歯科ノ試験ハコノ年ニ至リテ制度ヲ改メ四月ニ第一回ヲ東京ニ開キ警視庁嘱託医三瀦信三（謙三）ソノ委員トナリシガコノ月ヨリ紀齋一人ニテ担任スルコトヽナレリソノ初メニハ試験ヲ出願セシモノ二名ナリト云フ
二十年ニ至リテ紀齋ハ　皇后陛下東宮殿下各宮殿下ノ拝診ヲ命ゼラルコレ臨床家トシテノ名声天下ニ喧シカリシガ為ナルガ開業医トシテ実ニ破格ノ恩命ニシテソノ光栄マタ大ニナリト云フ可シ其ノ七月ヨリ侍医局勤務ヲ命ゼラレ永クソノ任ニアリシガ、四十一年官制ノ改正ニヨリ更メテ侍医寮御用掛ヲ命ゼラレ今モソノ任ニアリ
ソノ後開業試験ノ出願者ハ漸々ソノ数ヲ増加シタレドモ累計シテナホ数十名ニ過ギザリシカモソノ素養浅薄ニシテ歯科医トシテ世ニ立ツ可キ学力ヲ備フルモノ少カリキ当時本邦ニハ一ノ歯科学講習所ナク一ノ歯科学書サヘナカリシカバ学習者ノ苦辛ハ非常ノモノニシテ試験出願者ノ寥々タルモマタ故アリシナリコヽニ於テ紀齋ハ奮ツテコノ闕典ヲ補ハント欲シ一方ニハ学校ヲ経営シテ子弟ヲ教ヘ他ノ一方ニハ歯科書ヲ著ハシテ学者ノ修業ニ便セリ
二十三年一月高山歯科医学院創立セラル学院ハ芝区伊皿子町ナル其ノ居宅ノ隣ニアリキ地ハ古ノ所謂月ノ岬ニシテ地勢高燥極メテ勉学ニ適シ校舎ハ私財ニヨリテ作ラレタリコレヲ本邦最初ノ歯科医育所トスサレド開校ノ当時ニハ教員七名生徒九名ニ過ギズ前途ノ困難ハ想像ニ余リアリ紀齋ハ不屈ノ精神ヲ以テ事ニ当リ財政ニ教務ニ一トシテ倦ムコトナカリキソノ授業ハ主トシテ夜間ニ開カレタルヲ以テ終日ノ疲労ヲ医スル遑ナク直チニ登校シテ事ニ当リシナリソノ苦心察ス可シ
二十三年六月ソノ功天聴ニ達シ特志ヲ以テ従六位ニ叙セラレ後再ビ特旨ヲ以テ正六位ニ進メラルコレヨリ先キ十八年ニハ大日本私立衛生会学科審査委員トナリシガ二十三年ニ至リテ第三回内国勧業博覧会審査官トナリソノ職ヲ尽スコト周到綿密ニシテ銀製賞牌ヲ賜ヘリ後二十八年ニモ第四回内国勧業博覧会開設ノ際審査官トナリ功ニヨリテ銀製賞牌ヲ賜フコト初ノ如シ
カク学校ヲ経営シツヽ諸種ノ事実ニ携リテ頗ル多忙ナリシニ拘ハラズ前ニ述ベタル如キ主意ニテ多クノ著述ヲナセリ保歯新論ノ十四年ノナリシハ前ニ云ヘリソノ他歯牙解剖図歯科薬物提要ノ書モ同年ニ成リシガ二十二年ニハ歯牙養生法二十三年ニハ衛生保歯問答二十四年ニハ第五対脳神経解剖篇二十五年ニハ歯科手術論歯科汎論及実用歯科器械学二十六年ニハ歯科冶金学二十八年ニハ歯科薬物学ヲ編述セリ殊ニ注意ス可キハ二十四年九月ヨリ二十六年八月ニ至リテ完成セル高山歯科（“医”脱）学院講義録二十四巻ノ刊行ニシテ院外生トシテコノ書ニヨリテ歯科医学ヲ修メタルモノ二百五十余名ニ上リ其他ノ講習者ハソノ数幾何ナルヲ知ラズソノ学界ニ貢献シタルコトノ深キヲ察ス可シ二十六年六月内閣ヨリ臨時博覧会評議員トシテ米国ニ出張ヲ命ゼラレ同国シカゴ市ニ開カレタル万国博覧会ニ臨ミ且ツ同処ニ開催セラレシ万国歯科医学会ニ参列セシガ同学会ハ紀齋ヲ名誉会頭ニ推セリ会終ルヤ直チニ旧師ヴン、デンブルグヲ其ノ退隠地ニ訪ネ謝恩ノ盛意ヲ表シソレヨリ転ジテ米

国各地及ビ英仏独伊白等ノ各地ヲ巡リ斯学ノ景況ヲ視察シ同年十二月ヲ以テ帰朝セリ
二十八年七月第四回内国勧業博覧会ノ開カルヽヤ「高山歯科医（“学”脱）院ノ過去現在ノ状況ヲ編述出陳シ有功賞ヲ授ケラレ総裁小松宮殿下ヨリ賞詞ヲ賜ハリタリソノ詞ノ中ニ夙ニ率先シテ歯科医学教育ノ模範ヲ示シ規模最モ著実ニシテ浮華ニ流レズ旁ラ講義録ヲ発刊シテ遠近ノ修学者ニ便ヲ与ヘ克ク多数ノ歯科医ヲ養成シ云々」トアリ
カクテ二十九年九月ニハ勲六等ニ叙シ単光旭日章ヲ授ケラレタリ平時ニ於テシカモ本官ニアラズシテコレヲ賜フハ蓋シ異数ノ恩典ナリト云フ
三十三年八月八日仏国巴里ニ開カレシ万国歯科医学会ハ待ツニ会頭ヲ以テセリ
其後学院ノ事業モ漸ク盛大ニ赴キシガ開校以来十年ヲ経タルニ三十二年マデニ入学者五百四十三名其ノ中卒業者五十三名出身者ニシテ開業試験ニ及第シタル者百七十三名アリ是等歯科医ハ全国ニ散在シテ近世歯科医術ヲ拡布シタレバ紀齋ノ素志モソノ一部ハ貫徹セラレタリ因テ翌三十三年三月時ノ学院講師血脇守之助ニコノ歯科医育事業ノ全部ヲ譲リシガ血脇ハ校名ヲ東京歯科医学院ト改メテコレヲ継続シタリ今ノ東京歯科医学専門学校ハソノ十年経営ノ成果ナリ
カク学校ヲ経営シ多クノ著書ヲ出シ種々ノ事業ニ関係シナガラマタ開業試験委員トシテモ充分ソノ職責ヲ尽シタリ前ニモ云ヘルガ如ク当初受験者ノ少キコト実ニ驚ク可ク自ラ奮ツテ医育事業ニ向ヒシ程ナレバ成ル可ク多クノ及第者ヲ造リ歯科医ノ数ヲ増加スルヲ得策トシ毎回ノ試験ニモ常ニソノ方法ヲ執リシカバ比較的多数ノ開業医ヲ世ニ出スヲ得タリソノ委員タルコト十七年九月ヨリ三十三年四月マデ三十二回ニシテコノ間一回モ缺クルコトナカリキ
三十五年一月望ニヨリテ日本歯科医会会長トナリシガソノ十二月同会ヲ解散シ大日本歯科医会ノ創立セラヽニ及ビマタ会長トナリ三十九年十二月ニ至リテ辞任セリ東京歯科医会成ルヤソノ名誉会員ニ推サレ日本歯科医学会モソノ成立以来常ニ名誉会員ヲ以テコレヲ待テリ
マタ大日本教育会会員トナリ日本体育会ニ名誉賛助員トナリ日本尚兵義社ノ特別社員トナレリ其ノ他ニモ公共ノ事業ニ尽シタルコト甚ダ多クシテ一々コレヲ枚挙シガタシ
其ノ門ニ入リテ業ヲ修メ一家ヲナセルモノ左ノ如シ

伊藤　順二	瓜生源太郎	青山千代治	片山　敦彦	鈴木　寛藏
織田　信福	佐藤源太郎	富井孫四郎（原注：金子）		松添　廣太
青山松次郎	和田　忠	荒谷　靖	伊藤　民彌	相島由之助
伊藤吉二郎	中村　某	鈴木芳太郎〔以上松添氏ノ報告ニヨル〕		
曾我　敬忠	〔以下順序明カナラズ〕		桑原　乙吉	瓜生春太郎
榎本　積一	早野連之助	廣瀬　武郎	藤島太麻夫	血脇守之助
伊深　誠男	大村　一男	大野　量彌	秋山　直義	吉田　千里

資性諒厚ニシテ其ノ行動常ニ武士的精神ニ則リ殊ニ身ヲ持スル謹直ニシテ最モ報国ノ志ニ富ミ故小松宮殿下ノ曾テ忠信篤敬ノ四大字ヲ書シテ下賜セラレシヨリ常ニコノ語ヲ以テ心トセリマタ時間ヲ厳守スル風アリ開業当時ノ如キハ患者ノ非難多カリシニ拘ハラズ敢テ意トスルコトナク約束時間外ニハ治療セザルコトヲ実行セリ森有禮ノゴトキハ大イニコレヲ賛シ願ハクハコノ良風習ヲシテ本邦上下ニ徹底セシメタシト云ヘリトゾ故ニ行往坐臥頗ル規律的ニシテ且ツ衛生ヲ重ンズルガ故ニ身体常ニ健全曾テ著患ヲ知ラズ談論コトニ座談ニ長ジ人ヲシテ自ラ悦服メシメズンバ止マズ武術ハ種々ノ方面ニ渉リシガ殊ニ剣術ノ秘奥ニ達シ文事モ趣味甚ダ深ク和歌ニ造詣アリ茶道花道ヲモ好ミテ閑余コノ技ニ親メリマタ老後ノ楽トシテ芝白金台町ヨリ三光町ニ渉ル二千余坪ノ土地ニ理想的建築ヲナシ且ツ花卉草木ノ庭園ヲ営メリ而シテ人ニ語リテ曰ク「古語ニ智者ハ水ヲ愛シ仁者ハ楽ムト云ヘリ先ニハ伊皿子台ニ水ヲ見シガ今三光台ニ山ヲ望マントス庶幾クハ老人相応ノ楽カ」ト
室ハ貴族院議員金鵄間祇候森山茂ノ女（元治元年八月七日生）ニシテ明治十四年十一月ヲ以テ嫁ギ

一男一女ヲアリ女壽子ハ十七年四月ニ生レ朝鮮総督府外事局長小松緑ニ嫁シ男基ハ十九年八月ニ生レ高等農学校ヲ卒業セリ

小幡英之助開業当時ニ於ケル歯科医術

小幡英之助開業当時ノ歯科医術

治療方面

一、歯齦疾患

歯石ノ除去、沃度丁幾ノ塗布、含嗽剤ノ投与、含嗽剤ニハ塩剥、枯礬、単寧酸ヲ用フ

一、象牙質知覚過敏

多ク「クレオソート」ヲ使用セリ

一、歯髄充血

「クレオソート」ヲ貼用シ鎮痛スレバ護謨充填ヲ施シ数ケ月間其ノ経過ヲ見故障ナキニ至リテ永久充填ヲ行フ貼薬二三回ニシテ尚ホ鎮痛セザル時ハ「クレオソート」ヲ綿球ニ◎〔草冠／酉焦＝ひた・す〕シ之ニ亜砒酸末ヲ付シテ歯髄ヲ失活ス

一、直ニ失活剤〔○前項ニ見ユ〕ヲ貼布シ綿紙ニ「サンダラック、ヴニシュ」ヲ◎〔ひた〕シテ仮封ス四十八時間経過ノ後該薬品ヲ除去シテ髄腔ヲ開鑿シ「フーク」状神経針ヲ以テ歯髄ヲ抽出ス抽出完了シタル時「ゴム」充填ヲ行フ根管内ノ処置根管充填ニ就テハ記ス可キモノナシ

亜砒酸ノ薬効不充分ニシテ歯髄ノ一部ノミ失活セル時ハ「クレオソート」ヲ貼布シ隔日コレヲ反復シ全部失活スルマデ持続ス

一、歯髄炎

髄腔ヲ開鑿シ「クレオソート」ヲ貼布シ歯齦ニハ沃度丁幾ヲ塗布シ頰部ニ冷罨法ヲ命ジ毎日コレヲ反復ス

一、歯槽膿瘍

歯髄炎ニ対スル方法ト大差ナク瘻孔ノ作成ヲ促進セシムルニ止マル

一、歯槽膿漏

歯石ヲ除去シ沃度丁幾ヲ塗布シ含嗽剤ヲ投与ス数回試ミテ効ナキ時ハ抜去ス

一、磨耗症（消耗症）

粗悪ノ歯磨盛ニ使用セラレタル為メカ当時此ノ症ニ罹ルモノ多ク殊ニ前歯ヨリ小臼歯ニ到ル歯牙ノ本症ニ罹ラザルモノ稀ナリト云フモ過言ニアラズサレバ金「アマルガム」充填ノ如キハ最モ多ク一日十数歯ノ金充填ヲナシタルコト屢々ナリト云フ

一、抜歯

歯科衛生思想極メテ幼稚ナリシ上ニ従来歯科医術ガ単ニ入歯ト抜歯ニ止マリシコト先入主トナリ居リタレバ抜歯術ノ多ク行ハレシハ蓋シ免カレザル所ナル可シ

局所麻酔ハ行フコトナシ外人ガ自カラ医師ヲ同伴シテ全身麻酔〔酔〕ヲ要求セシガ如キハ例外ナリ通例一ノ薬品ヲ用ヰズ歯齦刀ニテ歯齦ヲ切開シテ直ニ鉗子ヲ適合シテ抜去セリ

一、抜歯後ノ出血

脱脂綿「ガーゼ」ノ圧定、単寧酸、一半格魯児鉄丁幾ノ貼付烙鉄等

一、口腔外科的疾患

外科医ニ託シテ手ヲ触レズ

備付薬品
一、亜砒酸
一、「クレオソート」
一、甘硝石精
一、沃度丁幾
一、双蘭菊丁幾
一、単寧酸
一、明礬
一、枯礬
一、一半格魯児鉄丁幾
一、格魯児伽◎〔人偏／留〕謨
一、「サンダラックヴニシュ〕
一、沃度仿謨
備付材料
一、「ガッタペルチャ」（淡紅色）
一、「アマルガム」（タウンセント）
一、「水銀」
一、「セメント」（コロール）
一、金箔
一、「ヒルストッピング」
技工方面
一、護謨床義歯
　局部床義歯ハ金鉤保持全部義歯ハ気室保持トス
一、金床義歯
備付材品
一、弓引「ゴム」
一、石膏（「ホワイト」会社製）
一、鑄砂（同上、褐色）
　暫時ニシテ使用シ蓋シ浜砂ヲ篩ヒテ応用セリ
一、錫
一、鉛
一、亜鉛
一、蜜蝋（「ホワイト」会社製、印象材品用）
一、「パラフィン、ワックス」
一、砂紙金剛砂ヲ布又ハ紙片ニ糊著シ細ク長ク巻尺ノ如クナシタルモノ

○治療台器械箪笥諸器械概要
一、歯科治療台　壱台
　上図ハ開業当初ヨリ最後マデ使用シ歿後東京歯科医学専門学校ニ寄贈セル治療台ノ写真　ナリ此ノ品尚ホ同校ニ保存ス（図略）
　全部槻材ヲ用ヒ蝶鉸ハ鉄ニテ作リ上部ニハ皮ヲ張ル幅ハ現時ノモノニ比スレバ甚ダ広ク後部肩部ハ角張レリ

此ノ治療台ノ製作ニ就キテ種々ノ説アレドモエリオット所持ノ治療台ニ模シ日本人ニ適スルヤウ高サヲ減ジ幅ヲ縮メ蝶鉸ノ具合ヲ改ムル等ノ改良案ヲ若林唯藏ニ授ケ製作セシメシモノナル可シ当時椅子ノ皮張職工ナク諸方ヲ探リ原岩吉ト云フモノヲ得コレニ命ジ数多ノ時日ヲ費シテ漸ク完成セシガ為メ開業ヲ遅延セリト云フ因ニ云フ若林ハ近藤医師ノ家ニ出入セシ大工ナリ原ハ横浜ニテ椅子ノ皮張リヲ学ビ其頃芝ニ居住セリ

一、器械箪笥（「キャビネット」）　壱台

槻材ニテ作リ上中下三段ニ分ル、上部ハ薬品中央ハ器械下部ハ雑品ヲ入ル之レモエリオット所持ノモノニ模シテ若林ニ作ラシメタリ

没後向江都知三氏コレヲ譲受ケ今尚使用ス

一、「インジン」　　壱台

米国製ニシテエリオットノ使用セルモノト同形ナリ同氏ノ手ニヨリ米国ニ注文シ輸入セシモノトス他ノ舶来品皆同ジ「ハンドピース」ハ六番形ナリ

一、「ポイント」　　数種数十本

「ポイント」立ハ上図ノ如ク、木製ニシテ「ガラス」ノ蓋ヲ成ス（図略）

一、歯鏡

円形ノモノト楕円形ノモノト二種アリ、柄ハ象牙ナリ

一、分離鑢

一、鑷子　　二個

普通用　一個　　図ノ如ク極メテ堅牢ニシテ弾力強シ（図略）

金充用　一個

一、探針

真直ニシテ尖端鋭利ナルモノ一種アリシノミ

一、「エキスカベーター」

形状二三種ニ過ギズ

此ノ種ハ多ク金充填窩洞形成ノ際添窩ヲ作製スルニ使用セリ

一、開頬器

金属製ニシテ左右二個アリ

一、吸収紙

吉野紙ヲ揉ミテ柔軟ニシ一枚ヲ縦ニ重ネ二十五六片ニ切リ五分位ノ大サトス湿気ノ拭掃薬品ノ貼付ニ使用ス又一枚乃至二枚ヲ重ネ四五片ニ切リテ棒状トナシ切端ヲ纏メテ仮防湿用ニ供ス

一、布片

金巾又ハ「リント」ヲ三寸角位ニ切リタルモノヲ多数備ヘ付ケ器械ヲ拭キ患者ノ口脣ヲ被フニ用フ

一、「チゼル」

二三種アリ齲窩々縁ノ破壊又ハ剔削ニ用フ

一、歯石除去器

上図下図（鍬形）ノ二種ニシテ大中小数本アリ（図略）

一、手用「ドリール」、「バアー」

手用「バアー」及ビ「ドリール」数種アリ「インジン」ノ使用ヲ好マザル患者ニ使用ス指環ヲ具備セズ

一、煉性充填器

上図ノ如キモノ数本アリ（図略）

「アマルガム」ノ煉和ハ掌上ニ粉末ヲ載セ適宜ノ水銀ヲ滴落シ拇指ニテ混和シタル後乳鉢ニ入レ酒

精ニテ洗滌シ鹿皮ヲ以テ水銀ヲ圧搾排出スルモノトス
一、水銀容器
　象牙製
一、神経針
　鉤状ノモノ一種アリシノミ
一、抜歯鉗子
上顎左右大臼歯用各一個
同歯根鉗子一個
下顎大臼歯用一個
同小臼歯用一個
同歯根鉗子一個
同臼歯用牛角状鉗子一個
合計七個ナリ「エレベーター」ハ一モ存セズ
此ノ少数鉗子ヲ以テ各歯ヲ抜去シ一度手ヲ触レタルモノハ必ズ其ノ目的ヲ達セザレバ止マザリシト云フ
門下ノ人々今尚其ノ抜歯術ノ巧妙ナリシコトヲ称讃セリ、常ニ門生ヲ戒メテ曰ク一度鉗子ヲ歯牙ニ適合シタル上ハ如何ナルコトアリトモ必ズ其ノ手術ヲ完了セザレバ止ムコトナカレト
一、切開刀（「ランセット」）　二種
一、金箔用剪子
一、金箔用篦子
一、金箔処理台
木板上ニ鹿皮ヲ張リ内部ニ綿球ノ柔軟物ヲ入ル、金箔ヲ切リ又ハ畳ム等ノ用ニ供ス
一、金箔
一匁ヲ十二三枚ニ打ツモノト六七枚ニ打ツモノト二種アリ六七枚ニ打ツモノヽ中ニハ極メテ厚キモノ一枚ヲ混ゼリコレ金充填ノ最後ニ多ク使用セシモノナリ
關川重吾氏在塾ノ際ハ悉ク米国製ヲ使用セシガ当時輸入困難ニシテ注文ヨリ六ケ月経過セザレバ入手セザル不便アリシ上、カクノ如ク材料マデモ舶載ニ仰グハ斯道従事スルモノヽ不便頗ル大ニシテ且ツ其ノ発達ヲ妨グルコト尠カラザル可シトノ考ヨリ日本橋本石町ノ箔新ト称スル金箔屋ニ命ジ歯科用金箔ノ製作ヲ依託セリ然ルニカヽル純金箔ハ未ダ嘗テ製作セシコトナカリシヲ以テ当初ハ屢々失敗ヲ重ネタルガ幾多ノ苦辛ヲ経テ漸ク使用シ得ベキ製品ヲ見ルニ至レリ後ニハ日本製ノミヲ使用セリト云フ
一匁十二三枚ニ打延シタルモノ一枚（四吋平方）ヲ四片ニ切リ一片ヲ縦ニ四ツニ合セ方形又ハ長方形ニ切リ一片ヅヽ焼還シ充填窩洞ニ送入ス窩洞大ナル時ハ同時ニ三四片ヲ重ネテ送入スルコトモアリキ
一、「ラバダム」穿孔器
上図ノ如キ棒状ノ穿孔器一個アリシノミ、故ニ大臼歯ノ如キハ同時ニ二三孔ヲ穿チテ孔ヲ大ナラシムルカ又ハ鉄棒ヲ赤灼シテ穿孔セリ（図略）
一、「ラバダム」保持器
上図ノ如シ（図略）
一、「クランプ」及同上鉗子
「クランプ」ハ図ノ如キモノ数種アリ（図略）
一、結紮絲

絹絲ヲ練リタルマヽノモノ〔○「ネリグリ」ト云フ〕ヲ数十本合セ、ヨリテカケズシテ適当ノ太サトナス、コレハ絲商ニ命ジテ製セシム、コレニ蜜蝋ヲ塗布シ使用スルモノトス
一、酒精燈
口金ヲ除ク外全部硝子製ナリ上図ノ如シ（図略）
一、打槌
周囲及ビ柄ハ木ニテ製シ中ニ鉛ヲ入レタルモノナリ
最初ハ柄ハ小槌形ノモノヲ使用シタレドモ之レハ槌打ノ際最モ練達ゼザレバ往々充填器ノ尖端ヲ動揺セシムル憂アリシテ以テ桐村氏試ミニ乙図ノ如キ太鼓様ノモノヲ作リシニ尖端ノ動揺少ク且ツ初学者ニモ使用シ易カリシカバ此ノ形ノミヲ使用セリ（図略）
一、金充填器（「プラガー」）
バーネー氏十三本揃ヒノモノ上図ノ如シ（図略）
一、乾燥器
一、錘
球状ノモノ一二種アリ
一、金鑢及「ストリップス」
金充填面ヲ滑沢ニスルタメニ用フル鑢ハ二三種ニ過ギズ隣接面ヲ磨クニハ金剛砂ノ「ストリップス」紙又ハ布ノ幅狭ク長キモノ細粗数種ヲ使用ス
「ストリップス」ハ巻尺ノ如キ形ヲナシ甚ダ長キモノナリ
金箔充填術式
金箔ハ「ピンセット」ニテ把持シ、酒精燈上ニ翳シテ焼還ス自カラ焼還スルコトモアリ、助手ヲシテ焼還セシムルコトアレド、則ガテ之レヲ窩洞ニ送入ス保持点ノ部ハ焼還セザルモノヲ填入セリ、槌打ハ必ズ助手ノ力ヲ借リタリ、当時ハ鑲嵌金冠等ノ諸術未ダ具ハラズ歯牙硬組織ノ欠損ヲ補綴スルニハ金充填ノ法ニ依ラザル可カラザルヲ以テ大小臼歯ノ如キ大窩洞ノ補綴充填ニハ三四時間ヲ消費セシコト稀ナラズ然ルニ唾液排除器ナク「タオル」ヲ頸部ニ巻キ付ケテ唾液ノ流失ヲ防グノミニテ其手術ヲ完了セザル可カラザリキ術者ノ辛苦察スルニ余リアリ、金充填ノ窩洞形成充填方法ニ就キテハ慎重ノ注意ヲ払ヒ、成ル可ク生理的状態ヲ損セザルヤウニ注意シ金色ノ外観ニ触ルヽコトヲ避クルガタメニハ多大ノ苦辛ヲナセリ、前歯隣接面ノ窩洞ノ如キハ其ノ離開ノ為メニ三四日モ費スコトアリ、現今ノ如ク分離器アルニアラザレバ柳楊子ヲ歯間ニ挿入シ湿気ニヨリテ木質ノ膨張ヲ来タシ漸時離開スルヲ待ツニ過ギズ故ニ毎日柳楊子ヲ交換シテ三四日ヲ経ズバ器械ノ挿入充分ナルニ至ラズ、器械ヲ挿入シテ琺瑯質ヲ損傷セザルニ至リテ初メテ窩洞ノ形成ニ着手ス、又前歯舌面ノ金充填ヲ施スニ表面ヨリ施術ノ痕跡ヲ認メザランコトヲ期セリ、
当時一般ニ歯科医術ノ何タルカヲ解セズ往々歯科ノ治療ヲ以テ装飾的技術ナリトナセリ是ノ時ニ当リ流俗ニ阿セズ毅然トシテ歯科医術ノ本領ヲ発揚シ後進ニ好模範ヲ示シタルハ蓋シ其ノ功大ト云フ可シ
○技工用具概要
一、蒸和櫨（ヘーズ氏釜」）
外部ハ鉄製ニシテ内部ニ銅板ヲ張リ三個ノ螺旋ヲ有スルモノ「フラスク」二個ヲ入ル
一、「フラスク」（ヘーズ氏「フラスク」）
鉄製ニシテ上下四個ニ分離スルモノ（「スター」形）現ニ東京歯科医専ノ生徒用ニ供セルモノト同ジ
一、石膏
「ホワイト」会社製品、一罐二十五瓦入

一、印象材品
「ホワイト」会社製造角形（又ハ円形）ヲナセル蜜蝋、湿熱又ハ乾熱ニテ柔軟ニス
一、「パラフィン、ワックス」
「ホワイト」会社仮床用（現今ノモノト大差ナシ）
一、「スパチラ」
一、蝋用箆子
△「ゴム」蒸和法
通法ノ如ク漸次ニ三百二十度ニ上ゲ一時間其ノ熱度ヲ保存シ後チ其ノ冷却ヲ待ツ
一、鑢
金銀床鑢　　二三本
「ゴム」床用鑢　九、半円形
一、「スクリッパー」
一、砂型用「フラスコ」
上下トモ銅製ニテ直径現今ノモノヨリモ大ナリ
一、気室ノ原型
鉛板又ハ錫板ヲ適宜ノ厚サニ延バシ、自カラ製作ス
一、「サンドペーパー」
金剛砂ヲ付シタル布、紙ニテ細粗五六種アリ
一、「レーズ」
小形ノモノハ図ノ如シ（図略）
付属品ハ「コロンダム」輪状ノモノニシテ歯ヲ削ルニハ此ノ種ノミヲ用フ
棒状ノモノ、布片ヲ巻キ磨粉ヲ付ケ床面ヲ磨ルニ供ス
一、吹火管
図ノ如ク尖端ニ近ク球状ノモノアルノミニテ口腔ニ当ル部分ニハ何等ノ装置ナシ（図略）
一、鑞着用鑢
上図甲ハ蓋ヲ被ヒタルモノ
乙ハ蓋
丙ハ炭火ヲ入レ、其上ニ鑞着物体ヲ載ス、下部ハ空気流通口、長キ柄ハ手ニテ把持ス（図略）
一、鑞着用酒精燈
全部金属製ナリ
一、金槌
大中小ノ三形アリ
一、木槌
大中小ノ三形アリ角槌ナシ、金属床ノ概形ヲ作ルハ多ク金又ハ木槌ヲ使用ス
一、鋳形
陰陽両型ヲ鋳造スル鋳砂ハ最初舶来ノ褐色砂ヲ使用シタレレドモ忽チ使用シ尽シタルヲ以テ浜砂ト称スル品川湾ヨリ採取セル砂ヲ購入シ自ラコレヲ篩ヒ、一定ノ形状ノモノヲ備ヘ付ケ必要ニ応ジテ使用セリ
一、彎脚測径器（「カリッパー」）
金属ノ厚度ヲ測定スルニ用フ
一、石膏煉和器
現今ノ如ク「ゴム」碗ナキヲ以テ木碗、陶碗ヲ以テ代用セリ

一、石膏箆子
洋食用「ナイフ」ヲ用フ
一、「フラスク」用鍋
「フラスク」ヲ熱シ、「ゴム」ヲ柔軟ニシ、仮床用ノ蝋ヲ溶解スル等ニ使用ス全部銅ニテ製ス
一、帯鉤用鉗子
角形丸形アリ
一、金属板穿孔器
一、「ニッパー」
一、金属用剪子
一、金属鎔融器
一、金床及鉤ノ金位
金床及金鉤ノ金位ハ多ク十八「カラット」ニシテ銀銅ヲ配合セリ
最初ハ金貨ヲ使用シ、錺屋ヲシテ適当ノ厚サト形トニ打延バサシメテ使用ス
金鉤ハ幅二分厚サ二十五六番ニ長ク延バシ、用ニ応ジテ適宜ニ切断シ形状ヲ変ジ鑞着スル等ハ自ラコレヲナセリ
一、金鑞
最初ハ米国製ヲ使用セシガ後ニハ左ノ配合ノモノヲ使用ス
　一、純金　　五分
　一、純銀　　三分
　一、真鍮　　二分
一、咬合器

技工方面ニ於ケル一二ノ術式
　陰陽両型ノ調製
前記ノ鋳砂ヲ水ニ和シ、掌中ニ握リテ其ノ度合ヲ試ム、大概掌中ニ堅ク握リテ破砕シ其ノ破面正確ナルヲ度トスサレド其ノ度合ハ容易ニ会シ難ク屢々失敗ヲ重ネテ漸ク熟達スルモノナリ故ニ現今「カルカー」ノ如キ便利ナル鋳型材ノ使用ニ慣レタルモノヽ到底想像ダモ及バザルトコロナリ、ハウ氏ノ「フラスク」サヘ案出セラレザリシ時代ナレバ少シク凹陥ヲ有スル石膏模型ニテ陽型ノ鋳型ヲ調製セントスル場合ニハ完全ナルモノヲ得ルコト容易ナラズ、鋳砂ノ結合ヲ強メン為メ水分ヲ増加スル時ハ模型ニ鋳砂ヲ付着シ鋳型ノ一部ヲ破損ス可ク、マタ水分ヲ減ズル時ハ鋳砂ノ結合ガ薄弱ナルガ故ニ一部ノ崩壊ヲ免レズ其ノ至難ナルコト言語ニ絶セリ、或ル門弟ノ如キハ一鋳型ノ調製ニ百四回マデ失敗ニ終リ第百五回ニ至リテ初メテ目的ヲ達シタルコトアリシト云フ
　鑞着術
瓦斯モナク足用吹火管モナク、前記鑞着用鑢一、同酒精燈一、口用吹火管一アリシノミナレバ火熱ノ動力ハ木炭ト酒精トノミ、カヽル単純ナル器械ト微弱ナル火力ニヨリテ数個乃至十数個ノ陶歯金鉤ヲ金床ニ鑞着セザル可カラズ、斯クノ如キハ今日ノ歯科医ノ能ク完成シ得ルトコロニアラズ、最初灼熱セル炭火ヲ爐中ニ入ルヽモ時ヲ経レバ火力ハ滅却シテ鑞着物ハ冷却ノ憂アリ、火力極マレバ爐ヲ支フル左手ハ其ノ熱ニ堪ヘザルナリ、因ツテ布片ヲ水ニ蘸シ左手ニ巻キテ予防トシ、右手ハ吹火管ヲ支ヘ不断ノ呼気ヲ以テ酒精燈上ノ火力ヲ鑞着面ニ集中セシメザル可カラズ、呼気ニ間断アレバ床面冷却シ一気ニ火力ヲ集中スレバ鑞ハ「ヲシャカ」トナリ又ハ塊状トナリ再ビ鎔融セザレバ用ヲナシ難シ、故ニ練達ノモノニ非ザレバ到底コレヲ行フ能ハズ先輩ノ苦心想像ニ余レリ

イーストレーキ伝

ウィリアム、クラーク、イーストレーキハ千八百三十四年文政七年英国ニ生ル、家世々華胄ニシテ男爵ノ位ヲ有セリ
少壮ノ頃、英国皇太子ヲ主催者トセル秘密結社ニ入リ、印度地方ニ在住セシガ、後米国ニ移住シ、米人エヴァナン、ローズヲ娶リ、遂ニ米国ニ帰化シタリ
後歯科医学及ビ動物学ヲ研究シタルガ、動物学ニ於テハ殊ニ貝類ノ研究ニ多大ノ趣味ヲ感ジ、東洋産貝類採取ヲ目的トシテ、千八百六十年（万延元年）我国ニ渡来スルニ至レリ
其ノ横浜ニ上陸スルヤ、頗ル我国ノ風光ヲ賞シ、永住ヲ決シ、我国ヲ中心トシテ印度、支那、暹羅等東洋ニ貝類ヲ採集シ、傍ラ歯科ノ業ヲ営メリ、カクノ如クシテ在留実ニ十年ニ及ベリ、カノ長谷川保ガ其ノ門ニ入レルモ此ノ間ニ在リ、カクテ明治二年十二月ニ至リ、我国ヲ去リ、香港上海等ニ在リテ貝類ノ採集ニ従事シ、傍ラ歯科ノ業ヲ営ムコトモトノ如クナリシガ、幾モナクシテ米国ニ帰リオハヨー州ノ歯科大学ニ入リ、千八百七十三年（明治六年）ヲ以テ、「デー、デー、エス」ノ学位ヲ受ケ、尋デ独逸国ニ渡航シ、歯科ノ業ヲ行フコト七年、千八百八十年（明治十三年）ニ至リ、再ビ我国ニ渡来セリ、其ノ我国ヲ去リテヨリコヽニ至ルマデ実ニ十年ヲ経タリ
　イーストレーキ我国ヲ去リ、香港上海ヲ経テ独逸国ニ赴クマデ、長谷川保兵衛ノ随従シタルハ同伝ニ見ユ
「デンタルビー」ニイーストレーキガ千八百七十三年（明治六年）ニオハヨー大学ニ入リ「デー、デー、エス」ノ学位ヲ受ケタリト見ユルドモ長谷川ノ伝ト合ハズ
明治十三年再来ノ後ハ、横浜百六十番館ニ開業シテ、佐藤重ヲ助手トシタリシガ、尋デ東京築地ニ移レリ
カクテ治ヲ施スコト七年、明治二十年二月病ヲ得テ死セリ、年六十三、青山墓地ニ葬ル
其ノ我国ニ在留スルモノ前後十七年ニ及ビ、歯科学ノ進歩ノタメニ貢献スルトコロ甚ダ多シ、頗ル多方面ニ趣味ヲ有シ、音楽殊ニ横笛ノ如キハ既ニ堂ニ上レリ、貝類ノ研究ニ於テモ得ルトコロアリ、其ノ採集セル標本ハ、今ナホ米国ノ博物館ニアリト云フ
室ハ前記エヴァナン、ローズ、二男アリ、長ハフレデリキ、ウァーリントン、独逸国ニ学ビテ、ドクトルフィロゾィエートナリ、我国ニ帰来シテ、専ラ英語ヲ教授ス、世ニ所謂博言博士イーストレーキコレナリ、次ハ某、医ヲ学ビ業ヲ我国ニ開キシガ、幾モナクシテ米国ニ帰レリ

ポルキンス伝

ハラック、マンソン、ポルキンスハ米国ペンシルバニア州ノ人ニシテ、〔生年月不詳〕夙ニボストンノ歯科大学ヲ卒業シ、明治八年末横浜ニ来リ、エリオットノ後ヲ譲リ受ケ、山ノ百七十八番館ニ居住シ大ニ治ヲ遠近ニ施セリ、当時三十七八歳ナリシト云フ
医業ノ初メニハ、エリオットニ随従シタリ松岡萬藏（或ハ萬吉トモ云フ）ト云フ技工ニ長ゼルモノヲ助手トセシガ、後其ノ門ニ入ルモノ漸ク多ク、一時小幡英之助ノ門人タリシ關川重吾ヲ初メトシ、西村輔三、渡邊晉三、堀内清顯、ブラウン等アリ、後ニ西村ノ門ニ入リシ山田利充モ、初メニハ此ノ人ニ弟子タリキ、マタ黒田虎太郎モ、其ノ門ニ入リシコトアリ、林譲治ハ其ノ従者タリシガ故ニ歯科ノ業ヲ受ケタリ
最モ金充填及抜歯ノ術ニ長ジ、充填ハ海綿状ノ法ニシテ、極メテ迅速ニ成功シ、抜歯ノ困難ナルモノニハ「コロヽフォルム」麻酔ヲ施セリト云フ
十年頃京橋竹川町十九番地ニ出張所ヲ設ケシガ、是レ西村輔三ガ其ノ師ノ監督ノ下ニ業ヲ開クトコロト云フ

カクテ十一年ニ至リ、ポルキンスハ我国ヲ去リテ上海ニ向ヘリト云フ、其ノ終ルトコロヲ詳ニセズ此ノ人ハ至ツテ人格卑キ人ニシテ品行モヨロシカラズ開業ノ設備ナドモ極メテ不完全ニシテ治術ニ要スル諸器械サヘ整頓セザリシト云フマタ明治十一年ニ本邦ヲ去リシ時ノゴトキハ逃グルヤウニ姿ヲ眩マシタリコレハ借金ノタメナリト云フ

松添寶一伝

松添寶一ハ、安政二年二月ヲ以テ肥前大村ニ生ル、初名ハ榮、父ヲ寶泉ト云フ、祖寶水ヨリ世々口科ノ医術ヲ以テ大村藩ニ仕ヘタリ

明治二年父寶泉致仕セシカバ、寶一ハ家督ヲ襲ギ、口科ヲ以テ仕ヘタリシガ、版籍奉還トナルニ及ビ、佐世保市松浦町ニ開業シ、明治九年六月長崎県ニ於テ口中科医術開業免状ヲ得、爾来永ク前記ノ処ニ開業シタリ

其家口中医薬法書類四冊、竝ニ治療器械数種ヲ保存ス、皆藩医時代ノ秘巻珍物ニシテ、往時ノ状態ヲ察スルニ便ナリ

寶一ノ叔父ヲ寶道ト云フ、夙ニ長崎市桜町ニ開業セシガ、明治九年三月二十九日ヲ以テ歿セシカバ、寶一ノ弟岩記其後ヲ襲ギシニ、コレマタ十二年七月十一日ヲ以テ歿セリ、今ノ松添廣太ハ此ノ後ヲ受ケテ今日ニ至レルモノトス

佐藤重伝

佐藤重ハ安政四年五月二十日ヲ以テ、相模中郡伊勢原ニ生ル、父ハ佐藤善右衛門ト云ヒ、世々里正タリ、重ハ其ノ次男ナリト云フ

明治十年ノ頃、歯科修業ノタメ東京ニ出ヅ、是レ親族ノ中ニ東京ニ出デヽ歯科ヲ高橋富士松ニ学ベルモノアリニ由リテナリ

カクテ出京ノ後マヅ伊澤道盛ノ門ニ在ルコト一年許ナリシガ、故アリテ伊澤ヲ辞シ、伊澤ノ紹介ニテ長谷川保ノ門ニ入ル

明治十三年ニ至リイーストレーキノ再ビ我国ニ渡来シテ業ヲ横浜ニ開クヤ、長谷川保ハ自ラ行キテ其業ヲ助クル能ハザリシカバ即チ派シテイーストレーキヲ助ケシム

明治十七年二三月頃、長谷川ノ塾ヲ去リテ、日本橋小網町ニ開業セシガ、一年余ニシテ全焼シ尋デ日本橋浜町ニ移リシガ此処ニテハ半歳ノ間ニ二度祝融氏ニ見舞レタリ

後京橋弥左衛門町ニ移リ、業ヲ営ムコト三十年最モ金充填ニ長ジ、専門ヲ以テ自ラ任ジ、義歯ノ如キハ多ク渡邊良齋ニ任セタリ

其ノ門ニ入リ業ヲ成セルモノ甚ダ多シ

○角　茂雄　○河村甲子次　石井　良治　石橋孫次郎　○石橋甲子郎
渡邊貞次郎　熊耳　繼二　○後藤　武輔　吉浦　崎雄　馬部　欽作
小島　勇次

大正二年六月二十三日、大森ニ歿ス年五十六、芝青松寺ニ葬ル、戒名ヲ清廉院心華慶重居士ト云フ室ハ加藤氏ノ女、八重子、子ナシ、明治二十二年佐竹家中近藤禄二ノ子運雄ヲ養ヒテ嗣トナス、箕裘ノ業ヲ継ギテ名アリ

最モ酒ヲ嗜ミ、常磐津、義太夫等ニ趣味アリ、万般ノ遊戯行トシテ可ナラザルハナシ

松下良貞伝

松下良貞ハ天保二年八月ヲ以テ武蔵深谷ニ生ル、モト某氏、弘化元年思フトコロアリテ江戸ニ出テ、松下良貞ノ門ニ入リ、入歯歯抜ノ術ヲ学ブ、後師ニ養ハレテ其ノ姓名ヲ襲グ

安政ノ頃、本郷一丁目ニ開業シ義歯義眼ノ術ヲ施シ、別ニ紙鳶ノ製造ヲ業トセシガ、後湯島六丁目ニ移レリ

業ヲ行フコト三十余年、明治十七年ヲ以テ死去セリ、小石川白妙伝寺ニ葬ル、法号ヲ是性院良貞日法居士ト云フ

其ノ門ニ入リ業ヲ成セルモノ左ノ如シ

沼田　一郎	柴田　治作	宮澤勝三郎	渡邊清太郎	高橋　市郎
田中徳三郎	近藤關太郎	寺島　得一	小野　信行	山本　長吉
佐治　祐二	山口　萬吉	宮澤林太郎		

室ハ宮澤吉兵衞ノ女つる、二女ヲ挙グ、長女ハ寺島得一ノ室トナリ、次女ハ山本長吉ノ室トナル

杉原玉齋伝

讃岐高松ノ藩医養甫ノ次子喜重朗天保年間京都ニ出デヽ口中科ヲ業トセリ

喜重朗ノ子外記嘉永元年江戸南伝馬町ニ居住シ、玉齋ト号シテ口中科ヲ開業シ家伝薬真珠口養散麗養湯ヲ用ヒ口腔病歯痛ヲ治シ又牙石木等ニテ義歯ヲ造リ補綴手術ヲナス

嗣子清次郎亦玉齋ヲ襲名シテ明治年間ニ至ル

清次郎ノ子清太郎ハ明治二十五年ヨリ神翁金齋ノ門ニ学ビ明治二十九年四月歯科医術開業試験ニ合格シテ業大ヒニ行フ

明治三十五年五月神翁金齋吉田仙正等経営ノ大日本歯科講義会ノ事務所及教室ヲ清太郎ノ医院ニ移シ清太郎ハ其常任幹事トシテ尽瘁スルコト数年ナリキ

大日本歯科講義会ハ共立歯科医学校ト改称シテ神田雉子町ニ移転セリ日本歯科医学専門学校ノ前身ナリ

ギューリック伝

ギューリックハハワイノ人、父ハ米国ノ宣教師ニシテ、同地ニ住シギューリックヲ生ム、出生ノ年月ハ知ルニ由ナシ

夙ニ米国ニ渡リテ歯科学ヲ修メシガ、其ノ同胞本邦ニ在ルヲ以テ、遂ニ渡米ヲ志シ、明治十三年ヲ以テ神戸ニ至リ、米国聖書会社内ニ寓シ、佐治職ヲ助手トシテ歯科ノ業ヲ開キタルガ、其ノ業アマリ振ハザリシト云フ

明治十五六年頃、歯科ノ業ヲ廃シ、大阪ニ移リテ英語ノ教師トナリシガ、十八年ニ至リ帰国セリ

松井源水伝

第十四世松井源水ハ文政四年江戸ニ生ル、家世々曲独楽ト歯薬ヲ以テ業トセリ、幼ヨリ父ニ従ヒ家業ヲ修メ、天保ヨリ弘化嘉永ノ間、其ノ独楽ノ妙技ト歯抜歯固メ一切ノ妙薬トハ世上ニ有名ナリキ元治慶応ノ際、曲独楽足芸軽業ヲ引キ連レ、欧米各国ヲ巡業セシコトアリ、曲独楽ハ源水自ラ門人ト共ニ之ヲ演ジ、足芸ハ實川傳吉軽業ハ浪ノ進ニ演ゼシメ、英吉利、伊太利、米国其他ノ地ニ於テ

イヅレモ成功シタリ、英国ニ於テハ我ガ駐在官（“寺”脱ヵ）島宗則大ニ便宜ヲ与ヘラレタリト云フ
斯ノ如キコト前後七年ニシテ、伊豆ノ下田ニ帰リシガ、蓋シ芸人トシテ海外ニ渡航セシモノヽ始ナルベシ、時ニ江戸モ東京ト改マリ、諸事一変セシカバ、浅草ノ名代新門辰五郎ニ地受ケヲ頼ミ、田原町三丁目ニ営業ヲ始メ、浅草観世音付近ニ出テ曲独楽ヲ以テ人ヲ集メ、歯ヲ抜キ薬ヲ売リテ業トナセリ
明治三年十一月四日歿ス、年五十、法諡ヲ貫練院至妙航洋居士ト云フ、二子アリ、長ハ父ニ先チテ夭ス、之レヲ十五世源水ト云フ
第十六世源水ハ万延元年四月十四日ヲ以テ江戸ニ生ル、十四世源水ノ第二子ナリ、幼ヨリ家業ヲ修メ、明治三年父歿スルニ及ビテ業ヲ継ギ、曲独楽ト売薬トヲ以テ業トセリ
始メ長野県下ニ於テ、口中治療及接骨科ノ鑑札ヲ受ケタレドモ、右ノ鑑札ハ東京府下ニ於テ効力ナシトセラレタルヲ以テ、歯抜入歯ノ業ハ一時ニシテ止メタリ
明治三十四年四月十四日歿ス、松弘院常岳源勇居士ト云フ、配ヲまさト云フ、男子ナシ即チ梅井源之助ノ子新三郎ヲ養ヒテ嗣トス

長井兵助伝

第四世長井兵助ハ江戸浅草蔵前ニ生ル〔年月不詳〕第二世兵助ノ次子ナリ、長井氏ハモト武州岩槻藩ノ典医ニシテ其家系長井齋藤別当實盛ニ出ヅト伝フ、安永天明ノ頃初代兵助故アリテ江戸ニ出デ浅草蔵前ニ於テ入歯歯抜口中治療及居合抜ヲ業トシ芝ノ關安本郷ノ兼康下谷ノ井口ト共ニ江戸ノ四帳ト称セラレタリ、爾来其ノ業ヲ世襲セシガ第三世兵助文久三年九月二十五日ヲ以テ歿シ、子ナカリシカバ、第四世兵助ハ弟ヲ以テ兄ノ後ヲ承ケタリ
斯クテ業ヲ行フコト十三年ニシテ明治七年七月十三日ヲ以テ歿セリ法諱ヲ法露明照居士ト云フ〔享年不詳〕
第五世兵助ハ文政十一年ヲ以テ江戸ニ生ル、モト某氏少ニシテ第二世兵助ニ師事シテ業ヲ修メシガ後養ハレテ第二世兵助ノ次女ニ配ス尋デ日本橋堀江町ニ分家シ入歯歯抜口中治療居合抜等ノ業ヲ営ミシガ明治七年第四世兵助歿スルニ及ビ入リテ蔵前ノ宗家ヲ継ゲリ斯クテ業ヲ行フコト十一年ニシテ明治十八年九月十六日ヲ以テ歿セリ法名ヲ顯照院心入徳光居士ト云フ
長子覺太郎（安政三年生）箕裘ノ業ヲ継ギテ第六世兵助トナリシガ明治三十一年八月二十四日ヲ以テ歿セリ

アレキサンドル伝

アレキサンドルハ仏国ノ人〔出生ノ年月不詳〕明治六年頃東京ニ来リ京橋明石町一丁目一番地ニ寄留シ歯科ノ業ヲ営ミシガ頗ル施術ニ長ゼル評判アリキ或ハ謂フ此ノ人ハ素ヨリ歯科ノ出身ニアラズ砲術ノ教師トシテ夙ニ来朝セルモノナルガ時勢ノ変ニヨリ砲術ヲ学ブモノ無クナリタル為メ技工ニ巧ミナルニ任セテ歯科ノ業ヲ開キタルナリトモ云フ此ノ人ノ治療所ノ看板ニハ上下顎ノ開閉スル人形アリ義歯ノ見本竝列アリ時人之ヲ「パクパクノ看板」ト云ヘル由後チ宮澤林太郎ノ門頭ニ掲ゲタルコトアリ
明治七年一月長州下関ノ口中医免養九一感ズル所アリ東京ニ出デアレキサンドルノ門ニ入リ洋式歯科医術ヲ学ブコト一年翌八年一月ヲ以テ退学セリ
同ジ頃従来家池野谷貞司モ其ノ門ニ入リテ研究セリ

明治八年一月ニ至リ従来家竹澤國三郎駅逓局官員大川氏ノ紹介ニヨリテアレキサンドルノ許ニ通学セシガ業余ノ修学トシテ思フニ任セザルコト多カリシカバ後意ヲ決シ当局ノ許可ヲ得八年七月一日ヨリ九年六月末日マデ一年間ノ契約ニテアレキサンドルヲ自己独占ノ教師ニ聘セリ当時外国人ヲ雇ヒ入ルルニハ府知事ノ許可ヲ要セシガ其ノ煩瑣ナルコト驚ク外ナク願ヒ出デヽヨリ許可セラルヽマデ二十三回モ府庁ヘ出頭セザルベカラザリシト云フ其間休日ヲ除キテ毎日四時間ヅヽ〔午前十時ヨリ十二時マデ及ビ午後二時ヨリ四時マデ〕其ノ伝習ヲ受ケタルガ期ニ至リ業大ニ進ミタルヲ以テアレキサンドルハ仏文ノ歯科修業証書ヲ授ケ歯科ノ医タルニ堪フルコトヲ証セリ

此頃伊澤道盛渡邊良齋モアレキサンドルニ学バントセシガアレキサンドルハ竹澤ト約束アルヲ以テ果サズ伊澤ハ海津昌哲ニ就キテ英語ヲ学ビ、松川修ニ米国歯科書ヲ訳セシメタルガ九年ニ至リテ小幡ノ門ニ入レリ渡邊ハ已ヲ得ズ長谷川ノ許ニ見学セリ

其後アレキサンドルハ某地方ニ仏語教師トシテ赴任セリト云フ

渡邊良齋初期ノ術式

一、歯齦炎又ハ歯槽膿漏ニ対シテハ或ル色素（赤）ヲ用ヒテ着色セル枯礬末ヲ歯齦部ニ塗擦シタリ、其他緑礬丹礬ノ粉末ヲモ使用セリ

二、歯痛ニハ阿芙蓉越幾斯ヲ綿球ニ浸シテ齲歯窩ニ貼布シ、或ハ烙鉄ヲ以テ歯髄ヲ焼灼シタリ、時ニハ下剤ヲ使用シタルコトアリ。充填剤ハ使用セズ。

三、抜歯　乳歯ヲ抜去スルニハ「テグス」（?）製ノ釣絲ヲ馬ノ歯「コボレ」草ニテ煮沸シタルモノニテ歯頸部ヲ結紮シ、二三日間放置シテ其刺戟ニヨリ歯牙ノ弛緩ヲ来サシメテ後抜去シタリ、時ニハ「ヤットコ」ノ嘴中央ニ乳歯冠ニ適合スル円形ノ孔ヲ作リ之ヲ以テ把持シテ抜去タリ、永久歯ハ単ニ著シク弛緩セルモノヽミヲ抜去セリ、其方法ハ前記ノ釣絲ニテ歯頸部ヲ緊縛シテ強ク牽引シタリ、止血剤トシテハ時ニ着色枯礬ヲ応用セリ

四、義歯ノ製法　印象材料トシテハ主トシテ蜜蝋ヲ使用セリ、蜜蝋ハ加熱軟化シタル際手指ニ粘着セズ多少甘味アル臭気ヲ有スルモノヲ可トス、膏薬用ノモノハ不可ナリ、使用ニ際シテハ之ヲ鉄鍋ニ入レテ煮沸シ、朱及墨ニ混ジテ着色シ適度ニ冷却セシメタル後手ニテ煉和ス、頻回使用シタルモノハ其質硬固トナリ益々良好ナル印象材トナル

印象採得ニ当リテハ先ヅ適度ニ加熱軟化セシメタル蜜蝋塊ヲ以テ仮印象ヲ採リ之ヲ「トレー」トナシ、更ニ其印象面ニ軟化セシメタル蜜蝋ヲ付加シテ再ビ精確ナル採得ヲナス

咬合モ亦蜜蝋ヲ以テ採得セリ

模型ヲ作ルニハ陰型ヲ蜜蝋ニ付加シテ厚クナシ次デ蜜蝋ノ少量宛印象面ヲ填塞付加シテ作ル。歯牙若シ左右ヨリ傾斜セルトキハV字形間隙ノ左右ヲ別々ニ蜜蝋ニテ印象シ、之ニ墨ヲ付シテ模型ヲ削去修成シタリ

咬合機トシテハ図ノ如キ上面ニ可動性ノ蓋ヲ有スル方形ノ木箱ヲ用ヒ、其側面ニ上顎ノ模型ヲ付シ上面ノ蓋ニ下顎ヲ付シテ蓋ヲ移動セシメタリ（図略）

蜜蝋ノ陽模型ハ通例同一陰型ヨリ三個ヲ作レリ、勿論陰型ヲ損スルコトナク陽型ヲ分離スルヲ得

床ハ全部用トシテハ主ニ黄楊、時ニハ象牙ヲ用ヒ、局部用ニハ蝋、石鯱、「ウサイ」角トヲ用ヒタリ、歯牙ト床トヲ同時ニ彫刻スルニハ多ク黄楊象牙ヲ用フ、マタ歯牙ニハ此ノ外天然歯牛歯ヲモ用フ、黄楊ハ何レノ場合ニ於テモ最モ多ク応用セラレタル所ニテ、予メ大釜ニ入レテ煮沸シ、更ニ四斗樽ニ入レテ水ニ浸漬シ、二三回水ヲ交換シタル後三四年間貯蓄セルモノ可トセリ

床及ビ歯牙ヲ製作スルニハマヅ材料ヲ鋸ニテ切リ大体ノ形状ヲ作リ之ヲ刀ニテ削ル、此ノ削リ方ニ独特ノ方法アリ、之ヲ固定スルニハ三味線絲ヲ用フルヲ常トス又木ノ磨滅ヲ防グニハ銀鋲金鋲ヲ打

付クルモノトス
以上ハ渡邊良齋ガ明治九年以前ニ施シタル治療術式ノ一般ナリ

【開業試験沿革】

本邦ニ歯科医術開業試験アルハ明治八年ニ始マル是歳八月小幡英之助東京大学ニ出願シテ試験セラレンコトヲ請フ当時ハカヽル先例ナカリシヲ以テ医科大学校長長與専齋諸教授ト計ルトコロアリ熟議ノ結果教授赤星晳（ママ）造試験主任トナリ長與校長、事務長草郷清四郎、幹事長三輪光五郎、教授石黒忠悳、同三宅秀列席ノ上試験ヲ行ヘリ問題ハ歯鍵ノ用法、抜去シタル臼歯ニツキテ其ノ名称左右孰レナルカ及ビ抜歯法、ハッチンソン氏歯ニ関スルコト等ナリシガ答弁流ルヽガ如クニシテ試験官ヲ驚嘆セシメタリ〔以上小幡ノ伝ニアリ〕
其後佐治職兵庫県ニ於テ口中科ノ試験ヲ受ケタルガ其ノ状況ハ知ルニ由ナシ
十一年三月桐村克己試験ヲ東京病院ニ受ケテ合格セシガ時ノ委員長ハ長谷川泰委員ハ山崎元修ナリ
２０１病院ハ今ノ東京慈恵会医院所在地ナリ試験科目ハ解剖生理病理ノ三科ニシテ各二問題ヅヽナリ今解剖ノ一題ヲ逸ス
　解剖、歯牙発生順序ノ起元及ビ上下両顎歯槽突起ト歯齦ノ構造ヲ記載ス可シ
　生理　（一）歯牙各個ノ生理機能及ビ歯牙ヲ栄養スル血管神経ヲ記載ス可シ
（二）口腔内分泌液ノ種類性質及ビ分泌腺ノ所在排泄管ノ開口部ヲ記載ス可シ
　病理　（一）歯牙ノ外傷治療機能歯牙脱臼外傷ノ為列位ヲ変ズルモノヽ処置及歯根膜炎ヲ詳細ニ論ズ可シ
（二）歯牙腐骨症即チ腐歯ハ重ニ何歯ニ起ルヤ症状原因治療特ニ之ニ要スル薬品器械ヲ詳細ニ記載ス可シ
十二年五月渡邊晋三西村輔三試験ヲ東京ニ受ク委員氏名又試験問題皆逸シテ伝ハラズ
十三年富永省吾試験ヲ東京ニ受ク委員ハ三宅秀大澤謙二ナリ問題ハ逸シテ伝ハラズ
十三年十一月高田直友試験ヲ東京ニ受ク委員ハ新宮涼園、吉田顯三、桑田衡平ノ三人ナリ問題ハ逸シテ伝ハラズ
十四年二月伊藤順二、高木五三郎、開業試験ヲ東京病院ニ受ケシガ是ノ時ノ委員長ハ長谷川泰委員ハ足立寛田口元良ナリキ
　試験問題ハ歯牙神経ノ種類根源本幹経路中歯牙中ノ分布〇歯萌発育乳歯名称及数不換歯名称及数〇歯牙ノ形状生歯ノ順序〇歯痛原因症候診断治法鎮痛薬〇抜歯術適症局所麻薬歯鍵用法歯鉗用法抜歯後出血所置〇填歯術適症及主意填歯用護謨製法及其「アマルガ」製法及用法金箔製法及其用法以上三法ノ得失如何ナリ
十五年長谷川友二試験ヲ東京病院ニ受ク此ノ時ノ試験委員ノ氏名ハ伝ハラズ問題ハ左ノ如シ
　解剖、各歯牙ノ形状及ビ歯根ノ方向ハ如何
　生理、歯牙ノ効用及ビ乳歯根消耗ノ理ハ如何
　薬物、麻酔剤ノ種類用量用法及ビ救急法ヲ記セ
　病理、歯齦炎ノ原因及ビ療法
　抜歯術適応症器械ノ種類及用法竝ニ抜歯後ノ措置
十五年五月　鈴木直之丞、林讓治、原田朴哉試験ヲ横浜ニ受ク委員ハ岡玄卿伊澤道盛ナリキ
十六年二月　桑原敬忠試験ヲ東京ニ受ク
十六年三月　庄子才之進試験ヲ仙台ニ受ク
十六年四月　瓜生源太郎試験ヲ東京ニ受ク石坂軍医以下数名委員タリキ

十六年七月　鈴藤文一郎試験ヲ東京ニ受ク
十六年九月　俣野景範試験ヲ横浜ニ受ク
　増島省三、堀内清顯、關川重吉（吾）、奥田又郎等ノ試験ヲ受ケタル年月、委員ノ氏名問題皆知ルニ由ナシ
　マタ十年十一年ノ交伊澤道盛受験セシ由ヲ伝ヘ高山紀齋モ十一年四月帰朝ノ後間モナク受験セシガ如クナレドモ之ヲ徴スル材料ヲ有セズ

【年　表】

明治元年
五　月　清水卯三郎仏蘭西巴里ヨリ帰朝シ浅草森田町ニ店舗ヲ開キ穂積（瑞穂）屋ト号ス
是　歳　渡邊良齋法眼医師ノ格式ヲ以テ始メテ業ヲ下谷御徒町ニ開ク
米国歯科医ウイントト云フモノ是ヨリ先香港ニ開業セシガ是ニ至リテ毎年三ケ月ノ間横浜ニ出張スルコトヽナル

明治二年
二　月　松添寳一父寳泉ノ後チヲ承ケテ大村藩ノ口科医タリ
四　月　竹澤國三郎口中治療ノ業ヲ開ク
十一月　高山紀齋東京ニ来リテ慶応義塾ニ学ブ
十二月　イーストレーキ我国ヲ去ル其ノ門生長谷川保官許ヲ得テ従フ、イーストレーキハ万延元年初メテ我国ニ来リ滞在実ニ十年ニ及ベリ
是　歳　小幡英之助志ヲ立テヽ東京ニ来リ慶応義塾ニ学ブ、居ルコト幾モナクシテ芝新銭座ニ開業セル中津ノ医師佐野諒元ノ門ニ入ル、渡邊良齋神田旅籠町ニ移ル、穂積屋（瑞穂）日本橋本町ニ転ズ

明治三年
十一月　第十四世松井源水歿シ第十六世源水継グ
是　歳　米国歯科医エリオット横浜ニ来リテ業ヲ開ク

明治四年
秋　　小幡英之助横浜十全病院長近藤良薫ノ門生トナル

明治五年
一　月　高山紀齋米国ニ赴ク
是　歳　小幡英之助エリオットノ門ニ入ル

明治六年
五　月　イーストレーキ上海ヲ去リテ独逸国ニ向フ、長谷川保マタ之ニ従ヒテ独逸ニ行ク
是　歳　桐村克己東京ニ出ヅ

明治七年
一　月　免養九一大ニ歯科学ノ風潮ニ就キ感ズルトコロアリ仏人アレクサンドルノ門ニ入リ洋式歯科学ヲ修ム
七　月　十三日第四世長井兵助歿ス
是　歳　佐治職エリオットノ門ニ入ル、西村輔三豊岡藩老岩崎氏ニ従ヒテ米国ニ至ル、池野谷貞司アレクサンドルノ教ヲ受ケ、井野春毅熊本医学校ニ入学ス、林讓治横浜ニ至ル、エリオット横浜ヲ去リテ上海ニ赴ク、小幡英之助随行シテ翌年マデ其ノ地ニ在リ

年　表

明治八年

一　月　免養九一アレクサンドルノ門ヲ去リ神翁金齋（先代）ノ門ニ入ル、竹澤國三郎アレクサンドルノ許ニ通学ス

六　月　小幡英之助上海ヨリ帰ル、師エリオット英国ニ向フヲ以テナリ、關川重吾高田直友小幡ノ門生トナル

七　月　竹澤國三郎官許ヲ得テアレクサンドルヲ傭ヒ入レ其ノ独占教師トナス

八　月　小幡英之助東京大学ニ試験ヲ受ケテコレニ合格ス

十一月　桐村克己小幡ノ門ニ入ル

是　歳　佐治職兵庫県ニ帰リ試験ヲ受ケ合格ス、伊澤道盛信崇アレクサンドルノ門ニ入ラントセシモ竹澤國三郎ニ傭ハルヽ故ヲ以テ能ハズ、小幡ノ教ヲ受クルコトヽナル、高橋富士松、池野谷貞司モ小幡ノ教ヲ受ク、穂積（瑞穂）屋ノ手ニテ初メテ歯科ノ器械ヲ米国ニ注文ス、米国歯科医ポルケンス横浜ニ来ル、林讓治、山田利充ノ門ニ入ル

明治九年

三　月　長谷川保独逸国ヨリ帰朝シ本所横網ニ開業ス

六　月　竹澤國三郎アレクサンドルヨリ免状ヲ受ク、松添寳一長崎県ニ於テ口中科ノ免状ヲ受ク、爾来佐世保ニ業ヲ開ク

八　月　高木五三郎小幡ノ門ニ入ル

是　歳　小幡渡邊長谷川ノ三氏及其ノ門生倉成愼治桐村克己富安晋等日本橋倉田屋ニ懇親会ヲ開キテ提携センコトヲ約ス、井野春毅熊本医学校ヲ卒業シ同校ノ当直医トナル、黒田虎太郎英人ブラオンノ周旋ニテ英国ニ渡航ス雨夜孝太郎医ヲ神戸ニ行フ

明治十年

是　歳　伊澤道盛試験ヲ受ク、西村輔三帰朝シポルケンスノ門ニ入ル、松岡萬藏死シテ助手ヲ失ヒタルガタメナリ、大阪緒方病院ニ歯科部設ケラレ佐治職其ノ主任トナル、井野春毅警察医トシテ西南ノ役ニ従軍ス、佐藤重東京ニ出デヽ伊澤ノ門ニ入ル、吉田仙正開業ス、第一回内国勧業博覧会開カル、渡邊良齋出品シテ賞ヲ受ク

明治十一年

三　月　桐村克己試験ニ及第ス

四　月　高山紀齋帰朝ス、試験ヲ受ケテ業ヲ京橋銀座ニ開ク

五　月　神翁金齋（先代）死シ其子継グ

是　歳　堀内清顯渡邊晋三關川重吾等ポルケンスノ門ニ入ル、西村輔三ポルケンス出張所ヲ作リ治療ヲ行フ、ポルケンス帰国ス、大阪緒方病院歯科部廃セラル、佐治職同志社ニ入ル、佐藤重長谷川保ノ門ニ入ル、富永省吾小幡ノ門ニ入ル、瓜生源太郎東京ニ出ヅ井野春毅内外科試験ヲ受ケテ及第ス

明治十二年

五　月　渡邊晋三試験ニ合格ス

八　月　桐村克己業ヲ京橋丸屋町ニ開ク、鈴藤文一郎其ノ門ニ入ル

是　歳　西村輔三及第ス堀内清顯ノ及第モ此ノ年ナルベシ、吉田仙正神翁金齋ノ門ニ入ル、井野春毅感ズルトコロアリ小幡ニ就キテ歯科ヲ修ム、エリオット倫敦ニ赴ク

明治十三年

三　月　伊藤順二高山ノ門ニ入ル、免養九一神翁家ヲ卒業ス

四　月　渡邊晋（三）モ堀内清顯ト共ニ京都ニ開業ス

七　月　俣野景範小幡ノ門ニ入ル

十一月　高田直友及第ス
是　歳　ギューリッキ横浜ニ来リ神戸ニ赴キ開業ス、佐治職此ノ人ノ助手トナル、雨夜孝太郎就キテ歯科ヲ学ブ、伊澤道盛ノ「固齢草」成ル、桐村克己ノ「歯ノ養生」成ル、免養九一下関ニ業ヲ開ク、富永省吾及第ス、イーストレーキ再ビ我国ニ来ル佐藤重其ノ助手トナル

明治十四年

二　月　高木五三郎伊藤順二及第ス
五　月　高山紀齋ノ「保歯新論」成ル
九　月　林譲治佐治ノ門ニ入ル
是　歳　西村輔三大阪ニ赴ク、高田直友宮城病院ニ聘セラレ、庄子才之進其ノ門ニ入ル、雨夜孝太郎神戸ニ歯科ヲ開業ス、井野春毅歯科ノ業ヲ神田今川小路ニ開ク、黒田虎太郎帰朝ス、高山歯科解剖図歯科薬物学提要ヲ著ハス、第二回内国勧業博覧会開カル渡邊良齋出品シテ賞ヲ受ク

明治十五年

二　月　俣野景範小幡ノ門ヲ去リ高木ノ門ニ入ル
三　月　伊藤順二小幡式歯科治療法ヲ研究ス、高木五三郎横浜ニ開業ス
五　月　二十日原田朴哉鈴木直之丞林譲治横浜ニ於テ試験ヲ受ケ及第ス
七　月　長谷川友二及第ス
十　月　伊藤順二名古屋ニ開業ス
十一月　免養九一免状ヲ得
十二月　長谷川友二業ヲ新潟ニ開ク
是　歳　關川重吾横浜ニ開業

明治十六年

三　月　庄子才之進仙台ニ於テ試験ヲ受ケ及第ス、黒田虎太郎横浜ニ開業ス
四　月　瓜生源太郎及第ス
五　月　高田直友宮城病院ヲ辞シテ東京ニ帰ル、其ノ門生庄子才之進後ヲ承ケテ宮城病院ニ入ル
七　月　鈴藤文一郎及第ス
九　月　俣野景範横浜ニ受験シ及第ス
十二月　桑原敬忠及第ス

明治十七年

三　月　佐藤重長谷川保ノ門ヲ出デヽ開業ス
四　月　試験制度改正セラレ三瀦信三（謙三）最初ノ委員トナル是ヨリ先井野春毅試験委員タリシガ是ニ至リテ辞セリ
五　月　旧来ノ免状ヲ書換フ
九　月　三瀦信三委員ヲ辞シ高山紀齋コレニ代ル
十　月　二十四日原田朴哉海軍軍医補トナル、是月松下良貞歿ス
是　歳　西村輔三大阪ニ於ケル開業試験委員トナル、富永省吾山口県病院ノ医員トナル

明治十八年

一　月　俣野景範長野ニ業ヲ開ク
九　月　十六日第五世長井兵助歿ス
是　歳　ギューリック米国ニ帰ル、佐治職米国ニ赴キ其地ノ歯科医カーグスニ就キテ研究ス、庄子才之進病院ヲ辞シテ仙台ニ開業ス、井野春毅宮内省臨時御用掛トナル、高山紀齋大日本私立衛生会学科審査員トナル

明治十九年

五　月　鈴藤文一郎業ヲ京橋区三十間堀ニ開ク

九　月　伊藤順二名古屋ニ於ケル開業試験委員トナル

是　歳　小幡派ノ交詢会成立ス、伊澤道盛試験委員トナリ、高山紀齋ト交代シテ試験スルコトヽナル、井野春毅京城ニ赴ク、富永省吾県立病院ヲ辞ス

明治二十年

二　月　イーストレーキ東京ニ歿ス

三　月　堀内清顯試験委員トナル

七　月　高山紀齋侍医局勤務ヲ仰付ケラル

十　月　渡邊晉三京都ニ於ケル試験委員トナル

是　歳　佐治職米国ヨリ帰リ業ヲ大阪ニ開ク、鈴木玉齋神田ニ開業ス

「注意」此ノ年表ニハ明治初年ヨリ二十年ヲ挙ゲ置キタリ、十八年以後ハ未研究ノ部分ナレバナホ増補ノ要アルベシ。

附　表（略）

巻末言

以上ノ記載ノ各伝記中訂正、或ハ増補ヲ要スル個所発見セラレシ場合ハ、随時事務所迄御申越シヲ乞フ。

大正十五年十二月二十三日印刷
昭和元年　十二月二十五日発行　　（非売品）

発行兼編集者　東京市本郷区金助町六十七番地
高橋直太郎
電話　小石川三八三七番
印刷者　東京市本郷区湯島三組町八十一番地
川邊多門
印刷所　東京市本郷区湯島三組町八十一番地
川邊活版所
電話　下谷一六五二番

発行所　東京市神田区錦町九番地田村一吉方
社団法人　大日本歯科医学会
電話　神田四〇五五番
振替口座東京四四二二二番